

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	学部/学科の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン ショウトウカクエン 学校法人 修道学園									
フリガナ大学の名称	ヒロシマショウトウカクイフク 広島修道大学									
大学本部の位置	広島県広島市安佐南区大塚東一丁目1番1号									
大学の目的	本学は、「道を修める」という建学の精神に基づき、「地球的視野を持って、地域社会の発展に貢献できる人材の養成」を理念、教育目標として掲げ、広く知識を授けるとともに、深く専門の学術を教授研究し、知的、道徳的及び応用能力を涵養することを目的とする。									
新設学部等の目的	「社会に生起する問題を発見」し、多様な価値観や文化・属性を有する人々の「多様性を理解」し、社会的現実を解明するために「社会調査による実証研究を実施」し、社会学が蓄積した理論的枠組みや方法に基づき「理論的に思考」し、社会に生起する問題を解決に導くために「社会を構想し提言する」能力をもつ人材の養成を目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	人文学部 社会学科	年	人	年次人	人	学士 (社会学)	年月 令和6年4月 第1年次	広島県広島市安佐南区大塚東一丁目1番1号		
	計	4	95	—	380					
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	人文学部人間関係学科社会学専攻(廃止) (△60) ※令和6年4月学生募集停止 人文学部社会学科 (95) (令和5年4月届出) 人文学部英語英文学科 [定員減] (△10) (令和6年4月)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	人文学部 社会学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位				
		274科目	109科目	71科目	454科目					
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
				教授	准教授	講師	助教	計		
	新設分	人文学部 社会学科	8 (8)	3 (1)	0 (0)	1 (0)	12 (9)	0 (0)	153 (123)	
		計	8 (8)	3 (1)	0 (0)	1 (0)	12 (9)	0 (0)	— (—)	
		既設分	商学部 商学科	8 (8)	4 (2)	0 (0)	0 (2)	12 (12)	0 (0)	72 (72)
	経営学科		7 (8)	4 (3)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	72 (72)	
	全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)		5 (6)	4 (4)	2 (2)	1 (0)	12 (12)	0 (0)	147 (147)	
	教職課程担当		0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	
	経済科学部 現代経済学科		6 (7)	4 (3)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	16 (16)	
	経済情報学科		6 (6)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	16 (16)	
	全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)		5 (4)	3 (4)	3 (3)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	147 (147)	
	教職課程担当		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	
	分	人文学部 教育学科	8 (8)	2 (3)	0 (0)	1 (0)	11 (11)	0 (0)	105 (105)	
		英語英文学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	105 (105)	
		全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	147 (147)	

教 員 組 織 の 概 要	既 設 分	教職課程担当	4 (4)	1 (0)	0 (0)	0 (1)	5 (5)	0 (0)	9 (9)	
		法学部 法律学科	7 (7)	7 (5)	0 (0)	0 (2)	14 (14)	0 (0)	28 (28)	
		全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)	5 (5)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	147 (147)	
		教職課程担当	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	
		人間環境学部 人間環境学科	9 (9)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	26 (26)	
		既設分 全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	147 (147)	
		教職課程担当	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	
		健康科学部 心理学科	11 (12)	0 (0)	1 (1)	1 (0)	13 (13)	0 (0)	19 (19)	
		健康栄養学科	7 (7)	3 (4)	0 (0)	1 (0)	11 (11)	5 (5)	19 (19)	
		全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)	1 (2)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	147 (147)	
		教職課程担当	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	
		国際コミュニティ学部 国際政治学科	6 (6)	1 (2)	0 (0)	1 (0)	8 (8)	0 (0)	16 (16)	
		地域行政学科	5 (5)	2 (1)	0 (0)	1 (2)	8 (8)	0 (0)	16 (16)	
		全学共通教育担当 (教養・外国語・保健体育科目)	3 (5)	0 (0)	1 (1)	2 (0)	6 (6)	0 (0)	147 (147)	
		教職課程担当	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	
		計	116 (122)	53 (48)	10 (10)	10 (9)	189 (189)	5 (5)	- (-)	
		合計	124 (130)	56 (49)	10 (10)	11 (9)	201 (198)	5 (5)	- (-)	
		教員以外の職員の概要	職 種	専 任	兼 任	計				
			事務職員	106 (106)	62 (65)	168 (171)				
技術職員	0 (0)		0 (0)	0 (0)						
図書館専門職員	7 (7)		12 (12)	19 (19)						
その他の職員	0 (0)		0 (0)	0 (0)						
計	113 (113)		74 (77)	187 (190)						
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	完成年度まで に実施予定の 建設工事 【令和5年】 ・テニス・バレーコート 竣工 ・新体育館建設 開始 【令和7年前期】 ・新体育館竣工 【令和7年後期】 ・旧体育館解体 【令和8年前期】 ・旧体育館跡地 に駐車場整備				
	校舎敷地	37,146㎡	0㎡	0㎡	37,146㎡					
	運動場用地	91,774㎡	0㎡	0㎡	91,774㎡					
	小 計	128,920㎡	0㎡	0㎡	128,920㎡					
	そ の 他	209,955㎡	0㎡	0㎡	209,955㎡					
	合 計	338,875㎡	0㎡	0㎡	338,875㎡					
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計						
	70,640㎡ (70,640㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	70,640㎡ (70,640㎡)						
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	97室	16室	64室	18室 (補助職員一人)	7室 (補助職員一人)					

専任教員研究室		新設学部等の名称			室数				
		人文学部社会科学部			12			室	
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	学部単位での 特定不能なため、 大学全体の数	
	人文学部社会科学部	942,073 [244,733] (921,073 [241,493])	24,091 [15,333] (24,091 [15,333])	12,726 [12,651] (12,726 [12,651])	24,911 (24,491)	()	()		
	計	942,073 [244,733] (921,073 [241,493])	24,091 [15,333] (24,091 [15,333])	12,726 [12,651] (12,726 [12,651])	24,911 (24,491)	()	()		
図書館	面積	閲覧座席数		収納可能冊数		大学全体 完成年度までに実施予定の 建設工事 【令和5年】 ・テニス・バレーコート 竣工 ・新体育館建設 開始 【令和7年前期】 ・新体育館竣工 【令和7年後期】 ・旧体育館解体 【令和8年前期】 ・旧体育館跡地に 駐車場整備			
	11,700㎡	922		1,200,000					
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						10,525㎡ 屋内プール1面 野球場1面 陸上競技場1面 アーチェリー場1面	
	10,525㎡								
経費の見積り 及び 維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	届出学科全体 図書費には電子 ジャーナル・ データベース整備 費（運用コスト 含む）を含む
	教員1人当り研究費等		676千円	676千円	676千円	676千円	－千円	－千円	
	共同研究費等		1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円	
	図書購入費	0千円	3,557千円	6,645千円	9,753千円	12,886千円	－千円	－千円	
	設備購入費	0千円	1,958千円	3,936千円	5,928千円	7,935千円	－千円	－千円	
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
	商学部	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円		
	人文学部社会科学部	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円		
	人文学部教育学部	1,030千円	1,030千円	1,030千円	1,030千円	－千円	－千円		
	人文学部英語英文学部	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円		
	法学部	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円		
	経済学部現代経済学科	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円		
	経済学部経済情報学科	1,030千円	1,030千円	1,030千円	1,030千円	－千円	－千円		
	人間環境学部	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円		
	健康学部心理学科	1,040千円	1,040千円	1,040千円	1,040千円	－千円	－千円		
健康学部健康栄養学科	1,120千円	1,120千円	1,120千円	1,120千円	－千円	－千円			
国際コミュニケーション学部国際政治学科	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円			
国際コミュニケーション学部地域行政学科	1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－千円	－千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入等						
既設大学の状況	大学の名称	広島修道大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	商学部	年	人	年次人	人		倍		広島市安佐南区 大塚東一丁目1番1号
	商学科	4	155	－	620	学士（商学）	1.11	昭和35年度	
	経営学科	4	140	－	560	学士（経営学）	1.12	昭和38年度	
	経済学部						1.10		
	現代経済学科	4	115	－	460	学士（経済科学）	1.10	平成9年度	
	経済情報学科	4	115	－	460	学士（経済科学）	1.09	平成9年度	
	人文学部						1.05		
	人間関係学科 社会学専攻	4	60	－	240	学士（文学）	1.01	昭和48年度	
	教育学科	4	100	－	400	学士（教育学）	1.10	平成28年度	
	英語英文学科	4	110	－	440	学士（文学）	1.04	昭和48年度	
法学部						1.11			
法律学科	4	195	－	780	学士（法学）	1.11	昭和51年度		
人間環境学部						1.11			
人間環境学科	4	115	－	460	学士（人間環境学）	1.11	平成14年度		

既 設 大 学 等 の 状 況	健康科学部						1.07		
	心理学科	4	80	—	320	学士(心理学)	1.17	平成29年度	
	健康栄養学科	4	80	—	320	学士(栄養学)	0.96	平成29年度	
	国際コミュニティ学部						1.09		
	国際政治学科	4	75	—	300	学士(国際政治学)	1.04	平成30年度	
	地域行政学科	4	75	—	300	学士(地域行政学)	1.14	平成30年度	
	商学研究科								
	商学専攻						0.04		
	博士前期課程	2	8	—	16	修士(商学)	0.00	昭和46年度	
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(商学)	0.16	昭和48年度	
	経営学専攻						0.24		
	博士前期課程	2	12	—	24	修士(経営学)	0.33	昭和52年度	
	博士後期課程	3	3	—	9	博士(経営学)	0.00	昭和52年度	
	経済科学研究科								
	現代経済システム専攻						0.13		
	博士前期課程	2	8	—	16	修士(経済学又は経済情報)	0.18	平成13年度	
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(経済学)	0.00	平成15年度	
	経済情報専攻						0.04		
	博士前期課程	2	8	—	16	修士(経済学又は経済情報)	0.00	平成13年度	
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(経済情報)	0.16	平成15年度	
	人文科学研究科								
	心理学専攻						0.47		
	博士前期課程	2	14	—	28	修士(心理学)	0.50	昭和53年度	
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(心理学)	0.33	昭和56年度	
	社会学専攻 修士課程	2	5	—	10	修士(社会学)	0.60	昭和59年度	
	教育学専攻 修士課程	2	5	—	10	修士(教育学)	0.20	昭和59年度	
	英文学専攻						0.31		
博士前期課程	2	5	—	10	修士(文学)	0.60	昭和53年度		
博士後期課程	3	3	—	9	博士(文学)	0.00	昭和56年度		
法学研究科									
法律学専攻 修士課程	2	5	—	10	修士(法学)	1.20	昭和56年度		
国際政治学専攻 修士課程	2	10	—	20	修士(国際政治学)	0.10	平成6年度		
附属施設の概要	該当なし								

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

学校法人修道学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
広島修道大学				広島修道大学				
商学部 商学科	155	—	620	商学部 商学科	155	—	620	
商学部 経営学科	140	—	560	商学部 経営学科	140	—	560	
経済科学部 現代経済学科	115	—	460	経済科学部 現代経済学科	115	—	460	
経済科学部 経済情報学科	115	—	460	経済科学部 経済情報学科	115	—	460	
人文学部 人間関係学科 社会学専攻	60	—	240	人文学部 人間関係学科 社会学専攻	<u>0</u>	—	<u>0</u>	令和6年4月学生募集停止
				人文学部 社会学	<u>95</u>	—	<u>380</u>	学科の設置(届出)
人文学部 教育学科	100	—	400	人文学部 教育学科	100	—	400	
人文学部 英語英文学科	110	—	440	人文学部 英語英文学科	<u>100</u>	—	<u>400</u>	定員変更(△10)
法学部 法律学科	195	—	780	法学部 法律学科	195	—	780	
人間環境学部 人間環境学科	115	—	460	人間環境学部 人間環境学科	115	—	460	
健康科学部 心理学科	80	—	320	健康科学部 心理学科	80	—	320	
健康科学部 健康栄養学科	80	—	320	健康科学部 健康栄養学科	80	—	320	
国際コミュニティ学部 国際政治学科	75	—	300	国際コミュニティ学部 国際政治学科	75	—	300	
国際コミュニティ学部 地域創造学科	75	—	300	国際コミュニティ学部 地域創造学科	75	—	300	
計	1,415	—	5,660	計	<u>1,440</u>	—	<u>5,760</u>	
広島修道大学大学院				広島修道大学大学院				
商学研究科 商学専攻(M)	8	—	16	商学研究科 商学専攻(M)	8	—	16	
商学研究科 商学専攻(D)	2	—	6	商学研究科 商学専攻(D)	2	—	6	
商学研究科 経営学専攻(M)	12	—	24	商学研究科 経営学専攻(M)	12	—	24	
商学研究科 経営学専攻(D)	3	—	9	商学研究科 経営学専攻(D)	3	—	9	
経済科学研究科 現代経済システム専攻(M)	8	—	16	経済科学研究科 現代経済システム専攻(M)	8	—	16	
経済科学研究科 現代経済システム専攻(D)	2	—	6	経済科学研究科 現代経済システム専攻(D)	2	—	6	
経済科学研究科 経済情報専攻(M)	8	—	16	経済科学研究科 経済情報専攻(M)	8	—	16	
経済科学研究科 経済情報専攻(D)	2	—	6	経済科学研究科 経済情報専攻(D)	2	—	6	
人文科学研究科 心理学専攻(M)	14	—	28	人文科学研究科 心理学専攻(M)	14	—	28	
人文科学研究科 心理学専攻(D)	2	—	6	人文科学研究科 心理学専攻(D)	2	—	6	
人文科学研究科 社会学専攻(M)	5	—	10	人文科学研究科 社会学専攻(M)	5	—	10	
人文科学研究科 教育学専攻(M)	5	—	10	人文科学研究科 教育学専攻(M)	5	—	10	
人文科学研究科 英文学専攻(M)	5	—	10	人文科学研究科 英文学専攻(M)	5	—	10	
人文科学研究科 英文学専攻(D)	3	—	9	人文科学研究科 英文学専攻(D)	3	—	9	
法学研究科 法律学専攻(M)	5	—	10	法学研究科 法律学専攻(M)	5	—	10	
法学研究科 国際政治学専攻(M)	10	—	20	法学研究科 国際政治学専攻(M)	10	—	20	
計	94	—	202	計	94	—	202	

教育課程等の概要

(人文学部社会科学)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
主専攻科目	野外運動実習Ⅱ(キャンプ発展)	1・2前		1				○							兼1	集中 集中	
	野外運動実習Ⅱ(スキー発展)	1・2後		1				○							兼1		
	小計(30科目)	—	0	35	0			—	0	0	0	0	0	0	兼18	—	
	デ ザ イ リ ア 科 目	大学生活とキャリア	1③		1		○									兼1	
		インターンシップ入門	1④		1		○									兼1	
		キャリアビジョンとキャリア形成	2・3前		2		○									兼1	
		広島の事業承継を学ぶ	2・3後		2		○									兼1	
	小計(4科目)	—	0	6	0			—	0	0	0	0	0	0	兼1	—	
	ス デ ィ タ サ イ エ ン 科 目	データサイエンス概論	1後		2		○									兼1	
		情報処理入門	1前		2		○									兼1	
		統計学	1・2前		2		○									兼1	
		情報化社会と人間	1・2前		2		○									兼2	
		情報と知能	1・2前		2		○									兼1	
	小計(5科目)	—	0	10	0			—	0	0	0	0	0	0	兼5	—	
	人 文 学 部 総 合 科 目	現代社会学	1・2後		2		○				1					兼1	集中 集中
差別問題論		1前		2		○									兼1		
ヒロシマ文化論Ⅰ		1・2前		2		○									兼1		
ヒロシマ文化論Ⅱ		1・2後		2		○									兼1		
ジェンダー論		2・3前		2		○									兼1		
女の人間学		2・3後		2		○									兼1		
比較社会学		1・2前		2		○									兼1		
共生社会学		1・2後		2		○									兼1		
ボランティア論		1・2後		2		○									兼1		
社会文化体験演習		2・3通		2					○	1					兼4		
海外体験演習		2・3通		2					○						兼1		
Media EnglishⅠ		2・3前		2		○									兼1		
Media EnglishⅡ		2・3後		2		○									兼1		
Business EnglishⅠ		2・3前		2		○									兼3		
Business EnglishⅡ		2・3後		2		○									兼3		
環境文学論		1・2前		2		○									兼1		
物語と歴史		2・3前		2		○									兼1		
教育文化論		2・3前		2		○									兼1		
芸術文化論		1・2後		2		○									兼2		
社会の中の言語		3・4後		2		○									兼1		
日本文化史Ⅰ		1・2前		2		○									兼1		
日本文化史Ⅱ		1・2後		2		○									兼1		
日本文化論(浮世絵)		1・2前		2		○									兼1		
日本文化論(和紙)		1・2後		2		○									兼1		
日本文学演習Ⅰ(崩し字解説・平仮名)		1・2前		2				○							兼1		
日本文学演習Ⅱ(崩し字解説・古典文学)		1・2後		2				○							兼1		
日本史演習Ⅰ(崩し字解説・漢字)		1・2前		2				○							兼1		
日本史演習Ⅱ(崩し字解説・古文書)		1・2後		2				○							兼1		
日本古典文学論		1・2後		2		○									兼1		
西洋文化史		2・3後		2		○									兼1		
西洋文化史演習		2・3後		2				○							兼1		
小計(31科目)	—	0	62	0			—	2	0	0	0	0	0	兼20	—		

オムニバス・共同(一部)

教育課程等の概要															
(人文学部社会学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
社会学専門科目	専門講義科目 理論・方法に関する科目	社会学基礎講座	1①	1			○			1					隔年
		社会学研究入門Ⅰ	1前	2			○			2	1				
		社会学研究入門Ⅱ	1後	2			○			2	1				
		社会学方法論	1後	2			○			1					
		社会学概論	1前	2			○			1					
		社会学理論	2前	2			○			1					
		応用社会学	2・3・4後		2			○		1					
		コミュニケーション論	2・3・4前		2			○		1					
		社会意識論	2・3・4前		2			○		1					
		感情社会学	2・3・4前		2			○		1					
		比較社会学	2・3・4前		2			○			1				
		社会学研究法	2後	2				○		2	2				
小計 (12科目)		—	13	10	0	—			7	3	0	0	0	兼	—
社会学の諸領域に関する科目	アニメ社会学	2・3・4後		2			○		1					隔年	
	クールジャパン現象研究	2・3・4後		2			○		1					隔年	
	犯罪社会学	2・3・4後		2			○		1						
	エリア・スタディーズ	2・3・4前		2			○		1						
	ボーダー・スタディーズ	2・3・4後		2			○		1						
	国際社会学Ⅰ	2・3・4前		2			○		1						
	国際社会学Ⅱ	2・3・4後		2			○		1						
	現代社会論	2・3・4前		2			○		1						
	産業社会学	2・3・4後		2			○		1					隔年	
	労働社会学	2・3・4後		2			○			1					
	カルチュラル・スタディーズ	2・3・4後		2			○		1						
	文化社会学	2・3・4前		2			○		1						
	消費社会論	2・3・4後		2			○		1					隔年	
	感情労働論	2・3・4後		2			○		1					隔年	
	親密性の社会学	2・3・4前		2			○		1					隔年	
	性現象論	2・3・4前		2			○		1					隔年	
	クィア・スタディーズ	2・3・4後		2			○		1						
	都市社会学	2・3・4前		2			○						兼1		
	地域社会学	2・3・4後		2			○						兼1		
	サブカルチャーの社会学	2・3・4前		2			○						兼1		
	ポップカルチャーの社会学	2・3・4後		2			○						兼1		
宗教社会論	2・3・4前		2			○			1						
伝統文化論	2・3・4後		2			○			1						
マイグレーション・スタディーズ	2・3・4後		2			○			1						
社会問題の社会学	2・3・4前		2			○			1						
表象文化論	2・3・4後		2			○						兼1			
音楽社会学	2・3・4前		2			○						兼1			
現代社会学特殊講義	2・3・4前		2			○						兼1	集中		
社会学特殊講義	2・3・4後		2			○						兼1	集中		
小計 (29科目)		—	0	58	0	—			7	3	0	0	0	兼5	—
社会構想に関する科目	マスメディア論Ⅰ	1・2前		2			○							兼1	
	マスメディア論Ⅱ	1・2後		2			○							兼1	
	ジャーナリズム論Ⅰ	1・2前		2			○							兼1	
	ジャーナリズム論Ⅱ	1・2後		2			○							兼1	
	社会安全政策論	1・2前		2			○		2					兼15	オムニバス・共同
	社会構想と公共政策	1・2・3・4後		2			○							兼4	オムニバス・集中
小計 (6科目)		—	0	12	0	—			2	0	0	0	0	兼21	—
社会調査関連科目	社会調査概論	1前	2				○		1						
	社会調査方法論	1後	2				○		1						
	社会調査論Ⅰ（資料・データ分析）	2前		2			○		1						
	社会調査論Ⅱ（統計学）	2後		2			○		1						
	量的社会調査法（多変量解析）	2前		2			○		1						
	質的社会調査法	2後		2			○			2					
小計 (6科目)		—	4	8	0	—			1	2				兼	—

教育課程等の概要															
(人文学部社会科学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
演習科目 専門演習科目	コミュニケーション論演習（メディアと文化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	コミュニケーション論演習（メディアと表現）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	コミュニケーション論演習（ネットメディアと文化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	コミュニケーション論演習（ネットメディアと表現）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	アニメ社会学演習（コンテンツと文化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	アニメ社会学演習（ネットコンテンツと文化）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	クールジャパン現象研究演習（コンテンツと表現）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	クールジャパン現象研究演習（ネットコンテンツと表現）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	社会意識論演習（表象文化とジェンダー）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	社会意識論演習（文化とアイデンティティ）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	社会意識論演習（法制度とジェンダー）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	社会意識論演習（仕事と生活の調和）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	犯罪社会学演習（社会的排除と不平等）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	犯罪社会学演習（管理される性と生）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	犯罪社会学演習（逸脱の医療化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	犯罪社会学演習（防犯対策とコミュニティ）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	国際社会学演習（グローバリゼーションと社会変動）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	国際社会学演習（西欧とアジア）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	国際社会学演習（非西欧と脱西欧化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	国際社会学演習（国際システムと国民国家）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	エリア・スタディーズ演習（グローバル化と東アジア共同体）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	エリア・スタディーズ演習（移住／貿易／観光）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	ボーダー・スタディーズ演習（日本の中のボーダー）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	ボーダー・スタディーズ演習（アジアの内部／アジアの外部）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	現代社会論演習（イデオロギーとしての公正・安全・環境保護）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	現代社会論演習（再帰的近代と社会不安）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	現代社会論演習（社会構造の変動と価値変容）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	現代社会論演習（グローバル化と生活世界の変容）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	カルチュラル・スタディーズ演習（日常生活における意味と行動）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	カルチュラル・スタディーズ演習（イデオロギーと人種）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	カルチュラル・スタディーズ演習（階級とジェンダー）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	カルチュラル・スタディーズ演習（サブカルチャーと権力）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	文化社会学演習（自由と差別）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	文化社会学演習（人種差別に抵抗する音楽）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	文化社会学演習（ブラック・ミュージックと抵抗文化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	文化社会学演習（無意識の植民地主義）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	応用社会学演習（仕事におけるメンタルヘルス）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	応用社会学演習（心理学化／医療化する社会）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	応用社会学演習（医療化と脱医療化）	2・3・4前		2				○		1					隔年
	応用社会学演習（病気と健康の構築）	2・3・4後		2				○		1					隔年
	労働社会学演習（雇用の流動化と格差社会）	2・3・4前		2				○			1				隔年
	労働社会学演習（仕事とジェンダー）	2・3・4後		2				○			1				隔年
	労働社会学演習（仕事をめぐるジェネレーションギャップ）	2・3・4前		2				○			1				隔年
	労働社会学演習（新しい労働運動）	2・3・4後		2				○			1				隔年
	感情社会学演習（ジェンダーとアイデンティティ）	2・3・4前		2				○		1					隔年
感情社会学演習（模倣と変身）	2・3・4後		2				○		1					隔年	
感情労働論演習（外見・装飾の演出）	2・3・4前		2				○		1					隔年	
感情労働論演習（対人労働のスキル）	2・3・4後		2				○		1					隔年	
親密性の社会学演習（ホームの社会学）	2・3・4前		2				○		1					隔年	
親密性の社会学演習（家族と表象をめぐるジェンダー）	2・3・4後		2				○		1					隔年	
親密性の社会学演習（親密性とジェンダー）	2・3・4前		2				○		1					隔年	
親密性の社会学演習（親密性とセクシュアリティ）	2・3・4後		2				○		1					隔年	
性現象論演習（ジェンダーと文化）	2・3・4前		2				○		1					隔年	
性現象論演習（セクシュアリティと文化）	2・3・4前		2				○		1					隔年	
クィア・スタディーズ演習（クィア理論という方法）	2・3・4後		2				○		1					隔年	

教育課程等の概要																
(人文学部社会科学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
	クイア・スタディーズ演習 (クイアをめぐる視覚文化)	2・3・4後		2				○		1					隔年	
	産業社会学演習 (産業構造の転換と市場経済の変容)	2・3・4後		2				○		1					隔年	
	産業社会学演習 (グローバル化とポスト産業社会)	2・3・4後		2				○		1					隔年	
	消費社会論演習 (モード/ファッション/トレンド/ブーム)	2・3・4前		2				○		1					隔年	
	消費社会論演習 (ハビトゥス/身体化/ディスタンクシオン)	2・3・4前		2				○		1					隔年	
	宗教社会論演習 (日本の祭り・行事)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	宗教社会論演習 (パワースポットとツーリズム)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	宗教社会論演習 (神話・伝説・物語の世界)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	宗教社会論演習 (キリスト教と文化)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	伝統文化論演習 (歴史・民俗とまちづくり)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	伝統文化論演習 (民俗学の視点と方法)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	伝統文化論演習 (都市の民俗学)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	伝統文化論演習 (地域文化とレジリエンス)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	マイグレーション・スタディーズ演習 (移民をめぐる政治と経済)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	マイグレーション・スタディーズ演習 (移民政策と社会統合)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	マイグレーション・スタディーズ演習 (広島と移民の歴史)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	マイグレーション・スタディーズ演習 (国内移住とライフコース)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	社会問題の社会学演習 (個人化社会と自己責任論)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	社会問題の社会学演習 (社会的排除/包摂)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	社会問題の社会学演習 (疎外と自己アイデンティティ)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	社会問題の社会学演習 (デジタル化によって構成されていく現実)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	比較社会学演習 (多文化社会の理論)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	比較社会学演習 (人種と民族)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	比較社会学演習 (歴史と記憶)	2・3・4前		2				○			1				隔年	
	比較社会学演習 (多文化社会としての日本)	2・3・4後		2				○			1				隔年	
	量的社会調査演習	3通		4				○		1						
	質的社会調査演習	3通		4				○			2					
	社会学文献講読演習 I	3・4①		2				○				1				
	社会学文献講読演習 II	3・4②		2				○				1				
	社会学文献講読演習 III	3・4③		2				○				1				
	社会学文献講読演習 IV	3・4④		2				○				1				
	社会学英書講読演習 I	3・4①		2				○				1				
	社会学英書講読演習 II	3・4②		2				○				1				
	社会学英書講読演習 III	3・4③		2				○				1				
	社会学英書講読演習 IV	3・4④		2				○				1				
	社会学特論演習 (外国人と日本社会)	2・3・4前		2				○		1					隔年	
	社会学特論演習 (現代日本社会におけるエスニシティ)	2・3・4後		2				○		1					隔年	
	社会学特論演習 (ネットワーク分析の理論と方法)	2・3・4前		2				○		1					隔年	
	社会学特論演習 (社会的格差と貧困)	2・3・4後		2				○		1					隔年	
	卒業研究	4通	4					○		8	3		1			
	小計 (95科目)	—	4	192	0			—		8	3	0	1	0	兼0	—
特殊演習科目	応用社会学特殊演習	2・3前		2				○							兼1	
	マスメディア論特殊演習	2・3前		2				○							兼1	
	ジャーナリズム論特殊演習	2・3後		2				○							兼1	
	社会安全政策論特殊演習	2・3後		2				○		2					兼1	共同(一部)
	小計 (4科目)	—	0	8	0			—		2	0	0	0	0	兼3	—
社会学情報処理科目	情報リテラシー	1前	2					○							兼4	
	社会学情報処理 I	1前	2					○							兼3	
	社会学情報処理 II	1後	2					○							兼3	共同
	社会学情報処理 III	2・3前		2				○							兼1	
	社会学情報処理 IV	2・3後		2				○							兼1	
	社会学情報処理 V	2・3後		2				○							兼1	
	社会学情報処理特殊講義 I	2・3前		2				○							兼1	
	社会学情報処理特殊講義 II	2・3後		2				○							兼1	
社会学情報処理特殊講義 III	2・3前		2				○							兼2	共同・集中	

教育課程等の概要															
(人文学部社会学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
	社会学情報処理特殊講義Ⅳ	2・3前		2		○								兼2	共同・集中
	社会学情報処理特殊講義Ⅴ	2・3後		2		○								兼1	
	Web調査論	2・3前		2		○								兼1	
	社会学情報処理特殊演習Ⅰ	2・3前		2			○							兼1	
	社会学情報処理特殊演習Ⅱ	2・3後		2			○							兼1	
	小計（14科目）	—	6	22	0	—			0	0	0	0	0	兼4	—
資格課程に関する科目	教育原理	1前			2	○								兼1	オムニバス
	教職入門	1前			2	○								兼1	
	教育心理学	2前			2	○								兼1	
	教育制度・教育課程論	1後			2	○								兼1	
	特別なニーズ教育の基礎と方法	1後			2	○								兼1	
	道徳教育論	2後			2	○								兼2	
	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	2後			2	○								兼1	
	教育方法論（情報通信技術の活用を含む）	2後			2	○								兼1	
	生徒・進路指導論	2後			2	○								兼1	
	教育相談	2後			2	○								兼1	
	中等教育実習事前事後指導	3・4通			1	○								兼2	
	中等教育実習Ⅰ	3・4通			2			○						兼1	
	中等教育実習Ⅱ	4通			2			○						兼1	
	教職実践演習（中・高）	4後			2		○							兼1	
	人権教育論	1後			2	○								兼1	
	社会福祉論	2前			2	○								兼1	
	特別支援教育概論	2後			2	○								兼1	
	中等社会科教育法（地理歴史分野）	3後			2	○								兼1	
	社会科・地理歴史科教育法	3後			2	○								兼2	
	中等社会科教育法（公民分野）	3前			2	○								兼2	
	社会科・公民科教育法	3後			2	○								兼1	
小計（21科目）	—	0	0	41	—			0	0	0	0	0	兼16	—	
合計（454科目）		—	27	775	41	—		8	3	0	1	0	兼158		
学位又は称号	学士（社会学）		学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学関係									
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
全学共通科目20単位以上（地域理解科目1単位以上、国際理解科目4単位以上、一般教養科目4単位以上、キャリアデザイン科目1単位以上を含む）、主専攻科目84単位以上（人文学部総合科目12単位以上、専門講義科目40単位以上及び専門演習科目12単位以上並びに社会学情報処理科目6単位以上を含む社会学専門科目を64単位以上）を修得し、124単位以上を修得すること。 履修制限単位数：前期または後期24単位（ただし4年次に限り28単位）、年間44単位						1学年の学期区分			2期						
						1学期の授業期間			15週						
						1時限の授業時間			90分						

（注）

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
 - 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。
 - 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
 - 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学 共通 科目	地域 理解 科目	<p>広島修道大学と広島</p> <p>修道学園及び広島修道大学の創始の社会的背景や地域とのつながりを学び、学生自らが広島修道大学で学ぶ意義を理解するための科目です。1725（享保10）年の広島藩藩校「講学所」創始からの約300年の歴史の中で培われてきた修道の教育、戦争・原爆被害からの復興の過程の中で求められた人材育成など、地域に果たしてきた役割を地域の歴史・経済・地理とともに学びます。</p> <p>（オムニバス方式／全8回）</p> <p>（23 川瀬正樹／2回）</p> <p>①広島修道大学の地域貢献：地域経済だけでなく、幅広い広島修道大学の地域貢献の現状、②広島修道大学と地理学：広島の地誌と広島修道大学の歴史と現在 等</p> <p>（26 坂根嘉弘／4回）</p> <p>①イントロダクション：修道の淵源である藩校について、②浅野学校・修道学校：浅野明治期の修道学園の発展の歴史、③原爆からの復興：私立修道中学校の設置と原爆からの復興、④広島修道大学の未来に向かって：広島修道大学が地域から求められていること、地域に果たしていく役割 等</p> <p>（28 迫一光／2回）</p> <p>①広島経済界が生んだ広島修道大学：修道短期大学商科創設や広島商科大学開学と地域経済、②広島地域経済と広島修道大学：大学創立以降、広島修道大学が創出してきた地域人材の活躍と地域経済 等</p>	オムニバス方式
		<p>広島と平和</p> <p>本学の位置する広島は、第二次世界大戦末期に核兵器による攻撃を受けた被爆都市です。都市は破壊され、多くの人々の命が失われ、また、生き残った人々も後遺症を含め多くの困難に直面しました。そのような経験から広島は、戦後の復興過程で自らを国際平和都市と位置付け、被爆体験の継承と平和にむけた発信に努めてきています。本科目では、そのような国際平和都市・広島における様々な取り組みと課題を素材に、平和とは何か、平和のために広島が果たしうる役割は何か、そして広島にとって平和とはなにかを、考えます。</p>	
		<p>広島の防災と法務</p> <p>近年、水害など自然現象による災害が報道されることが多く、広島県内でも土砂災害を中心に毎年、災害が発生しています。土砂災害や洪水は、降雨に起因するが、地球温暖化にともない、これらの災害は増加すると予想されています。また、日本列島は地震活動期に入ったと見られており、南海トラフ地震など近い将来の発生が予想される巨大地震なども想定されています。自然災害に対しては、事前の対策による災害予防、災害発生時の応急対策、災害発生後の災害復旧・復興といった政策が用意されています。この講義では、広島で発生が予想される災害の分類に応じた災害発生時のメカニズムを理解するとともに、災害対策を支える法制度に関する理解を深めます。</p>	
国際 理解 科目	日本語Ⅰ	文字、語彙、表現を体系的に学ぶとともに、その運用能力を高めるための訓練を行います。実際の使用例に触れながら、仮名、漢字、表記、語構成、語彙の体系などの基礎について学びます。	
	日本語Ⅱ	文字、語彙、表現を体系的に学ぶとともに、その運用能力を高めるための訓練を行います。仮名、漢字、表記、語構成、語彙の体系などの基礎をふまえ、あらゆる場面に対応できる能力を身につけます。	
	日本語Ⅲ	文法を体系的に学ぶとともに、その運用能力を高めることを目的とします。タスク練習を通して学習した文法知識を実際の場面での使用へと発展させます。前期は、各レベルにおいて習得すべき文法項目の約半分を扱います。	
	日本語Ⅳ	文法を体系的に学ぶとともに、その運用能力を高めることを目的とします。タスク練習を通して学習した文法項目を実際の場面での使用へと発展させます。後期は、各レベルにおいて習得すべき文法項目の残りの半分を扱います。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本語Ⅴ	文字による情報受信・発信能力の向上を目的とします。読解(多読と精読)によるインプット活動から作文などのアウトプット活動へとつなげることで実際のコミュニケーション場面での運用能力を高めます。	
	日本語Ⅵ	文字による情報受信・発信能力の向上を目的とします。読解(多読と精読)によるインプット活動から作文などのアウトプット活動へとつなげます。さらに、習得した技能を総合的に運用する能力を高めるためのレベルに応じた活動に取り組みます。	
	日本語Ⅶ	音声による情報受信・発信能力の向上を目的とします。聴解(多聴と精聴)によるインプット活動から会話などのアウトプット活動へとつなげることで実際のコミュニケーション場面での運用能力を高めます。	
	日本語Ⅷ	音声による情報受信・発信能力の向上を目的とします。聴解(多聴と精聴)によるインプット活動から会話などのアウトプット活動へとつなげます。さらに、習得した技能を総合的に運用する能力を高めるためにレベルに応じた活動にも取り組みます。	
	アカデミック日本語	大学における専門的な学びに必要とされる「資料を読む、講義を聴く、レポート・論文を書く、ディスカッション・プレゼンテーションをする」などのスタディ・スキルの習得を目指すとともに、さまざまな課題に取り組むことで実践的運用能力を高めることをねらいとします。 ※日本語能力試験N1 レベル程度の授業を展開します。	
	ビジネス日本語	日本国内での就労において求められる上級レベルの日本語運用能力の習得とビジネスマナー、ビジネス文書作成、職場での会話表現などの技能を身につけることを目的とします。また、企業での就労を視野に入れた実践力を強化します。 ※日本語能力試験N1 レベル程度の授業を展開します。	
	漢字入門Ⅰ	非漢字圏出身の留学生等を対象とし、漢字の成り立ち・構造、字形と基本的な意味をわかりやすく関連づけながら、漢字の面白さを学ぶ。漢字に慣れ親しむことを出発点として、日本語の読み書き能力の向上をねらいとする。動詞を表す漢字を中心に設定して学習対象とする。	
	漢字入門Ⅱ	非漢字圏出身の留学生等を対象とし、漢字の成り立ち・構造、字形と基本的な意味をわかりやすく関連づけながら、漢字の面白さを学ぶ。漢字に慣れ親しむことを出発点として、日本語の読み書き能力の向上をねらいとする。名詞を表す漢字を中心に設定して学習対象とする。	
	留学生アカデミックスキル	留学生等を対象とし、日本社会への適応促進をふまえて、大学における学修活動に必要とされるアカデミックスキルを身につけることをねらいとする。ディスカッションやグループワークによる協働や情報交換・共有を通じて、学部や学年を越えた留学生同士のネットワーク構築の場となることも視野に入れる。	
	留学生キャリア形成	留学生等を対象とし、日本の大学における学修経験を活かしたキャリア形成を考えるための指標、情報収集の手法、プランニングなどについて学ぶ。グループワークやディスカッションによる留学生同士の情報交換をもとに、自らのキャリアの志向性、適性、実現性について考えることをねらいとする。	
	留学スタートアップ	社会、経済、文化の急速なグローバル化の進展や多文化共生が進む現代の社会状況を踏まえつつ、留学・海外体験の目的や意義について考えます。また、留学体験の効果を高めるために必要な、言語習得、国際理解、異文化間コミュニケーションの基礎について学びます。海外渡航の基礎知識についても学びます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	留学フォローアップ	学内外の留学プログラムに参加した学生を対象として、留学体験のふりかえりを新たな自己形成（アイデンティティの確立）や将来的なキャリア形成へとつなげることを目的とします。留学体験によって自身の中に芽生えた心情的な変化や新たに身につけた知識、関心、技能の意識化を促すとともに、それを帰国後の日本社会や地域への積極的な貢献にいかにか活用できるかを考えます。	
	中長期スタディ・アブロード (入門)	在学中の中長期的な海外留学を目指し、その準備に真剣に取り組む意思を持つ学生を対象とした入門コースである。効果的な目標設定の方法の理解と実践をはじめ、留学先やプログラムに関する基礎的なリサーチとその共有、さらに異文化コミュニケーションに関する基本的かつ実践的なポイントを学びつつ、海外のオンライン言語・文化パートナーと意思疎通を図り、そのプロセスを振り返ることをねらいとする。	
	中長期スタディ・アブロード (事前)	中長期留学を間近に控えた学生のための直前講座である。現地での円滑な異文化間コミュニケーションに必要なスキルを習得することを目的とする。文化的アイデンティティ、価値観、理解・判断力に関するワークシートとビデオを用いた講義をふまえ、留学経験者へのインタビューを行い、その聞き取り結果から得た異文化間コミュニケーションに関する情報をまとめて発表することを旨とする。	
	中長期スタディ・アブロード (事後)	中長期留学の事後講座で、経験の共有、振り返り、分析を行う。自己の成長を省察した上で、議論・ディベート・プレゼンテーションなどに参加することで自己開発を促進させる。その過程で生じた気づきを将来の教育・就業環境において活用することをねらいとする。	
	外国語としての日本語 (日本語教育)	国内外で日本語を教えることを想定しながら、非母語話者が「外国語としての日本語」を学ぶ際に、どのような点でつまづきやすいのか、どのように教えれば効果的な方法となるのか、第二言語習得理論も踏まえながら、日本語教育の理論と実践を学ぶ。学習者の多様性（母語、動機・関心等）に配慮した効果的な教授法、クラス運営、アクティビティや教材の活用、教室デザイン、評価の方法について考える。	
	外国語としての日本語 (多文化共生)	多文化共生が進展する日本の地域社会における日本語の役割や位置づけについて考える。多様な言語文化背景を持つ人々との共生のために提唱されている「やさしい日本語」の理論と実践について学ぶ。日本語母語話者として、日本語を外国語として捉え直す意味と方法を多文化共生社会の構築との関わりから考えることをねらいとする。	
	Multicultural Project (Contemporary Issues in Japanese Society)	(英文) The theme of this section is contemporary issues facing Japanese society, centering on 5 topics: People and Society, Health and Fitness, Children and Education, Science and Technology and Art and Culture. Each topic focuses on a series of selected vocabulary, listening, reading and writing exercises that will help students better understand and explain about the complex issues facing modern-day Japan. By the end of the course, students will present and discuss their own research topic on a contemporary based theme that they are interested in. (和文) 「人々と社会」、「健康と運動」、「子供と教育」、「科学と技術」、「芸術と文化」の5つの分野を中心とする現代日本が抱える多種多様な社会問題に焦点をあてます。諸問題を説明するために必要な語彙や4技能を習得するとともに、各自が選択した興味あるトピックについて調査にもとづく発表を行います。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Multicultural Project (Images of Japan in Western Cinema)	(英文) The theme of this section is the ways that Japan has been portrayed and presented in western English language cinema since the silent movie era of the mid-1910s. Lecture topic focus will be periodic, thematic as well as genre-based. Contrasts between images held inside and outside of Japan will also be highlighted along with changes over time. (和文) サイレント映画(無声映画)時代から制作された洋画(英語版)の中で日本がどのように描かれているかを時代別、テーマ別、ジャンル別に見ていきます。時代とともに変化する日本内外におけるイメージの相違に焦点をあてます。	
	Multicultural Project (Popular Music in Japanese Society I)	(英文) The theme of this section is developments in “popular music” and Japanese society from the Meiji Restoration to the end of WWII. From content knowledge gained through such means as interactive lectures and small group tasks involving periodic overviews and music appreciation, students will select topics for further investigation to be presented and discussed in this multicultural setting. (和文) 明治維新～太平洋戦争終戦時の「大衆音楽」を題材として、海外文化との関わりや日本社会の変遷に目を向けます。音楽鑑賞を交えた双方向講義や時代背景を振り返る小グループタスクなどで学ぶ内容から学生の様々な文化的視点で感じ取ったものをさらに探究し、英語プレゼンテーションを通して共有します。	
	Multicultural Project (Popular Music in Japanese Society II)	(英文) The theme of this section is developments in “popular music” and Japanese society from the post-WWII period of restoration and rapid economic growth to the end of the “economic bubble” and beyond. From content knowledge gained through such means as interactive lectures and small group tasks involving periodic overviews and music appreciation, students will select topics for further investigation to be presented and discussed in this multicultural setting. (和文) 戦後の復興・高度経済成長期からバブル崩壊、そしてそれ以降をも発展・多様化していった日本の「ポピュラー音楽」を題材として、社会の変遷と照らし合えます。音楽鑑賞を交えた双方向講義や時代背景を振り返る小グループタスクなどで学ぶ内容から学生の様々な文化的視点で感じ取ったものをさらに探究し、英語プレゼンテーションを通して共有します。	
	多文化交流プロジェクト (多文化理解)	この授業では、留学生と日本人学生とが協働しつつ、それぞれの関心を軸にしなが、多文化共生社会の構築に欠かせない多文化理解についてプロジェクトワークを行う。基本的には履修者の多文化理解に関する興味や関心を掘り下げることを前提に進めるが、前半では、多文化理解に対する共通理解を深めるためにいくつかの講義を行う。 具体的には、(1) ジェンダー (2) 教育 (3) 開発 (4) 気候変動などの地球規模課題など、それぞれの課題に多文化理解がどのように関わっているのか、またそれらに共通した問題は何かという点を学んでいく。後半では、グループワークが中心になる。前半の講義で学んだこと、またグループでの調査や探究活動を通して、多文化理解をめぐるどのような葛藤が生じ、またその創造的な解決に向けて何が求められているのかを学んでいく。全15回はディスカッションやグループワークが多い。履修者には、多文化理解が直面する課題を捉え直すと同時に、他者との協働の面白さと難しさを体験的に学ぶことで、多文化理解を実感させていく。	
	多文化交流プロジェクト (地方の魅力)	この授業では、留学生と日本人学生とが共に学び合うプロジェクト型の協働学習を行います。パンフレット作成、ポスター発表、ディスカッション等を通して、日本各地の特色について学びます。それにより、日本各地の地域・文化に対する理解を深めることをねらいとします。 ※主な使用言語は日本語です。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	多文化交流プロジェクト (広島再発見)	この授業では、留学生と日本人学生とが共に学び合うプロジェクト型の協働学習を行います。パンフレット作成、ポスター発表、ディスカッションなどのグループ活動を通じて、身近な地域である「広島」について学びます。そして、各国から集まった留学生や海外の日本語学習者との対話を通じて、自文化・異文化への理解を深めることを目指します。 ※授業での主な使用言語は日本語です。	
	多文化交流プロジェクト (現代の社会)	「現代の社会」では、「ヒロシマ」をベースに「平和」をめぐる対話をテーマとします。年々、被爆者の数も減り、記憶の継承の問題が深刻化しています。そのことに危機感を持ち、何かしたいと考えている若い人も確実に増えていると思いますが、日本社会全体で見れば、そうした若い人はあまり多数派ではないかもしれません。そこで、「ヒロシマ」をめぐる対話を通して、平和のために何が必要かを考え、自分の想いを表現し、(海外の学生を含む)他者と交流する場にしたいと思います。本学の協定校で日本語を学んでいる学生と協働プロジェクト(平和を考えるための動画の作成)等の交流をしていきます。	
	多文化交流プロジェクト (言語と文化)	日本人学生と留学生が共に取り組むプロジェクト型共修授業で、使用言語は日本語とします。履修者の「共通語」である『日本語』を題材としながら、言語と文化および両者の相互作用について考えます。日本語の会話の特徴を例にあげながら、日常の言語行動やその背景にある文化(価値観、思想)に対する意識を高めることをねらいとします。また、多文化共生社会の中で生まれた「やさしい日本語」の意義や役割について考え、「やさしい日本語」話者となるための意識やスキルを身につけることも目指します。	
	言語文化特殊講義Ⅰ (ドイツ語)	ドイツ語検定4・3級レベルのドイツ語運用能力を身につけることが目的です。できるだけ文法の説明の時間は少なくして、多くの練習問題を解いていきます。ドイツ語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳですでに学んだ発音の確認や文法の復習から始めていきます。ドイツ語能力の向上と並んで、ドイツ語圏にまつわる文化的な知識を習得することも本授業のねらいのひとつです。	
	言語文化特殊講義Ⅱ (ドイツ語)	ドイツ語検定4・3級レベルのドイツ語運用能力を身につけることが目的です。できるだけ文法の説明の時間は少なくして、多くの練習問題を解いていきます。ドイツ語能力の向上と並んで、ドイツ語圏にまつわる文化的な知識や常識を学ぶことも本授業のねらいのひとつです。	
	言語文化特殊講義Ⅰ (フランス語)	「フランス語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」で習得した基礎を実際に活用していくために、より自然な資料をふんだんに用いた教科書で、実践的な練習に取り組みます。新しい文法の習得よりも、幅広い語彙の習得と既習の文法事項の復習・応用に重点をおき、ネイティブ教員とともにフランス語によるコミュニケーション能力(特に、聴解力と会話力)を高めることを目標としています。また多様性を意識した教科書で、広くフランス語圏文化に触れていきます。	
	言語文化特殊講義Ⅱ (フランス語)	「フランス語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」で習得した基礎を実際に活用していくために、より自然な資料をふんだんに用いた教科書で、実践的な練習に取り組みます。新しい文法の習得よりも、幅広い語彙の習得と既習の文法事項の復習・応用に重点をおき、ネイティブ教員とともにフランス語によるコミュニケーション能力(特に、聴解力と会話力)を高めることを目標としています。また多様性を意識した教科書で、広くフランス語圏文化に触れていきます。	
	言語文化特殊講義Ⅰ (スペイン語)	スペイン語圏の国々の文化的側面を提示しつつ、受講者が様々な場面で実際にスペイン語でコミュニケーションを取れるようになること、スペイン語表現を使用して、自分の意見や考えを可能な限り並べられるようになることを目指しています。単なる反復ではなく、創造的な口頭表現をすること、インタラクティブなゲームを通じてスペイン語でコミュニケーションを学び、口頭で創造性を刺激することを重視しています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	言語文化特殊講義Ⅱ (スペイン語)	スペイン語の言語と文化を身に着けます。 A・スペイン語の基礎を学び続ける。1年次で身に着けた知識を会話を通して活用して理解力を高めます。 ①直説法過去形(点過去・線過去・現在完了・過去完了) B・スペインの文化と接しながら、視野を広げて国際理解や価値観の違いに気付く機会をもちます。 ②授業を通して、特に聞いて、話して、覚えることを重視します。	
	言語文化特殊講義Ⅰ (中国語)	この科目は中国語Ⅰ～Ⅳをすでに履修している人を対象として、テキストの会話文と文法のポイント、文化コーナを学習しながら、①中国語のレベルアップを図り、②グローバル化のなかの現代中国社会の諸相を知るとともに、③中国の代表的な伝統文化についても一定の知識を得ることをめざすものです。	
	言語文化特殊講義Ⅱ (中国語)	中級レベルの中国語の文法、単語及び文章の読解を通じて、中国語の力(特に読解力とリスニング力)をひき上げ、それとともに中国の社会・文化への理解を深める科目です。	
	言語文化特殊講義Ⅰ (韓国・朝鮮語)	韓国文化や社会、歴史についてより理解を深めるための授業です。毎回決められた文化項目について学び、日本との比較を行いながら自分なりにその特徴について整理します。1年間習った単語や文法を使って、簡単な会話練習を行います。加えて、毎回、文化項目に関連のある単語や表現を紹介するので、新出単語も積極的に応用することを心掛けていきます。	
	言語文化特殊講義Ⅱ (韓国・朝鮮語)	韓国文化を理解したうえで、本講義では日韓のコミュニケーション文化に着目し、更なる理解を深める。単純に韓国語能力だけではなく、どのように韓国人と意思疎通を図ったらいいのか、「言語文化」に焦点を当てて講義を行います。具体的には、実際のコミュニケーション場面をイメージしやすくするため、ドラマや映画のワンシーンをしながら学び、実際に会話練習を行います。また、関連する内容についての韓国語の読み物を読んだり、会話で出てきた単語や表現を使った作文も行うことによって、「聞く・読む・話す・書く」の4技能をバランスよく培います。	
	ことばと社会	映像化された英米の文学作品の鑑賞と精読を行い時代背景について講義します。原典の参照と読解を通して、作品を理解します。	
	英語Ⅰ (リーディング・ライティング)	リーディング、ライティングを中心に文字による英語のコミュニケーション能力の基礎を作ることを目的とします。リーディング活動では文法事項・語彙を確認しながら精読を行うとともに、多読では易しい英語を多量に読むことで英語のまま理解できるようになることを目指します。また、リーディングによるインプットをライティング活動でアウトプットすることで文字によるコミュニケーションに取り組む姿勢を身につけます。	
	英語Ⅱ (リーディング・ライティング)	英語Ⅰの内容をより発展させ、リーディングでは、精読でトピック・センテンスや論理構成などに着目して正確に理解する力を身につけ、多読では自分のレベルに合った英文を速く読めるようになることで英語読解力の向上を図ります。また、ライティングでは、リーディングによるインプットや語彙・文法の知識を用いて自分の意見を表現したり本の要約を行ったりして文字によるコミュニケーションに自信を持って取り組めるようになることを目指します。	
	英語Ⅲ (リスニング・スピーキング)	リスニング、スピーキング活動を中心に、音声による英語のコミュニケーション能力の基礎を作ることを目的とします。リスニングでは身近な話題を中心に比較的易しい内容について連続した音や弱い音などとともに文法・語彙を確認しながら、シャドウイング、ディクテーションなどの活動を行います。また、リスニングによるインプットを活用してスピーキング活動を行い、音声によるコミュニケーションに取り組む姿勢を身につけます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語Ⅳ (リスニング・スピーキング)	英語Ⅲの内容をより発展させ、リスニングでは単純な指示や説明など比較的易しい内容の英語音声の聞き取りおよび理解を目指し、イントネーションや文強勢などを意識したシャドウイング、ディクテーションなどの活動を行います。また、リスニングによるインプットを活用して英語で自分の意見を口頭で表現できるようになることを目指し、音声による英語のコミュニケーションに自信を持って取り組めるようになることを目指します。	
	アクティブ・イングリッシュⅠ	能動的に英語学習に取り組み、学んだ英語を積極的にアウトプットする習慣を身につけていきます。グループ内で自分を客観的に見つめることで、自分が得意な技能、苦手な技能等を認識し、自分に適した英語学習方法を見出すことを目指します。	
	アクティブ・イングリッシュⅡ	「アクティブ・イングリッシュⅠ」をより発展させて、能動的に英語学習に取り組み、学んだ英語を積極的にアウトプットする習慣を身につけていきます。自分が得意な技能、苦手な技能等を認識し、自分に適した英語学習方法を見出すことを目指します。	
	英語ライティングⅠ	トピック指向で書かれた英語らしいテキスト構造について学びます。基本的な文法を復習し、自然なコロケーションについての知識を増やししながら、身近なトピックを英語で表現できるように練習します。	
	英語ライティングⅡ	「英語ライティングⅠ」に引き続き、トピック指向で書かれた英語らしいテキスト構造について学びます。基本的な文法を復習し、自然なコロケーションについての知識を増やししながら、社会問題や国際問題などのトピックを英語で表現できるように練習します。	
	英語ライティングⅢ	自分の考えを論理的な構成で相手にわかりやすい英語で表現し、身近な話題について正しい英文でパラグラフを書く力を身につけます。適切な書式に従って書くことについても学びます。	
	英語ライティングⅣ	「英語ライティングⅢ」に引き続き、自分の考えを論理的な構成で相手にわかりやすい英語で表現し、身近な話題について正しい英文でパラグラフを書く力を身につけます。適切な書式に従って書くことについても学びます。	
	英語聴解Ⅰ	英語の音韻体系やリズム、ストレス、音の同化、連結などに関して理解を深めます。学んだことを生かして英語を聴き取る練習をするだけでなく教材中の表現を利用したアウトプット活動も行います。	
	英語聴解Ⅱ	「英語聴解Ⅰ」に引き続き、英語の音韻体系やリズム、ストレス、音の同化、連結などに関して理解を深めます。学んだことを生かして実際の英語のスピーチや演説など難易度の高い聴解にも取り組みます。聴き取る練習をするだけでなく教材中の表現を利用したアウトプット活動も行います。	
	英語聴解Ⅲ	より高いレベルの英語の聴解力を養うために必要なスキルを学ぶことを目的とします。聴解力を養うためのさまざまな助言を担当教員が行います。	
	英語聴解Ⅳ	「英語聴解Ⅲ」を発展させて、より高いレベルの英語の聴解力を養うために必要なスキルを学ぶことを目的とします。聴解力を養うためのさまざまな助言を担当教員が行います。	
	英語読解Ⅰ	精読、多読、もしくはその両方の組み合わせで構成されます。精読では、パラグラフ構成やトピックセンテンスに注目しつつ、ポイントをつかみ早く正確に読むこと、多読では、やさしい読み物を多量に読むことで英語を英語のまま理解する読解力を養成します。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語読解Ⅱ	「英語読解Ⅰ」に引き続き、精読、多読、もしくはその両方の組み合わせで構成されます。精読では、パラグラフ構成やトピックセンテンスに注目しつつ内容を分析的・批判的に読むこと、多読では、自分のレベルに合った読み物を多量に読むことで幅広い語彙力を養い、英語を英語のまま理解する読解力を養成します。	
	英語読解Ⅲ	難易度のやや高い英文の精読、初中級レベルの英文の多読、もしくはその両方の組み合わせで構成されます。精読では、パラグラフ構成やトピックセンテンスに注目しつつポイントをつかみ早く正確に読むこと、多読では、やさしい読み物を多量に読むことで英語を英語のまま理解する読解力を養成します。	
	英語読解Ⅳ	「英語読解Ⅲ」に引き続き、難易度のやや高い英文の精読、初中級レベルの英文の多読、もしくはその両方の組み合わせで構成されます。精読では、パラグラフ構成やトピックセンテンスに注目しつつポイントをつかみ早く正確に読むこと、多読では、やさしい読み物を多量に読むことで英語を英語のまま理解する読解力を養成します。	
	アカデミック・リーディングⅠ	学術的な内容の英文を読む際に必要となる語彙、文法、構文の知識を身につけ、複数のパラグラフで構成される学術的な英文の読解力を身につけることを目的とします。さまざまな学術分野の英文を用いて、学術的な文章の型（パラグラフの構成や論の展開）を理解し、文章全体のトピックや重要な情報を素早く理解する読み方（スキミング、スキヤニング）や、一文一文を分析的に読んで理解する読み方（精読）などを学びます。	
	アカデミック・リーディングⅡ	「アカデミック・リーディングⅠ」の学習内容を発展させ、幅広い学術分野の英文読解を通して英語読解力の向上を目指します。学術的な文章で多用される語彙や文法事項、構文の学習を継続しながら、複雑な構造をもつ英文の読解に取り組んで理解を深めます。また、学術的な文章におけるパラグラフの構成や論の展開を理解し、スキミング、スキヤニングの練習や精読の学習を反復し、リーディングスキルの定着を図ります。	
	英語コミュニケーション入門Ⅰ	英語を用いた日常生活や学生生活など、実践的に英語を使用する場面を設定して学習を行い、英語コミュニケーションのための技能・態度を身につけることを目的とします。学んだ表現を使ってペアワークやグループワークに取り組み、話し手・書き手の意図や情報を的確に理解できるようになること、また、基礎的な語彙や表現を用いて自分の意見や考えを伝えることができるようになることを目指します。	
	英語コミュニケーション入門Ⅱ	「英語コミュニケーション入門Ⅰ」の学習を踏まえ、日常生活や学生生活などをテーマとする新たな場面設定で実践的な英語コミュニケーションのための技能・態度を養います。場面に応じた英語表現を学び、ペアワークやグループワークを通して学習内容の定着を図ります。それまでに学んだ知識やスキルを総合的に活用して、やや複雑な場面設定でのコミュニケーションの練習も行い、より発展的な英語力を身につけることを目指します。	
	英語コミュニケーションⅠ	文字や音声を媒体とするさまざまなコミュニケーションの様式を理解しつつ、多様なアクティビティを通じて実践的な訓練を行います。	
	英語コミュニケーションⅡ	「英語コミュニケーションⅠ」をより発展させて、文字や音声を媒体とするさまざまなコミュニケーションの様式を理解しつつ、多様なアクティビティを通じて実践的な訓練を行います。	
	英語コミュニケーションⅢ	音声的なコミュニケーションと非音声的なコミュニケーションの係わり合いを示す具体例を分析し、分析を通して学んだことを実際の英語コミュニケーションに生かす実践的な練習をします。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語コミュニケーションⅣ	「英語コミュニケーションⅢ」に引き続き、音声的なコミュニケーションと非音声的なコミュニケーションの係わり合いを示す具体例を分析し、分析を通して学んだことを実際の英語コミュニケーションに生かす実践的な練習をします。	
	英語コミュニケーションⅤ	英語で話されたり書かれたりしたことばを通して効果的にコミュニケーションする能力を養うことを目的とします。共感、信頼関係の構築、攻撃や批判の処理、困難な状況の中でのコミュニケーションといったより高度なコミュニケーション技術について学びます。	
	英語コミュニケーションⅥ	「英語コミュニケーションⅤ」に引き続き、英語で話されたり書かれたりしたことばを通して効果的にコミュニケーションする能力を養うことを目的とします。共感、信頼関係の構築、攻撃や批判の処理、困難な状況の中でのコミュニケーションといったより高度なコミュニケーション技術について学びます。	
	英語文法入門Ⅰ	英文法・語法を基礎から再確認し、その知識を実践的な英語力へとつなげられるように演習を行います。文法・語法の知識はコミュニケーションを支えるものであるということを理解し、伝えたい内容を効果的に伝えるためにどのような文構造や文法事項を活用すればよいかなどを考え、ライティング・スピーキングのアウトプット活動にも取り組み、積極的なコミュニケーションの態度を養うとともに、知識・技能の定着を図ります。	
	英語文法入門Ⅱ	「英語文法入門Ⅰ」の内容に続き、新たな文法・語法項目の再確認を行い、その知識を実践的な英語力へとつなげられるよう演習を行います。学んできた知識を総合的に生かして、複雑な構造をもつ英文や長い文章を用いた発展的な学習にも取り組みます。ライティングやスピーキングの学習活動を通して、積極的なコミュニケーション態度を養い、知識・技能の定着を図ります。	
	英語語法Ⅰ	英文法、語法を復習すると同時に、各文法事項が実際の英文でどのように使われているのか、学んだ項目をどのように英作文に役立てることができるのか、などについて考察を深めます。	
	英語語法Ⅱ	「英語語法Ⅰ」に引き続き、英文法、語法を復習すると同時に、各文法事項が実際の英文でどのように使われているのか、学んだ項目をどのように英作文に役立てることができるのか、などについて考察を深めます。	
	英語語法Ⅲ	英語の語法・文法のより細かな事項を習得し、その知識を応用する力を養成します。文法・語法に関する専門用語を英語で学び、英語で書かれた文法書も臆せず利用できるよう訓練します。	
	英語語法Ⅳ	「英語語法Ⅲ」に引き続き、英語の語法・文法のより細かな事項を習得し、その知識を応用する力を養成します。文法・語法に関する専門用語を英語で学び、英語で書かれた文法書も臆せず利用できるよう訓練します。	
	資格英語入門Ⅰ	TOEIC Bridge®などの英語資格試験の学習を通して、明確な目標設定と学習計画をもとに日常生活やビジネスシーンで必要とされるリーディング・リスニングの基礎力を養い、資格試験での目標達成を目指します。TOEIC Bridge®などの資格試験の出題形式に慣れるよう、過去に出題された問題や類例問題に取り組むと同時に、資格試験に頻出する語彙・成句・重要構文を繰り返し訓練し、定着させることで、効率的なスコアアップを図ります。	
	資格英語入門Ⅱ	「資格英語入門Ⅰ」の内容を踏まえ、引き続き明確な目標設定と学習計画をもとにTOEIC Bridge®などの英語資格試験の学習に取り組む、リーディング・リスニングの基礎力のさらなる向上と、資格試験での目標達成を目指します。「資格英語入門Ⅰ」と同様、TOEIC Bridge®などで過去に出題された問題や類例問題に取り組むと同時に、資格試験に頻出する語彙・成句・重要構文に関する訓練を継続し、効率的なスコアアップを図ります。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	資格英語Ⅰ	TOEIC® L&R、英検などの英語資格試験におけるスコアアップあるいは資格取得を目指します。語彙力や文法などの総合的な英語能力を身につけます。	
	資格英語Ⅱ	「資格英語Ⅰ」に引き続き、TOEIC® L&R、英検などの英語資格試験におけるスコアアップあるいは資格取得を目指します。語彙力や文法などの総合的な英語能力を身につけます。	
	資格英語Ⅲ	TOEIC® L&R、英検などの英語資格試験における、より難易度の高い聴解、読解、会話表現などを出題形式で取り上げ、より発展的な英語能力を養成することを目的とします。	
	資格英語Ⅳ	「資格英語Ⅲ」に引き続き、TOEIC® L&R、英検などの英語資格試験における、より難易度の高い聴解、読解、会話表現などを出題形式で取り上げ、より発展的な英語能力を養成することを目的とします。	
	資格英語Ⅴ	TOEIC® L&R、英検などの英語資格試験における上位レベルの難易度の高い聴解、読解、会話表現などを出題形式の問題で取り上げ、さらに発展的な英語能力を養成することを目的とします。	
	資格英語Ⅵ	「資格英語Ⅴ」に引き続き、TOEIC® L&R、英検などの英語資格試験における上位レベルの難易度の高い聴解、読解、会話表現などを出題形式の問題で取り上げ、さらに発展的な英語能力を養成することを目的とします。	
	英語プレゼンテーションⅠ	英語におけるプレゼンテーションを分析し、準備し、実際に行う能力を養うことを目的とします。基本的なプレゼンテーション技術についても学び、実際に練習します。	
	英語プレゼンテーションⅡ	「英語プレゼンテーションⅠ」に引き続き、英語におけるプレゼンテーションを分析し、準備し、実際に行う能力を養うことを目的とします。より発展的なプレゼンテーション技術についても学び、実際に練習します。	
	ドイツ語Ⅰ	ドイツ語を初めて学ぶ受講者を対象に、旅行に必要とされる程度の「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」という4技能の習得を目指します。グループワークやペアワークを多く取り入れていきますので、授業には積極的に参加してください。ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイスなど）の文化的な知識を拡充することも本科目のねらいのひとつです。適宜DVDや資料などを用いて、視覚的な理解を促します。ドイツ語Ⅲと一冊の教科書を用いて交互に授業を行うため、できるかぎりドイツ語Ⅲと併せて履修するようにしてください。	
	ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅰに引き続き、旅行に必要とされる程度の「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」という4技能の習得を目指します。グループワークやペアワークを多く取り入れていきますので、授業には積極的に参加してください。ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイスなど）の文化的な知識を拡充することも本科目のねらいのひとつです。適宜DVDや資料などを用いて、視覚的な理解を促します。ドイツ語Ⅲと一冊の教科書を用いて交互に授業を行うため、できるかぎりドイツ語Ⅳと併せて履修するようにしてください。	
	ドイツ語Ⅲ	ドイツ語を初めて学ぶ受講者を対象に、旅行に必要とされる程度の「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」という4技能の習得を目指していきます。グループワークやペアワークを多く取り入れていきますので、授業には積極的に参加してください。ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイスなど）の文化的な知識を拡充することも本科目のねらいのひとつです。適宜DVDや資料などを用いて、視覚的な理解を促します。ドイツ語Ⅰと一冊の教科書を用いて交互に授業を行うため、できるかぎりドイツ語Ⅰと併せて履修するようにしてください。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ドイツ語Ⅳ	ドイツ語Ⅲに引き続き、旅行に必要とされる程度の「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」という4技能の習得を目指します。グループワークやペアワークを多く取り入れていきますので、授業には積極的に参加してください。ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイスなど）の文化的な知識を拡充することも本科目のねらいのひとつです。適宜DVDや資料などを用いて、視覚的な理解を促します。ドイツ語Ⅲと一冊の教科書を用いて交互に授業を行うため、できるかぎりドイツ語Ⅱと併せて履修するようにしてください。	
	フランス語Ⅰ	「フランス語Ⅰ～Ⅳ」は、フランス語を初めて学ぶ人を対象に、一年を通じて同じ教科書を使用し、フランス語の基礎を学んでいきます。前期は「フランス語Ⅰ」と「フランス語Ⅲ」をともに履修することで、初学者が文法の基礎とそれを運用する能力を体系的に学べるように構成されています。簡単な日常会話から基本的な文法を修得し、自らも簡単な表現を理解し、発音できる力を養います。具体的には仏検5級を取得できるレベルを目指します。また、できるだけ視聴覚教材を用い、フランスの生活や文化への関心を高めることもこの授業の狙いです。	
	フランス語Ⅱ	「フランス語Ⅰ、Ⅲ」について、後期は「フランス語Ⅱ」と「フランス語Ⅳ」をともに履修することで、文法の基礎とそれを運用する能力を体系的に学べるように構成されています。簡単な日常会話から基本的な文法の学習をさらに展開し、自らも簡単な表現を理解し、発音できる力を養います。具体的には仏検4級を取得できるレベルを目指します。また、できるだけ視聴覚教材を用い、フランスの生活や文化への関心を高めることもこの授業の狙いです。	
	フランス語Ⅲ	「フランス語Ⅰ～Ⅳ」は、フランス語を初めて学ぶ人を対象に、一年を通じて同じ教科書を使用してフランス語の基礎を学んでいきます。前期は「フランス語Ⅰ」と「フランス語Ⅲ」をともに履修することで、初学者が文法の基礎とそれを運用する能力を体系的に学べるように構成されています。簡単な日常会話から基本的な文法を修得し、自らも簡単な表現を理解し、発音できる力を養います。具体的には仏検5級を取得できるレベルを目指します。また、できるだけ視聴覚教材を用い、フランスの生活や文化への関心を高めることもこの授業の狙いです。	
	フランス語Ⅳ	「フランス語Ⅰ、Ⅲ」について、後期は「フランス語Ⅱ」と「フランス語Ⅳ」をともに履修することで、文法の基礎とそれを運用する能力を体系的に学べるように構成されています。簡単な日常会話から基本的な文法の学習をさらに展開し、自らも簡単な表現を理解し、発音できる力を養います。具体的には仏検4級を取得できるレベルを目指します。また、できるだけ視聴覚教材を用い、フランスの生活や文化への関心を高めることもこの授業の狙いです。	
	スペイン語Ⅰ	スペイン語Ⅰ～Ⅳ(スペイン語初級)では、初修者を対象として、スペイン語の基礎を学習します。1年間を通しての学習で、「読む」「書く」「聞く」「話す」という4種類のスペイン語運用能力の向上をはかると同時に、スペイン語の学習を通して、スペイン語圏世界の文化の豊かさと多様性にも触れてゆきます。 スペイン語Ⅰ～Ⅳは共通の教科書を用いますが、Ⅰ・Ⅱでは文法説明が中心になります。Ⅲ・Ⅳでは、Ⅰ・Ⅱとの密接な連携を保ちつつ、表現学習や、文法知識を応用する形での各種練習に重点を置きます。前期のスペイン語Ⅰでは、文字と発音、名詞の性・数、形容詞、冠詞、重要な動詞の現在形、挨拶表現や簡単な日常会話の例などを学びます。	
	スペイン語Ⅱ	前期に引き続き、スペイン語Ⅳと連携しつつ、スペイン語の基礎文法を学びます。重要な動詞の現在形の学習を継続するとともに、再帰動詞、目的語代名詞、比較表現、不定語と否定語などの事項を学び、最後に現在進行形と現在完了形に触れます。また、そうした文法事項を応用した会話の例も学びます。前期よりも内容が難しくなるので、気を抜かないようにしてください。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	スペイン語Ⅲ	スペイン語Ⅰの文法授業との密接な連携を保ちながら授業を進めます。会話練習、作文練習、ヒアリング練習、読解練習などを通して、スペイン語Ⅰで学んだ文法事項を定着させるとともに、語彙力を強化し、スペイン語のコミュニケーション能力の向上を目指します。前期は挨拶からはじめて、日常生活の表現にチャレンジします。	
	スペイン語Ⅳ	前期に引き続き、スペイン語Ⅱの文法授業との密接な連携を保ちながら授業を進めます。会話練習、作文練習、ヒアリング練習、読解練習などを通して、スペイン語Ⅱで学んだ文法事項を定着させるとともに、語彙力を強化し、スペイン語のコミュニケーション能力のさらなる向上を目指します。後期は前期よりも複雑で高度な内容をスペイン語で表現することにチャレンジします。	
	中国語Ⅰ	1. 週2回の授業（文法・語彙中心の授業と発音・会話中心の授業）でテキストの1課分を学びます。 2. 毎回授業の前半に、前回までの復習、課題の発表、リスニング練習を行い、後半に新しい課を学修します。 3. 毎回課題（テキストCDの聞き取り、本文の暗記、練習問題など）を課します。	
	中国語Ⅱ	この授業は前期の「中国語Ⅰ」と「中国語Ⅲ」の継続授業です。 1. 週2回の授業（文法・語彙中心の授業と発音・会話中心の授業）でテキストの1課分を学びます。 2. 毎回授業の前半に、前回までの復習・課題の発表・リスニング練習を行い、後半に新しい課を学習します。 3. 毎回宿題（音声の聞き取り・本文の暗記・練習問題など）を課します。	
	中国語Ⅲ	1. 週2回の授業（文法・語彙中心の授業と発音・会話中心の授業）でテキストの1課分を学ぶ。 2. 毎回授業の前半に、前回までの復習、課題の発表、リスニング練習を行い、後半に新しい課を学修する。 3. 毎回課題（テキストCDの聞き取り、本文の暗記、練習問題など）を課す。	
	中国語Ⅳ	この授業は前期の「中国語Ⅰ」と「中国語Ⅲ」の継続授業です。 1. 週2回の授業（文法・語彙中心の授業と発音・会話中心の授業）でテキストの1課分を学びます。 2. 毎回授業の前半に、前回までの復習・課題の発表・リスニング練習を行い、後半に新しい課を学習します。 3. 毎回宿題（音声の聞き取り・本文の暗記・練習問題など）を課します。	
	韓国・朝鮮語Ⅰ	韓国・朝鮮語を初めて学ぶ受講生を対象に、一貫した授業計画に基づいて韓国・朝鮮語に関する基礎知識と運用力を養成します。「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能をバランスよく総合的に身につけることを目指します。なお、総合的な能力を養成することを目指すので、各クラスの前期ペアの授業は内容的に区別せず連続して行います。	
	韓国・朝鮮語Ⅱ	一貫した授業計画に基づいて韓国・朝鮮語に関する基礎知識と運用力を養成します。「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能をバランスよく総合的に身につけることを目指します。なお、総合的な能力を養成することを目指します。	
	韓国・朝鮮語Ⅲ	韓国・朝鮮語を初めて学ぶ受講生を対象に、一貫した授業計画に基づいて韓国・朝鮮語に関する基礎知識と運用力を養成します。「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能をバランスよく総合的に身につけることを目指します。なお、総合的な能力を養成することを目指します。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	韓国・朝鮮語Ⅳ	前期に引き続き、一貫した授業計画に基づいて韓国・朝鮮語に関する基礎知識と運用力を養成します。「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能をバランスよく総合的に身につけることを目指します。なお、総合的な能力を養成することを旨とするので、各クラスの後期ペアの授業は内容的に区別せず連続して行います。	
	中級外国語Ⅰ (ドイツ語)	原子力発電所の存廃をめぐるドイツ連邦共和国の議論・政策を紹介するテキストを用いて、一年次に習得した内容を復習しながら、言語能力のさらなる向上、とくに自己発信能力の向上を目指します。同時に、ドイツの文化・歴史・社会についての知識を深め、日本の文化・歴史・社会と比較しつつ、異文化コミュニケーション能力を高めていきます。	
	中級外国語Ⅱ (ドイツ語)	原子力発電所の存廃をめぐるドイツ連邦共和国の議論・政策を紹介するテキストを用いて、一年次に習得した内容を復習しながら、言語能力のさらなる向上、とくに自己発信能力の向上を目指します。同時に、ドイツの文化・歴史・社会についての知識を深め、日本の文化・歴史・社会と比較しつつ、異文化コミュニケーション能力を高めていきます。また、ドイツの例を参考に「市民の政治参加」のあり方も議論したいと思えます。	
	中級外国語Ⅰ (フランス語)	「フランス語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」での学びを継続し、さらにフランス語の基礎を学んでいきます。授業は、「フランス語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」で使用した教科書『シェ・マドレーヌ』を継続的に学び、これを終えていきます。進め方は、基本的に 1)前回、学んだことの復習や継続的な口頭練習 2) 新たな文法事項の習得 3) ペアあるいは小グループで、音読練習と暗唱、会話作成と発表といった口頭練習によるアクティビティ、という3つの部分から構成していきます。1年生で得た知識をしっかりと定着させ、検定試験にも挑めるようにしていきます。 またフランスでの季節行事や時事的な話題、動画などを随時紹介し、そこから日本とフランスの社会、生活習慣の違いについて意識を高めていくことも授業の狙いです。	
	中級外国語Ⅱ (フランス語)	「フランス語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」、「中級外国語Ⅰ(フランス語)」(前期)で習得した知識をより定着させることを狙い、新しい知識よりも既習の基本文法を用いたアクティビティや練習問題に取り組むほか、実際のフランス語の資料(サイトや広告文、メール、SNSなど)の聴解や読解を行い、語彙の充実をはかり、より実践的に使えるフランス語を目指して練習していきます。 また文化面でも、引き続き授業で時事的な話題や映画などを紹介しながら、日仏の文化的な違いについて意識を高めていきます。	
	中級外国語Ⅰ (スペイン語)	「中級外国語Ⅰ(スペイン語)」では、「スペイン語Ⅰ～Ⅳ」の単位取得者を対象に、読解力を中心にスペイン語力のさらなる向上をはかるとともに、スペインとラテンアメリカの社会や文化について学びます。	
	中級外国語Ⅱ (スペイン語)	前期開講の「中級外国語Ⅰ(スペイン語)」の継続です。前期に引き続き、スペインとラテンアメリカの社会や文化について学びつつ、読解力を中心にスペイン語力のさらなる向上をはかります。	
	中級外国語Ⅰ (中国語)	中国語Ⅰ～Ⅳを修得した学生を対象とした、中国語と中国文化についての理解を深めるための授業である。 講義は中国の身近な話題についての会話を学ぶとともに、資料映像などを用いて現代中国及び日中文化の相違についても紹介する。	
	中級外国語Ⅱ (中国語)	中国語Ⅰ～Ⅳを修得した学生を対象とした、中国語と中国文化についての理解を深めるための授業です。講義は中国の身近な話題についての会話を学ぶとともに、資料映像などを用いて現代中国及び日中文化の相違についても紹介します。	
	中級外国語Ⅰ (韓国・朝鮮語)	韓国・朝鮮語Ⅰ～Ⅳを履修し、韓国語の文字と発音及び基礎的な文法事項を習得している受講者を対象に、中級レベルの韓国語力を目指します。さらにビデオ・DVDなどを通じて韓国文化についても学びます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中級外国語Ⅱ (韓国・朝鮮語)	韓国語の文字と発音及び基礎的な文法事項を習得している受講者を対象に、中級レベルの韓国語力を目指します。さらにビデオ・DVDなどを通じて韓国文化についても学びます。	
	上級外国語Ⅰ (ドイツ語)	ドイツ語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳで学んだ基礎的なドイツ語技能を拡充し、簡単なドイツ語会話ができるようになることを目指します。まずは発音や文法知識の復習から始めていきます。 グループワークやペアワークなどを通じて、ドイツ語でのコミュニケーションスキルを根本的に向上させることが目標です。基本的な語彙を学び、旅行に必要とされる程度の「読む」、「聞く」、「書く」、「話す」能力をバランスよく発展させることが本授業のねらいですが、それらの4技能のなかでも主に会話を中心に学びます。	
	上級外国語Ⅱ (ドイツ語)	上級外国語Ⅰで習得したドイツ語技能を発展させて、初級レベル以上のドイツ語会話ができるようになることを目指します。グループワークやペアワークなどを通じて、ドイツ語でのコミュニケーションスキルを根本的に向上させることが目標です。基本的な語彙を学び、旅行に必要とされる程度の「読む」、「聞く」、「書く」、「話す」能力をバランスよく発展させることが本授業のねらいですが、それらの4技能のなかでも主に会話を中心に学んでいきます。	
	上級外国語Ⅰ (フランス語)	初級から中級へのステップアップを目指してフランス語を学習していきます。習得した基礎を実際に活用していくために、より自然に近い会話文や未加工の資料を用いて、語彙を増やし、実践的な練習に取り組んでいきます。また少しまとまった量のフランス語を読み、要点を理解できるようになること、音声で聞いて大体的内容を把握できるようになるよう練習していきます。 同時に、毎回、授業の最初に、フランス語で身の回りに起こったことを互いに紹介し合ったり、日本語でフランス語圏で起きたニュースについて解説してもらう時間を設けます。こうしたアクティビティを通して、実際にフランス語でコミュニケーションを試みたり、フランス語圏の話題にも関心を高めていきます。	
	上級外国語Ⅱ (フランス語)	中級レベルのフランス語を目指して学習していきます。「上級フランス語」の一年の学習を通して、初級文法に出てくる「表情のない」、平板なフランス語を卒業して、気持ちの濃淡を出せるようなフランス語を理解し、表現できるように学習していきます。また、少しまとまった量のフランス語テキストをよみ、その中で語彙や文法の使われ方を把握すると同時に、フランス語圏社会や文化にも目を向けていきます。 後期も、毎回、授業の最初に、フランス語で身の回りに起こったことを互いに紹介し合ったり、日本語でフランス語圏で起きたニュースについて解説してもらう時間を設けます。こうしたアクティビティを通して、実際にフランス語でコミュニケーションを試みたり、フランス語圏の話題にも関心を高めていきます。	
	上級外国語Ⅰ (スペイン語)	スペイン語文法の主要部分を習得し、ある程度のスペイン語運用能力を身に付け、中級レベルに達した学生を対象とした授業です。発展的な文法知識を習得しながら、長文読解練習、作文練習、会話練習、ヒアリング練習などをおこない、「読む」「書く」「話す」「聞く」の各能力をさらに高めていきます。同時に、スペイン語圏世界の国々の歴史・文化・社会への理解をさらに深めていきます。	
	上級外国語Ⅱ (スペイン語)	スペイン語文法の主要部分を習得し、ある程度のスペイン語運用能力を身に付け、中級レベルに達した学生を対象とした授業です。前期開講の「上級外国語Ⅰ(スペイン語)」からの継続であり、引き続き、発展的な文法知識を習得しながら、長文読解練習、作文練習、会話練習、ヒアリング練習などをおこない、「読む」「書く」「話す」「聞く」の各能力をさらに高めていきます。同時に、スペイン語圏世界の国々の歴史・文化・社会への理解をさらに深めていきます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	上級外国語Ⅰ (中国語)	この科目は中国語Ⅰ～Ⅳをすでに履修している人を対象として、テキストの会話文と短文を読みながら、①中国語のレベルアップを図り、②グローバル化のなかの現代中国社会の諸相を知るとともに、③中国の代表的な伝統文化についても一定の知識を得ることをめざすものです。	
	上級外国語Ⅱ (中国語)	この科目は中国語Ⅰ～Ⅳをすでに履修している人を対象として、テキストの会話文と短文を読みながら、①中国語のレベルアップを図り、②グローバル化のなかの現代中国社会の諸相を知るとともに、③中国の代表的な伝統文化についても一定の知識を得ることをめざすものです。	
	上級外国語Ⅰ (韓国・朝鮮語)	3年間韓国・朝鮮語関連科目を履修した受講者を対象に、最上級レベルの韓国語力を目指します。さらにビデオ・DVDなどを通じて韓国文化についても学びます。最上級の韓国語講座であるため、授業はできるだけ韓国語で行います。	
	上級外国語Ⅱ (韓国・朝鮮語)	3年間韓国・朝鮮語関連科目を履修した受講者を対象に、最上級レベルの韓国語力を目指します。さらにビデオ・DVDなどを通じて韓国文化についても学びます。最上級の韓国語講座であるため、授業はできるだけ韓国語で行います。	
	海外研修A	海外協定大学が提供する留学プログラムに含まれる授業科目(講義、実習、フィールドワークなど)のうち、1単位相当の授業科目への参加に対して派遣先大学から受けた評価をもとに本学の成績評価基準にしたがって単位認定(および成績評価)をするための科目である。	
	海外研修B	海外協定大学が提供する留学プログラムに含まれる授業科目(講義、実習、フィールドワークなど)のうち、2単位相当の授業科目への参加に対して派遣先大学から受けた評価をもとに本学の成績評価基準にしたがって単位認定(および成績評価)をするための科目である。	
	海外研修C	海外協定大学が提供する留学プログラムに含まれる授業科目(講義、実習、フィールドワークなど)のうち、3単位相当の授業科目への参加に対して派遣先大学から受けた評価をもとに本学の成績評価基準にしたがって単位認定(および成績評価)をするための科目である。	
	海外研修D	海外協定大学が提供する留学プログラムに含まれる授業科目(講義、実習、フィールドワークなど)のうち、4単位相当の授業科目への参加に対して派遣先大学から受けた評価をもとに本学の成績評価基準にしたがって単位認定(および成績評価)をするための科目である。	
	海外研修E	海外協定大学が提供する留学プログラムに含まれる授業科目(講義、実習、フィールドワークなど)のうち、5単位相当の授業科目への参加に対して派遣先大学から受けた評価をもとに本学の成績評価基準にしたがって単位認定(および成績評価)をするための科目である。	
	一般 教養 科目	哲学	次の諸点を扱います。 ・ソクラテスとデカルトに即して、ヨーロッパの哲学が典型的にどのようなものであったかを検討します。 ・ソクラテスやデカルトと異なる性格の哲学として、現象学、行為遂行的言語哲学、ヴィトゲンシュタインの哲学の内容を検討します。 ・「事実性」について考えます。
倫理学		今日、生命倫理、企業倫理、政治倫理、情報倫理、研究倫理など様々な領域において倫理が問題とされるようになりました。領域は異なっても、そこで求められるのは善の実現であり、善と幸福との一致である最高善の実現でしょう。いうまでもなく、それはある人間観の上で展開される倫理的考察です。この講義では、古来より倫理学の課題として考察されてきた人間、善、悪、自由、愛についての先達の思索に触れ、現代的な課題を考察するための基礎を身につけることを目指します。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	美学	本講座では、西洋近代美学の成立に大きく寄与したカントの哲学的な美学思想について学びます。前半は、御子柴善之『自分で考える勇氣』に基づいて、「認識」「行為」「判断」をテーマに西洋思想の基本を押さえながらカントの哲学思想についてその概要を学びます。後半は、カントの美学的な理論書である『判断力批判』の「美の分析論」を読解し、事物を「美しい」という言葉によって名指す趣味判断なるものが、いかなる事態であるかを学びます。	
	芸術学	西洋美術の多くは様々な既存の物語を題材にしており、いわば本の挿絵のような役割を果たしてきました。本講義ではギリシア・ローマ神話に基づいた美術作品を取り上げ、図像表現上の慣習的な約束事を学びながら、そこで表現されている場面がどのような物語の流れの中にあり、登場人物が誰であるのかなどについて理解を深めます。	
	西洋文学	ヨーロッパとヨーロッパ語圏の文学作品を主な題材として取り上げ、その読解を通して、こうした作品が作り出された地域の歴史、文化、社会的背景を学んでいきます。この地域の主要作家や主要文学作品を紹介し、その文学(史)的意義を解説していくことが主な講義内容になりますが、時には文学作品以外の絵画や映像作品をおりませながら、各時代が提起する政治的、社会的、芸術的問題にもふれていきます。	
	日本語学	授業では、よく知られている国語の常識(五十音図、ローマ字、小さな「つ」)を手がかりとしながら、それらは本当に正しい知識なのか、言語学の観点から見直していきます。比較的やさしい日本語の規則性として、以下のテーマを取りあげ解説します。 授業の計画は、以下の通りです。 (1)日本語の音声(音節、拍、特殊拍) (2)日本語の韻律(リズム、アクセント、イントネーション)	
	心理学	心理学という学問分野の特徴の一つとして、一般に考えられているよりも幅広い研究領域を有することが挙げられます。また、日常用語と同じ言葉を専門用語として使用する点も挙げられます。そこで本講義では、心理学の様々な研究領域の知見や理論について広く、しかし時間の関係上、残念ながら浅く、専門用語を用いて概説します。	
	文化論	〈人間〉や〈動物〉、〈善〉や〈悪〉といった言葉を耳にした際にわれわれが抱くイメージもしくは表象とは、いかにして文化の中で作り上げられて、個々人の意識へと浸透してきたのでしょうか。本講義では、21世紀に生きる人間が様々な事象または事物に対して抱く表象の根源を、現代文化及び人間像構築に影響を与えたヨーロッパの思想家たちの言説へと遡上していきます。テーマ毎に関係する人物やその著作について取り上げながら、文化と表象が生成されたプロセスを明らかにすることが目的です。	
	文化人類学	私の「当たり前」は、他者にとっても「当たり前」とは限らない。この授業は、社会をみる文化人類学的な視点の獲得を目的とする。15回の講義を3部構成とし、第1部は、文化人類学の方法論と概念を説明する。第2部は、家族・親族、ジェンダー等のトピックに関して、オセアニア、アフリカ、東南アジア、日本等の事例を広く紹介し、文化の普遍性と個別性について考える。第3部は各論とし、グローバルな状況下にある現代の文化的事象を取り上げる。	
	西洋の美術	西洋美術の多くは様々な既存の物語を題材にしており、いわば本の挿絵のような役割を果たしてきました。本講義では聖書およびそれに関連する物語に基づいた美術作品を取り上げ、図像表現上の慣習的な約束事を学びながら、そこで表現されている場面がどのような物語の流れの中にあり、登場人物が誰であり、いかなる図像的意味を持つのかなどについて理解を深めます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本近世文学	江戸時代の文学作品の大きな特色の一つとして、「言語遊戯性」が挙げられます。この「言語遊戯性」は、散文作品の中にも見られますが、この科目では、主に江戸時代の狂歌・俳諧などといった韻文作品を採り上げる事にし、「本歌取り」「振り」「掛詞」などの技法を分析しながら講読します。これら非常に高度な技法を駆使しながらも、伝統的な短歌・連歌には決して用いられない卑俗な言葉をわざと織り込んでいる点にも注目します。また、「本歌取り」の「本歌」とされている古歌についても解説します。	
	西洋文化論	ロマン主義から20世紀に至るまでの西洋文化について、主にドイツを中心に、文学、絵画、思想といった対象から学んでいきます。芸術作品が生まれた背景について、歴史的な観点からも概説していきます。適宜映像メディアを使用して、視覚的な理解も促します。	
	人間と生命の倫理学	古今東西の人間観、生命観を理解した後、今日の生命をめぐる諸問題について具体的に考察します。そして、考察を進めるなかで、今一度そもそも「生命とは何か」という根本問題に立ち返ります。そして、今日の生命をめぐる諸問題を解決するためには、人間中心の従来の倫理学ではなく、もっと広い人間も動物も地球も含めた「生命」に基づく倫理学の必要性に気づかせます。そして「生命への畏敬の倫理」を実現するための方策を検討します。	
	人生の探求としての倫理学	多様な価値観が認められ、自分の人生を自分の思うままに生きていくことが許される時代にあって、逆にわれわれはどう生きていけばいいか迷い、悩んでいます。また、われわれを取り巻く自然環境、社会環境、国際関係が激変し、これまでの人倫の理法が通用しなくなっています。かつて、同じように激動の時代において人生を切り開いた先達の生きざまを手懸りに自分の人生をどう生きぬくか考察します。なお、その際先達がそうであったようにわれわれも新たな人倫の理法についての考察を試みることにします。	
	愛の倫理的考察	様々な愛について、ギリシア神話や現代のポップミュージックの歌詞から考察し、分類整理します。愛は幻想であるとする動物行動学や脳科学などの領域で語られる「愛」について考察し、その問題点を把握します。また、その上で、今の時代にこそ愛が必要であるにもかかわらず、愛が欠如していることを理解し、愛に満ち満ちた社会の構築の必要性を認識します。	
	現代日本語の特質	授業では、学校文法として知られている国語の常識を手がかりとしながら、それらは本当に正しい知識なのか、言語学の観点から見直していきます。日本語の規則性を扱う日本語学の中で、比較的むずかしいものを取り上げて解説します。 扱うテーマは、以下の通りです。 (1)日本語の統語(活用、正格活用) (2)日本語形態論(語幹、形態素、異形態) (3)日本語の音声(子音、調音、IPA) (4)日本語の音韻(音素、異音、相補分布)	
	ドイツ文学	18世紀のドイツで起こった文学運動である疾風怒濤(シュトルム・ウント・ドラング)とは、作家たちによるドイツ啓蒙主義に対する執筆を通じた抵抗であるといえます。本講義では、疾風怒濤を代表する2人の作家ゲーテとシラーを取り上げて、当文学運動についてや、作家と作品について学んでいきます。講義中では作品内から抜粋した資料を配布して、作品解釈を行います。作品の理解を促すために、作品の執筆された歴史的な背景や当時の思想なども概説します。視覚的な理解を促すために、適宜DVDなどの映像資料を用います。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	江戸時代の衣服	被服学的な内容、中でも特に、素材学的な内容を中心として扱います。まず、日本の伝統的の衣服の代表的な素材として、麻・絹・木綿の三種を採り上げ、それぞれの材料や加工方法や特性などについて概説します。この三種のうちで、木綿糸は歴史的に最も新しく、江戸時代に入ってから非常に急速に普及した素材です。この事に注目し、当時としては新奇な素材であった木綿が、江戸時代の社会にどのような影響を及ぼしたかについて、詳しく解説します。	
	日本語と英語	通訳は娼婦と並び最古の職業のひとつといわれます。人類の歴史は異文化接触と切り離すことはできません。異文化が交わり、異なる言語を話す人々が関わる現場では、常にその橋渡しをする行為が必要とされたはずで、戦争も異文化接触の一形態であり、平和構築における通訳翻訳の役割は無視することはできません。今も昔も、通訳翻訳は我々の世界のあらゆる側面を形作っています。また、外国語学習と翻訳は切り離すことができませんが、外国語を学ぶために翻訳はどのような役割を果たすのでしょうか。驚異的な進歩を遂げたAIによる翻訳はどのような仕組みで実現しており、どのように世界を変えていくのでしょうか。この授業では、通訳翻訳の視点から現在の世界の成り立ちについて考察し、通訳翻訳の未来について展望します。	
	科学史	現代社会に生きるわれわれのもつ科学や自然観は、ある日突然生まれたものではありません。数千年の時を経て、様々な時代と地域で育まれた思想が交わり、混じり合い、あるいは衝突を繰り返しながら現代に至っています。科学の思想的側面や社会的背景は、現代の科学技術に関する問題を理解する上でも重要です。科学とは常に社会の中で人間によって営まれる文化的活動だからです。 本講義では、一般的な西欧科学史叙述の出発点とされる古代ギリシャから、科学の歴史における大きな転換点とされる16-17世紀科学革命にいたるまで、社会の中の科学、文化としての科学、思想としての科学の歴史的変遷を通観します。	
	日本文学	江戸時代初頭、古典的名作とされる文学作品を活字本・整版本として出版する動きが盛んとなり、都市を中心に「本屋」という新しい職業が誕生しました。それに伴い、今まで読書習慣を持たなかった庶民層が「本屋」で書物を手に入るようになり、「本屋」ではこうした新規の読者層に向けて、同時代の作者による啓蒙的内容の文学作品を出版するようになりました。この科目の前半部分では、主に出版史・文学史上の事跡の解説を行い、それを踏まえて、後半部分では、江戸時代前期の特徴的な文学作品（教訓物仮名草子など）の講読を行います。	
	西洋の図像学	西洋美術の多くは様々な既存の物語を題材にしており、いわば本の挿絵のような役割を果たしてきました。本講義では主として旧約聖書を題材にした美術作品、特にシスティーナ礼拝堂内の天井画を取り上げます。受講者は、図像表現上の慣習的な約束事を学びながら、そこで表現されている場面がどのような物語の流れの中にあり、登場人物が誰であり、いかなる図像的意味を持つのかなどについて理解を深めます。	
	キリスト教倫理	キリスト教の経典はいうまでもなく『聖書』であり、その『聖書』を拠り所としてキリスト教は成立しています。しかし、『聖書』に収められている「福音書」「パウロ書簡」「使徒言行録」には相互に矛盾する記述も多く見受けられます。これまでのキリスト教理解に立ったキリスト教倫理の考察に加え、今日の「キリスト教」の成果を踏まえながら、イエスの言行、パウロの思想等を理解し、今日的な意味でのキリスト教倫理についても考察します。少し専門的な話になります。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	芸術文化学	あらゆる概念がそうであるように、「芸術」や「文化」という概念は歴史的な経緯を持っています。それゆえ、「芸術」や「文化」という言葉によって何が意味されているかということは決して自明ではなく、それぞれの時代や地域において様々な使われ方をしてきました。本講義では西洋の芸術文化思想を代表するカントの思想を取り上げ、その思想の特徴およびその根底に流れる目的論的思考について学びます。前半はカントおよびそれ以降の「芸術」概念の変遷について学び、後半はカントの芸術文化思想についてより詳しく学びます。	
	江戸時代の服飾	江戸時代を中心に、服飾学的・美学的な内容を扱います。古来、衣服に自分の好みの色・柄を付けて着るという事は、上流階級の人々だけの特権でした。しかし、江戸時代に入ってから、布を染色する技術が飛躍的に進化した事によって、衣服の色・柄に凝るといふ楽しみが、庶民にも手の届くものとなっていきました。江戸時代に発展をみた染色技法の代表格としては、友禅染めと小紋染めが挙げられます。それぞれの技法の原理や特性、柄の意味などについて解説します。	
	日本史	江戸時代から戦後日本までの日本の歩みを学びます。日本の歴史の歩みは平坦ではありません。山あり谷ありの歩みです。それらを乗り越えてきた日本人の緊張や心意気に思いをはせたいものです。重点を近現代史、特に、政治史・社会史におきます。	
	西洋史	史学史とは歴史学の歴史であり「どのように歴史が書かれてきたか」を問う学問です。本講義では、西洋世界で歴史がどのように認識され、叙述されたか、詳しく見てゆきます。「そもそも歴史とは何か」という問いから入り、古代世界の歴史認識、中世から近代にかけてのヨーロッパにおける歴史叙述を見てゆきます。最後に歴史学の最新動向についても触れます。	
	地理学	まず、地理学の歩み、地理学の基本概念について講義した後、自然環境と人口問題、宗教と文化について講義し、地球全体に対する系統地理学的な理解をします。次に、世界のいくつかの地域を取り上げ、担当者自身が撮影した写真を見ながら、各地域の現在について語り、地誌的理解をします。最後に、地形図や空中写真等を通して、「広島」を地理学的に理解します。高校時代に「地理」を履修していなかった地理学初心者を念頭に置いて講義を進めます。	
	社会学	社会学とは、人間の営みに対して、徹底的に、恥じらうこともなく、倦むこともなく、強烈な関心を抱くことから始まる学問です。探検家や冒険家の記述が「見知らぬ世界を体験すること」による興奮を提供するのに対して、社会学は「見慣れた日常世界の意味を変容させること」によって知的興奮を提供します。	
	法学	現代社会で「疎外された(=つまはじきにされた)人々」の暮らしと法について考えます。法は「理性的判断に基づき合理的に行動する人間」を主人公に組み立てられてきましたが、現実社会では「理性的判断に基づき合理的に行動する人間」などという人はいません。多かれ少なかれ私たちは「疎外された人間」なのです。その点を突き詰めて、「疎外され」「不合理な行動をとらざるを得ない人間」の視点から再構成した「法」を考えます。平板な法学の概論ではなくむしろ社会福祉に近い授業となるかもしれません。	
	政治学	政治学における基礎的な概念を、具体的な事例や問題に即して講義します。この講義は、経済学や社会学、法学などの社会科学隣接分野、あるいは政治学の各分野をこれから履修していく上での基礎的科目です。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	経済学	経済の主要指標などを説明する基礎的な経済学講義です。初めて経済学を勉強する学生にも、経済学とは何かを分かってもらえるような基礎講義です。現代の経済学には、「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」の二つに大きく分類されます。この講義では経済学入門の第I部分として、「ミクロ経済学」の基礎的な知識について勉強します。また、世界経済及び日本経済が直面している様々な問題をピックアップして理論的知識と現実の状況・応用の両方から分析します。更に、身近な生活の中で経済学に関連する新聞やニュースなどのトピックスも取り上げて説明します。	
	情報社会論	情報社会の進展に伴い、メディア端末機器を用いて様々な情報へアクセスする機会は増加しています。そのため、私たちの日常生活の様々な活動は情報社会に密に接しています。情報社会における諸々の出来事について、情報社会に関連する法律やセキュリティ、コミュニケーションなどマナーやモラルの観点から、私たちの身の回りの題材をもとに、情報社会の変化について俯瞰的に検証します。	
	日本近代史	明治維新以降の日本の歩みを学びます。本講義ではとくに日本近代の経済の部面を中心に学びます。	
	日本近現代史	明治以後の歴史を扱います。政治史を中心にします。明治維新以後、日本は立憲政治の実現に努力します。その過程で、自由民権運動が大きな影響を与えます。明治22(1889)年大日本帝国憲法が制定され、翌年帝国議会が開設されます。第1回帝国議会以後、民権運動の流れをくむ政党勢力と藩閥政府との対立・妥協・協力関係が形成され、政党と内閣の関係は変化していきます。日清・日露戦後、日本では現代社会が出現していきます。お正月の迎え方を例にとり、近代から現代社会への変化を考えていきます。	
	西洋中近世史	中近世ヨーロッパの歴史について詳しく見てゆきます。本講義では高校世界史に出てくるような事柄にも触れますが、中近世ヨーロッパの人たちが、人間や世界のあり方についてどのような考え方を持っていたのか、ということについても詳しく見てゆきます。叙任権闘争後に起きた国家観の変化については特に詳しく論じていきます。	
	生活の中の地理学	前半は、比較的身近なトピックの中から、地理学的な現象をとりあげ解説します。後半は、近年の地理学の新しい潮流の中から、行動地理学、ジェンダーの地理学、人口移動、地理情報システム(GIS)を取り上げ講義します。「地理学」では物足りなかった人にも応える、やや専門的ですが身近な内容です。	
	社会学の ものの見方と考え方	本講義では、コーヒーを題材として、「社会学のものの見方と考え方」を講じていきます。 現代社会において、コーヒーは、煙草や酒と並ぶ嗜好品の代表であり、多くの人たちの日常生活に身近なものとなっている。一方で、中世にイスラム教圏で始まったコーヒー飲用の習慣が西欧社会へともたらされることで、近代社会が切り開かれるきっかけとなった、という歴史的な事実はそれほど知られているわけではありません。エチオピアに自生したコーヒーの木がイエメンに持ち込まれてイエメンだけで栽培されていた頃、生豆の状態であれば虫も鼠も食わず品質が劣化しないコーヒーは、アラビア商人にとって最も投機性の高い商品でした。「ジャーナリズム(新聞)」「郵便制度」「株式会社」「保険会社」「証券取引所」などは、英国のカフェハウスから発祥し、パリのカフェから民衆はフランス革命へと出撃しました。現在でも、コーヒーは、輸出入品目の中で石油に次ぐ商品であり、農作物最大の輸出入高を誇っています。 本講義では、「コーヒーの歴史」から「カフェや喫茶店」「コーヒー器具やコーヒー豆の消費」までを含めて、とりわけ文化としてのコーヒーを中心として、現代社会を論じていきます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	現代経済学	マクロ経済学の基礎的概念(経済学を学ぶ上で必要な用語・考え方など)や、GDP、国民所得の決定、投資、財政・金融政策、IS-LM分析、雇用の決定、国際マクロ経済学などの基礎的理論についての解説を中心に授業を進めていきます(図や簡単な数式を用いた経済現象の解説を含む)。 講義の際には、ニュース・トピックスなどの実例も紹介していく予定なので、日々の出来事(特に経済に関するもの)に関心を払い、メディアやインターネットなどから常に情報を得るように促します。	
	情報環境論	情報のデジタル化が進み、私たちの生活の身の回りには、様々な情報コンテンツが溢れている。少しの技術を習得することで、操作したり、簡単に複製を行うことができるようになった。特に近年、技術革新は目覚ましく、IoTや人工知能、ロボット技術の発展により、経済社会が大きく転換する大改革時代が到来しつつある。その情報社会について、「科学的な理解」を中心とし、情報を広く考える。パソコンの解剖やデジタルものづくりなどの活動を通じて、情報の科学的な理解を深める。	
	政党と選挙の政治学	無党派層の増大や投票率の低下というニュースをよく見聞きすると思います。たしかに今日では、政党と選挙についての関心は低下しています。特に現代日本の若者に顕著かもしれません。しかし、政治を変えようとするれば選挙や政党を介在する必要がありますし、また、これらを避けようとするれば、民主主義に反する場合もあります。このように政党と選挙は、現代政治における問題点であるとともに、これらを抜きにして政治を進めることができないという独特な位置を占めています。 この授業では、政党と選挙の歴史的背景から説明し、今日における政党と選挙の意味を捉えなおすことを意図しています。また、最も身近な政治の一つである現代日本政治についての理解を深めることも目的としています。	
	歴史と社会	西洋史では16～18世紀を近世と呼ぶが、近世はヨーロッパが周辺世界とかつてないほど深い関わりを持つに至った時代です。近世以降に関して、ヨーロッパからのたらしかけを抜きに南北アメリカ、アジア、アフリカの変容を理解することはできませんが、反対に、周辺世界との関わりを考慮せずにヨーロッパの変容を理解することもできません。本講義では中世と近代をつなぐ近世という時代のヨーロッパに焦点を絞り、ヨーロッパにおける内在的な要因に十分配慮しつつも、社会、経済、政治、文化といったものが周辺世界との交流の中でどのように変容したか、詳しく検討していきます。	
	歴史人類学	フランスの歴史学は、アナール派が歴史学に人類学的視点を導入して以来、歴史学のテーマが多彩となり、歴史学の活性化に大いに貢献しました。日本の歴史学界もこの影響を受け、西洋史、日本史、東洋史において、様々な歴史人類学的テーマがとりあげられるようになっていきます。その中から、気候変動、裁判記録、王権と婚姻、歴史人口学、ジェンダー、ワールドヒストリーにかかわるテーマを取り上げ、いくつかのトピックを通じて、歴史上の社会を人類学的視点から多角的に考察します。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会科学)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中国の歴史と社会	昔からユーラシア大陸東端に中国という巨大国家が存在しますが、広大な国土と世界一の人口を持つこの国は、どのように形成し、発展してきたのでしょうか。 中国の歴史を見ると、興隆と衰退、また分裂と滅亡の時代がありました。中国は、4000年以上の歴史において輝かしい文明を築き、周辺諸国にも大きな影響を与えています。近代以後は、アヘン戦争、日清戦争等で外国列強に破れ、半植民地状態に陥り、20世紀に入ってから満州事変、日中戦争及び国内戦争など苦難の時代が続いています。20世紀中期、中国を再びまとめたのが社会主義体制の中華人民共和国でした。しかし文化大革命のような混乱があり、貧困状態からの脱出できませんでした。新しい変化を見せたのは20世紀末期からの改革開放による経済成長でした。100年前にいわれた「眠れる獅子」が、現在「台頭」して急成長するようになってきています。中国の歴史は劇的変化の歴史であり、文明論的視点から見れば、それは中国文明の一つの特徴ともいえます。 文明論的視点から中国の発展と変化の軌跡を分析し、「中国がどんな国か」という問題を歴史的アプローチから考えることを目的としています。	
	近代日本と戦争	日本の近代史のおよそ150年のうち、そのはじめの70年余り、日本は戦争に明け暮れました。他方、後半の70年間は領土内で戦争を経験しない事実上「平和」な時代であったといえます。戦争の時代から平和の時代へと、大きな変化を経験した日本ですが、常にそのときどきの戦争から直接的、間接的に大きな影響を受けてきました。この授業では、日本が戦争とどのように関わってきたのかを考えます。15回の授業のうち、まず前半では日本が関与した戦争について時系列に沿ってみていきます。日本がどのように戦争に関与していったのか、それはどのような国際環境を背景としていたかを把握することが狙いです。そして、後半では戦争の多様な側面に注目し、トピックを通じて戦争が日本の政治と社会に与えた影響について考えます。実際に起きたことを具体的に把握するために、映像資料なども用います。	
	資産運用の基礎	貯蓄から投資へという流れの中で、わが国では資産運用が身近な存在になりつつあります。本講義では、資産運用を行う上で必要となる金融市場の基礎知識や資産運用に関連する基礎的な理論を学びます。 本講義は、「実務経験のある教員による授業科目」です。担当教員は信託銀行などでファンドマネージャー、自己勘定トレーダー、クオンツアナリストなど資産運用業務に18年間に渡って従事してきました。本講義は、資産運用の実務で実際に活用されている理論を学習した上で、その利用方法を演習を通じて習得します。	
	地方行政と法	日本国憲法で保障された地方自治の原理とは、団体自治と住民自治という二つの要素からなります。簡単に言えば、地方自治とは「地域の政治行政については、国とは別個独立した統治団体としての地方自治体が自ら（団体自治）、住民の意思に基づいて（住民自治）これを行う」といった考え方です。つまり、自分たちのことは自分たちで決めて実施する、このような「自己決定」の考え方は、民主主義の根幹をなすものであり、地方自治が「民主主義の学校」と呼ばれる理由です。この授業では、地方自治の原理について、主に地方自治法上の諸制度を参照しながら学び、学生が自分たちの暮らす地方自治体の政治行政に関心を持ち、主権者として主体的にこれに参加できるようになることを目指します。	
	事例で学ぶ民法	この講義の目的は、各種資格試験・国家試験等で出題される民法択一式問題をもとにした事例問題の演習および解答・解説を通じて、民法の基礎的な論点(争点)についての理解を深め、市民社会の基本法である民法について知る手がかりを得ることです。他の民法諸科目との関係では、この講義は、各学部で開講されている民法諸科目を履修する前提となる知識を整理して理解を深めるとともに、各種試験の民法択一式問題に対応できる知識・実践的能力を養うものとして位置づけられます。この講義の検討対象は、債権総論・債権各論・家族法の諸論点です。この講義の検討対象は、民法総則・物権・担保物権の諸論点です。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	現代社会と企業法	現代社会は大きな転換点にあります。そこで、経済、社会、環境の大きな変化とそこから発する諸問題に対して企業がどのように関わり、企業を規律する法としての企業法がどのような規律の変化を見せているかを解説することとします。 授業の順番は次のとおりです。 最初に、①経済・社会・環境の変化に企業はどのように関わるのか、法はどうあるべきかについて説明します。そして、②企業の中で最も重要な役割を果たしている株式会社の仕組みについて説明します。その上で、③株式会社のような営利企業が、現在の社会問題に対してどのように関わるができるかを法制度の面から検討します。	
	国際社会と法	地球温暖化や武力紛争など、メディアで目にするような国際社会の現状と課題を理解するには、政治などのほかに、法を軸とした視点も必要です。本授業はおもに講義形式によって、環境、武力紛争をはじめ、外交など様々な分野における国家などの活動や関係を規律する法規範(国際法)の基本的な内容を概観します。新聞記事などを素材として時事問題を扱い、履修者には現代社会と国際法とのつながりを意識してもらいます。	
	現代社会と刑事法	現代社会は、インターネットの発達による高度情報化、国際化・グローバル化を特徴としている。2022年にSNS等におけるインターネット上での誹謗中傷をめぐり侮辱罪を厳罰化した刑法の改正は、高度情報化に対応したものと言える。他方、国際的には大麻使用の合法化の動きが進んでいるのに対して、日本では大麻使用罪の創設が検討されている。犯罪と刑罰に関わる刑事法(刑法・刑事訴訟法・犯罪者処遇法)は、時代と社会の変化に伴う犯罪情勢の変化に応じ、改正を繰り返してきた。この授業では、犯罪の動向を正確に把握した上で、時代や社会が変化しても変わらない・変わるべきではない刑事法の基本原理を学習するとともに、現代社会における刑事法の在り方を検討する。	
	メディア論	授業は、内外の最新ニュースらについて触れ、担当教員の取材現場での経験を時間の許す範囲でお伝えします。対象とするニュースは新聞記事や報道番組など主要メディアの政治外交・国際・経済・事件事故・科学などが中心です。日本に関する日本メディアの報道だけでなく、国際ニュースに関する海外メディアの報道も取り上げます。 報道の歴史をたどりながら、事実確認の重要性、言論の自由や公権力の監視などジャーナリズムの役割、その実態、失敗、課題を考察します。個人の思考が国際政治の構造や国内の党派などにどれほど大きく影響されるものなのか、担当教員の経験を踏まえてお伝えします。広島大学であることを意識し、戦争・紛争、核兵器をめぐる諸問題を重視します。あわせて文章の読み方、書き方などの技術を扱い、実社会で参考になりそうな注意点や工夫もお話しします。	
	社会保障論	社会福祉に焦点を絞り、その対象領域、基本構造、原理などを学び、各領域の現行制度について教授します。 広島市福祉職採用試験や国家公務員試験「人間科学」、家庭裁判所調査官試験などで「福祉」科目を受験しようと考えている人、あるいは社会保険労務士、労働基準監督官などに関心のある人も対象にしています。	
	地政学	テキスト、戸田・三上・勝間編著『改訂版 国際社会を学ぶ』見洋書房(2019年)に沿って、多様な国際社会の見方を学びます。受講生が事前にテキストを読むことを前提に、授業では、テキスト内容の掌握よりは、その中の重要なセンテンス、キーワード等を自在に取り出し、その解説を行います。 その他、適宜、LMS等を活用して「入試問題で磨く国際政治学の基礎」を行う場合があります。共通テストの英語、現代社会、世界史などから、国際社会を理解する上で、役に立つ基礎的知識を取り上げることも検討しています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	化学	社会問題は様々な分野で拡大していますが、国民は有効な声をあげることができません。その原因の一つは、自然科学の基礎知識が十分ではないことにあります。この授業では化学者達が創ってきた物質の世界を概説します。私達の身の回りには人工あるいは天然の化学物質が満ちあふれています。化学とは、原子・分子あるいは化学反応を土台として物質の世界を理解し、新しい物質を創りその働きを見出す学問です。「化学物質=わからないもの・危ないもの」、「化学=暗記科目」、「化学式=難しい」という発想から抜けだし、周囲にあふれる化学情報を理解するための基礎を身につけることを目標とします。	
	生物学	失われつつある地球環境を理解し、それに関する諸問題を解決するためには、そこに生息する生物の種類や生態といった「生物多様性」を把握することが不可欠です。海洋は地球の生命圏の7割(面積)から9割(体積)を占め、多様な(多細胞)動物の生息場となっています。従って動物の分類や生態を理解し、陸の生物と比べることは、生物全体の多様性、ひいては地球環境を理解することに直結します。 本講義では、生物学における基本的な事項を学ぶとともに、動物を中心とした以下の項目について、最新の研究成果を交えながら解説します。 ・生物の体の成り立ちと細胞の仕組み、・動物の器官とその働き、・動物の系統分類、・地球上の生物の生息環境、・生物多様性の種類とその保全	
	環境科学	近年、地球温暖化や環境破壊はますます進行し、異常気象の頻発や生態系の急激な変化がわが国でも顕著になりつつあります。そのような背景において、生物多様性条約に則った遺伝資源利用の枠組みの整備や持続可能な開発目標(SDGs)等、世界の大きな潮流は着実に環境重視の方向へ進んでいます。この講義では、自然科学的な視点から環境問題や生物保全の基本を理解するため、環境問題の現状と原因について解説し、問題解決のための取り組みについて紹介します。さらに、人間活動が個々の種や生態系に与える影響に注目し、生物多様性問題について概観します。	
	数学	整数という...、-2、-1、0、1、2、...の数の集まりは非常に単純なようですが、それについて論ずることは単純ではなく非常に奥が深いものです。その整数論の一端として、整数に関する初等的な性質や計算方法を学びます。	
	応用数学	実社会において発生する諸問題が数学により解決される例は決して少なくありません。本講義では次の各問題を数学的に取り組み、最適な解決方法の一つひとつを説明します。 ・各人につづつ別々の仕事を割り当てる際、仕事効果を最大にする割り当て方は？・使用する順序が決められた2台の機械で複数の仕事をする際、最も早く終わるための仕事の順序は？・複数の中から一つだけ重さの違う物体を量りで探す際、なるべく少ない回数で見つけ出すには？・全ての道を無駄なく回るには？・各地の人々を1ヶ所に集める際、全員の総移動距離が最も少なく済む集合場所は？・いくつかのチームがリーグ戦を行う際、全試合を最も効率的に進める組み方は？・道路を敷いて各地を結ぶ際、最も経済的な敷き方は？ なお、数学に関する高度な知識を前提とせず、手順を覚える手間をとるだけで解決方法を身につけられます。	
	遺伝学の基礎	この授業は、生命科学にあまり馴染みはないけれど生物多様性、遺伝病やがんについて興味がある、という方々を対象としています。 生物は自らを複製し、進化します。ヒトの体内をみれば、微細な精度と高い効率で組織や器官を働かせ、脳で複雑な情報処理を瞬時かつ的確に行います。各々の細胞が膨大な化学プラントを稼働させ、しかもそのプラントを低エネルギーでまかない、個体発生までやってのけます。21世紀になり、生命の発生と維持に係る情報を保管するゲノムを次世代へ継ぐプロセスが、物理学や化学のように理詰めで説明可能となっています。生命科学の入り口として、発がん機構、クローン技術、絶滅種の復活などのkey wordsを理解し、生態系あるいは地球環境を理解する一助にしてください。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	公衆衛生学	健康の概念、健康増進や疾病予防の考え方や取組みの実際を紹介し、その過程で、健康や疾病の情報を処理する疫学の方法を学びます。 次に、保健・医療・福祉・介護システムの概要を理解します。続いて、放射線の物理学、化学、生物学と私たちの健康について話題提供します。 これらは、環境と健康との関係、環境の変化が健康に与える影響を理解し、Covid-19 pandemicの理解へと繋がります。	
	宇宙と物質と生命の科学	この科目では、生命誕生のサイエンスを宇宙環境の視点から概説し、自然科学への関心を育て基礎知識を習得します。現在、地球上で起こっている様々な問題は、宇宙規模で見れば小さなことかも知れませんが、我々にとっては大きな問題です。これを解決するためには宇宙・地球・生命の歴史を知ることが大切です。生命出現は、宇宙史の最大の出来事です。広大な宇宙において生命が存在するこの地球は最も尊いものでしょう。この科目では、地球の一員としての我々がどこから来たのか、生命と地球環境の尊さと自然の奥深さを講義・討論します。生命は、約40億年前の原始地球上で無生物から出現したと考えられていますが、この歴史を、地球外生命探査やバイオテクノロジーなどによる最新の成果を取り入れ講義します。	
	自然科学と技術入門	現代社会では様々な局面で自然科学や技術の知識や理解が必要です。本科目では、環境や生活などの身近な観点から自然科学的な知識や理解を深めるとともに、自然科学の成り立ち、自然科学者・技術開発者とは何かについて学びます。本科目は「生命の化学」を一部改訂し、より一般的な自然科学的内容と近年の自然科学や技術が関わる話題を加えることによって、自然科学や技術が関わる社会問題などを客観的および論理的に理解できることをめざしています。	
	動物の自然史と分類	現在、地球上で見られる動物の基本的な体のづくり（ボディプラン）は、約5億年前に生じた多細胞生物が、様々な環境に爆発的に適応した結果としてできあがったと考えられている。生物を似たグループ（分類群）にまとめ、名前をつけ、認識する学問を「分類学」といい、ある分類群が進化の過程を経て、新しい分類群へと変遷していく繋がりを「系統」という。 本講義では、分類学の基礎を学び、現生の代表的な動物群をとりあげ、形態、発生、生活様式などから系統関係を考察することにより、環境への適応の結果として生じた動物の多様性やその保全について考える。	
ス ポ ー ツ ・ 健 康 科 目	栄養と健康	私たちの食生活は大きく様変わりしており、便利さや豊かさが増した反面、それと引き換えに肥満を代表とする生活習慣病が増加しています。生活習慣病の引き金には、遺伝的素因や生活活動状況、ストレスなど様々な因子が複雑に絡み合っています。その中でも食生活の良否は身体的・精神的健康に大きく関与しています。そこで、栄養学的側面を中心として、健康づくりについて学修します。	
	健康科学論	健康に関する情報が氾濫しているとも言える今日において、それらの情報の正否は何を基準に判断すれば良いのでしょうか？また自分が今、健康的な生活を営んでいるのかどうか、何を基準に判断すれば良いのでしょうか？これらについての理解をしていないと、自分の健康を維持・増進することはできません。 この科目では、健康を維持・増進するための運動を中心とした基礎的な知識を集積し、それを実行するためには何が必要かを学習します。また、健康に関する最新の話や身近な問題を提供する予定です。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	運動科学論	<p>「引」と書いてある取っ手を握ってドアを開けることができます。友達とおしゃべりをしながら歩くことができます。どうしてできるのでしょうか。「勉強」とスポーツは両極におかれますが、運動選手は頭が悪いのでしょうか。スポーツに「競争」はつきものですが、優劣を決め、私たちが序列化するために競争するのでしょうか。</p> <p>スポーツや運動にかかわる諸問題を考える場合、運動をとらえる切り口はいろいろあります。この科目では、スポーツ運動だけでなく日常的な運動も含めた、身体運動における私たちの身体の構造と機能の理解から始め、この側面から人間の運動というものにアプローチしていきます。運動に関するハードウェアとソフトウェアをながめると、あなた自身もつ「すばらしさ」と「かけがえのなさ」が見えてきます。私たちのからだや、運動をめぐるいくつかのことについて考えてみましょう。</p>	
	健康科学演習	<p>今日、運動不足やストレスの問題はますます増加の傾向にあり、これらは健康阻害の一因となっています。この科目では、「運動・スポーツ」を通じて、どのように「健康」な状態を生み出していけるのかについて考察します。まずは、健康づくりに関する基礎的な知識を学習した上で、運動時の生理的指標の変化を確認してみましょう。そして、明らかにしたい運動や健康に関連した実験テーマを自分で決め、正しい手続きで数値データを取り、そのプロセスと得られた結果をグラフや表を交えながらきちんと文章で説明しましょう。</p>	
	運動科学演習	<p>大学とは「学問・研究」をするところです。「学問・研究」とは、簡単に言えば、よくわかっていないものをわかるようにして示すことです。知識等を獲得するだけでは不十分で、まだ明らかにされていない問題を「自分で」見つけて、これを正しい方法で解決し、その成果をほかの人に示せるようになることが求められます。</p> <p>この科目では、人間の運動や運動の学習を材料にして「学問・研究」を行います。スポーツの熟練者は「瞬間的にもものを見て取る」ことができるのでしょうか。ターゲットが何色のとき狙いやすいのでしょうか。どんなストレスが反応の速さや強さに影響するのでしょうか。運動がすぐに上達する「秘策」みたいなものはあるのでしょうか。あなたは日常の運動やスポーツについて、不思議だなあと感じていることはありませんか？</p> <p>正しい手続きで数値データを取り、あらわれた差が偶然のものではないことを明らかにして、そのプロセスと得られた結果をグラフや表を交えながらきちんと文章で説明してみましょう。</p> <p>課題発見、問題解決型の授業です。</p>	
	健康スポーツ実習 (Shudo AP)	<p>プロジェクトアドベンチャーの手法に基づいた体験学習を用いて、人間関係の健康のために最適な言動・行動とは何かを探り、人間関係を主とした環境の変化に適応するための方略を学びます。「Shudo AP」とは、広島修道大学 (Shudo) アドベンチャー (Adventure) プログラム (Program) の略です。</p> <p>人は生きていく上で、何度となく新しい人間関係を構築していきます。幼少期、小学校、中学校、高校、大学、社会人、それぞれの時期で新たな人と出会うたびに、新たな人間関係を築いていきます。皆さんのこれからにとっては、卒業後、世代を越えた多様な価値観を持った人たちと共に仕事に従事する必要があります。このことを考えると、「社会的に良好な人間関係を築き、グループで同じ目標のもとに課題を解決していく能力」を高めることが重要となります。そのために必要なことは何かということをも身体活動を行いながら学ぶ科目です。</p>	
	健康スポーツ実習 (アダプテッド・スポーツ)	<p>アダプテッド・スポーツとは、障害のある人はもちろん、幼児から高齢者、体力の低い人であっても、ルールや用具を対象者の特徴に適合 (adapt) することによって展開するスポーツ活動のことです。本授業では、様々なアダプテッド・スポーツのルールを学習し、体験することを通して、ルールや用具の工夫について学びます。また、身体的な制限を伴いながら (障害疑似体験) の実践を通して、自分も含む様々な対象や状況にadaptする知識を身に付けます。加えて、チームで行う活動を通して、協調性などの社会的スキルを身に付けます。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康スポーツ実習 (バドミントン)	バドミントンをを用いて、スポーツを介した健康維持について学修します。バドミントンは、手軽に行えるスポーツの一つとして人気のスポーツです。しっかりとルールを理解し技術を身に付けることで、より楽しめる“生涯スポーツ”とすることが出来ます。この授業では、バドミントンを介して運動が私たちの身体に与える影響を、体力や健康の維持という観点から学んでいきます。授業内では運動中の脈拍や歩数などを測定し、自身の身体を用いて健康への理解を深めます。	
	健康スポーツ実習 (バスケットボール)	バスケットボールというスポーツ種目が、果たしてからだの健康の維持増進を図る上でのスポーツとして適切であるか否かについて検討します。また、そうすることで、最適な運動とは何かを探り、環境や身体の変化に適応したスポーツ種目の選択をするための方略を学びます。 同時にバスケットボールの基本的な技術や戦術を身に付け、ルールを覚えてゲームを他の人と一緒に楽しめるようになることも目的としています。	
	健康スポーツ実習 (ゴルフ)	生涯にわたって健康でいることは、生活の質(QOL)を高めるうえで非常に重要です。ゴルフは幅広い年齢層に愛好され、健康維持を目的とした生涯スポーツとしても適しています。一方で、ゴルフはマナーが非常に重視されるスポーツでもあります。本授業では、ゴルフの基礎的技術や特性の理解とマナーについて学習します。また、ゴルフを通して他者とのコミュニケーションの取り方、自分自身の身体の健康についても学んでいきます。	
	健康スポーツ実習 (卓球)	卓球を用いて、人間関係の健康のために適切な運動行動とは何かを探り、環境や身体特性の変化に適応するための方略を学ぶ。将来に渡って、自己のライフステージや心身の状態に応じて、それぞれに適したスポーツを生活に取り入れ、豊かで健康的なライフスタイルを形成する能力を養うことを目的とする。卓球という、比較的気軽に行える教材を通して、健康増進を図ると共に、スポーツの持つ特性である、自然発生的コミュニケーションにより、円滑な人間関係を形成できるようにする。また、技能の向上へ向けて、創意工夫しながら挑戦していく気持ち、勝利への追求心、協同・協力の精神などの涵養も図っていききたい。もちろん、スポーツ本来の目的である、「楽しさ」を十分に味わってほしい。	
	健康スポーツ実習 (サッカー)	サッカーを用いて、人間関係の健康のために最適な運動行動とは何かを探り、環境や身体特性の変化に適応するための方略を学びます。 サッカーは、激しいボディコンタクトが許されており、女性や体の弱い人が参加することは難しいという印象を受けがちなスポーツです。しかし、フットサルに見られるように、①オフサイドをなくす ②ボディコンタクト、対人へのスライディングを禁止する ③交代を無制限にする など、ルール設定を変化させることで、①選手一人のボールタッチ回数が増える ②怪我をしにくい ③室内でも行える などの利点が生じます。このように競技ルールの変化によって、様々な競技レベル・性別・場所などでスポーツの実践が可能になることを体験し、これらのスポーツ活動を自らの心身の健康づくりに役立てられる能力の育成を目指します。また、サッカーはチームスポーツであるため、コミュニケーションスキルの習得も目的としています。	
	健康スポーツ実習 (ソフトボール)	生涯にわたる運動の継続は健康の維持増進に不可欠である。その中で、ソフトボールという種目が生涯継続する運動を考える際の選択肢の1つとなることを目標とする。そのために、基本的な個人及び集団の技能・戦術を修得し、ソフトボール特有の楽しさを体感することを目的とする。また、ルールやマナーを理解し、実際のゲームを通じてチームスポーツに必要な協調性やコミュニケーション能力等を身につける。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康スポーツ実習 (ソフトバレーボール)	ソフトバレーボールを用いて、人間関係の健康のために最適な運動行動とは何かを探り、環境や身体特性の変化に適応するための方略を学びます。ソフトバレーボールは、6人制のバレーボールとは異なり、軟らかいボールを使用し、ネットの高さも低く、4人制で男女ミックス、大人と子供のミックスなど独特の競技方法がとられている特長があり、生涯にわたって行うことができるスポーツです。この授業では、ソフトバレーボールの基本的技術やゲーム戦術、ルールを学び、ソフトバレーボールの競技の楽しさを実感することを目的としています。 また、技術練習や戦術練習をグループで工夫して行うことや、ゲームを通じて他者とコミュニケーションを図ることなどの重要性の学習も目的としています。	
	健康スポーツ実習 (テニス)	テニスを用いて、からだところを最適にコントロールすることを学びます。 近年、テニスは、季節や年齢を問わない、少人数で可能、コートも普及し安価であるなどの理由から、レクリエーションスポーツの代表となっており、生涯を通じて楽しむことができる競技です。しかし、学校体育の教材として取り入れられることが少ないため、未経験の人が多いためです。そこで本授業を通して、スキルの習得、ルールの理解、ゲーム実践を行い、今後自ら積極的にテニスに参加するための動機づけとなることを目標としています。 授業の中でスキルテストを複数回行い、熟達過程を確認します。また、毎授業終了時には、確認シートに本日の取り組みを記入し、スキルの獲得状況を明確化します。さらに、団体戦での勝利に向けて、グループ内の相互理解を通して、問題解決能力や団体意識を養うことを目標にしています。	
	運動スポーツ実習 (アクアティックスポーツ)	スキンドайビングやスクーバダイビングで自由に活動するためには、器材の取り扱いに慣れるだけでなく、水中という特殊な環境が身体に及ぼす影響やダイバーが自然に与える影響についての理解が必須です。そこでは安全に対する高い意識と自然に対する謙虚な姿勢が強く求められます。 この授業では、フィン・マスク・スノーケル・ウェットスーツをはじめとしたダイビング器材を用いて、スキンドайビングとスクーバダイビングの基本的な技術を身につけるとともに、野外(海)で安全に楽しむために必要な知識・技術・態度を最適にコントロールすることを学ぶことで、生涯にわたってスキン&スクーパーダイビングを楽しむ態度やマナーを養成します。	
	運動スポーツ実習 (バドミントン)	バドミントンを通して、身体を最適にコントロールすることを学びます。 サーブやスマッシュ、ドロップ、ドライブといったバドミントンの個人技術を身につけ、ゲームとしてバドミントンをより楽しめるようになることを目的とします。また、どのようにすればゲームに勝てるかの戦略を考え、シングルスやダブルスゲームを行っていきます。 バドミントンでは、「目では見えているけど身体が動かない」、「当てたつもりなのに空振りをした」、「練習しているうちにいつの間にか頭で考える前に身体が動くようになった」などを体験することがあります。本授業では、こういったスポーツで経験する身体技術と記憶の関連性や運動の健康への貢献についても学んでいきます。	
	運動スポーツ実習 (バスケットボール)	バスケットボールを用いて、自分の身体やボールを巧みにコントロールし、プレイヤーとプレイヤーの関係からなるシステムを最適にコントロールすることを学びます。 チームプレイは、個々のプレイヤーの動作の相互作用によって成立しています。このときのプレイヤーの関係には、①ボール保持者と非ボール保持者、②非ボール保持者と非ボール保持者という2つがあります。このことはチームプレイには最低3人が必要であることを示しています。バスケットボールのチームプレイは、カットインプレイとスクリーンプレイの少なくとも一方を含んで構成されています。プレイヤーは、カットインをするか、スクリーンをするか、スペースをつくるなどこれら以外のプレイを行うかによって相互作用を行うのです。授業では、チームとして、カットインやスクリーンを用いてディフェンスラインを破った状態でシュートをすることの学習を行います。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	運動スポーツ実習 (フットサル)	<p>健康の維持・増進にとって運動・スポーツの実施が必要なことを我々は十分に理解していても、必ずしも積極的に実施しているとは言えない状況にあります。そこで、生涯にわたって運動・スポーツ活動に親しむ素養を培うために、実施する種目の基本技能の習得を前提として、それを応用・発展させることに重点を置きながら、お互いに協力して楽しく運動・スポーツが行えるよう学習していきます。</p> <p>とくに、フットサルは、サッカーのゴール前の攻防を凝縮させたスポーツであり、現代サッカーにとっても不可欠の素養となっています。サッカーの中・上級者にとっては、技術の精度や技術のスピードの向上のみならず、状況判断の回数を増やし、状況判断のスピードや状況判断の修正力、さらには、アジリティやゴールキーパーの足元の技術等を養うのに最適です。また、サッカーの未経験者や女子学生にとっても、ボールに触れられる回数が多く、運動負荷も自分でコントロールできます。そして、男女がいっしょに協力してプレーできるスポーツでもあります。多様なスキルレベルの学生が交流する機会を創出し、お互いを配慮し合える人間形成も目的のひとつです。</p>	
	運動スポーツ実習 (ゴルフ)	<p>生涯スポーツとして取り組むことのできる種目「ゴルフ」をとりあげます。ゴルフの基本的技術向上を目的とし打撃練習やミニラウンド練習を中心に実施していきます。グループでの練習やラウンド練習を通してコミュニケーションが必要な場面にてどのように考え行動するかなど人間関係構築のためのスキルを向上させること、また最適な運動行動とは何かを探り、環境や身体特性の変化に適応する方法を考え、実行することを目標とします。</p>	
	運動スポーツ実習 (ニュースポーツ)	<p>大きな運動量または大きな筋肉の活動を伴わない「ニュースポーツ」を用いて、自分の身体やボールなどのアイテムを巧みにコントロールすることを学びます。運動スポーツ実習は、「運動行動の最適化」のなかでも、筋肉活動そのものの制御、すなわちスキルの習得を目標としています。従来ある競技スポーツにおける大筋活動のスキルも運動制御であるが、小筋によるスキルもまた運動制御であり、運動スポーツ実習の学習目標となります。</p> <p>ニュースポーツには、全国レベルの競技会が開かれ普及しつつあるものもありますが、技術体系が確立されているというわけではありません。そこで、すでにある技術体系に基づいてスキルを学習していく以上に、受講者それぞれの特性に適合した運動制御を探索していきます。</p>	
	運動スポーツ実習 (卓球)	<p>卓球を用いて、自分の身体、ラケット、ボールを最適にコントロールすることを学びます。</p> <p>卓球は誰にでも気軽にできるスポーツであり、生涯スポーツとして楽しんでいる人も多くいます。また、競技スポーツとしての卓球はボールスピードが速く、それに対応するための俊敏な動きや持久力も必要となっています。卓球の楽しみ方には色々あり、やさしいラリーが続くことを楽しむこともできるし、俊敏な動きとダイナミックなスマッシュで運動不足を解消することもできます。この授業では卓球を教材として取り上げ、基本的な技術とルールを学び、各自の技能に応じた戦術を考え、試合で効果的に用いることができることを目指します。また、練習や試合方法を工夫し、それを積極的に実行することで卓球の楽しさを体験します。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	運動スポーツ実習 (サッカー)	<p>サッカーを用いて、足でボールを自在に操る能力、足でボールを運ぶ&抜く能力、そのための身のこなしを学びます。そして、グループで攻撃と守備を組み立て、その駆け引きの中からいかに得点を奪うのか、そのために味方にどのように声掛けをし、チームでどのようにコミュニケーションをとっていくのかを最適にコントロールすることを学びます。</p> <p>サッカーは足でボールを扱うためミスが多いスポーツです。ボールを扱うスキルを身に付けることでよりサッカーの質を上げることが出来ます。また、サッカーのルールは難しくはありませんが、プレーの判断はとて難しく、判断一つによっては得点にもなるし失点にもなります。サッカーがどのようなシステムで成り立っているのかを理解することでより戦術的な幅が広がります。また、ピッチ内だけではなくピッチ外でも仲間とコミュニケーションをとっていくことはスポーツにおいては重要なスキルです。そうすることで、スポーツをより楽しむことが出来、成功に近づくことが出来ます。</p> <p>このような特性を持つスポーツ種目を教材として、状況に応じた技術を発揮するための個人技術の習得、攻撃・守備における個人戦術、グループ戦術の理解、コミュニケーションスキルの習得を目的として授業を行います。</p>	
	運動スポーツ実習 (ソフトボール)	<p>ソフトボールの実験を通して、自分の身体やボールを巧みにコントロールし、プレイヤーとプレイヤーからなるゲームを最適にコントロールすることを学びます。ソフトボールを楽しむための基本的な技術を習得して、生涯にわたりスポーツを楽しむ態度を養成し、チームゲームを通して協調性などの社会的スキルを身につけます。</p>	
	運動スポーツ実習 (スポーツフィッシング)	<p>この科目では海の環境を理解し、身体を適切にコントロールする能力を身につけることで、スポーツとして釣りを行えるようになることを目的としています。釣りを行うためには、仕掛けを作成する手指の技術や道具を正確にコントロールする身体能力が求められます。</p> <p>近年、スポーツフィッシングとして多様な競技大会が盛んに行われるようになってきました。また、心身の健康維持を目的とした生涯スポーツとしても釣りは注目されています。手軽に始められる印象があるかもしれませんが、道具をコントロールする技術と自然環境に対する知識の両方が必要な奥が深いスポーツです。</p> <p>本授業はロッドや仕掛けの正確な扱いを学ぶことで、身体最適なコントロール能力を養う運動スポーツ実習です。授業では、基本的な仕掛けの作成や釣り具を把握するとともに、海の環境理解と安全性（事故なくスポーツを行う）も学んでいきます。</p>	
	運動スポーツ実習 (テニス)	<p>テニスは、16世紀 フランス貴族の遊戯としてはじまり、19世紀 イギリスでローンテニスが考案されてから現代まで発展してきました。ここでは、身体の使い方とボールの打球法を通してボールに親しみ、その上でストローク、ボレー、サーブ、スマッシュといった基本技術のレベルを高め、グループのメンバーで協力しながらダブルスとシングルのゲームが楽しくできることを目標とします。</p> <p>また、雨天時にはテニスコートが使用できないため、体育館などで卓球、体力トレーニングなどを行ないます。</p>	
	野外運動実習 I (キャンプ)	<p>この授業は、山の中で生活することによって、ブラックボックスと化した日常を手作業で行います。これは決して歴史への逆行や単純に「不便さ」を求めものではありません。それは、「便利さ」をもたらす科学技術へのより深い理解を目指した学習なのです。</p> <p>また、私たちはふだん雑菌の中で生活していることをほとんど気に留めていませんが、山の中では、ちょっと気を許すと、食料は傷み寝床は虫だらけ、ということになってしまいます。ゴミを片付けたり、清潔に整理整頓しておくことは、けっして環境のためだけではありません。環境問題はきっと私たち人間にはね返ってくるということを切実に思い起こさせてくれる科目です。</p> <p>ウッドクラフトとは、「森の中で暮らしていくのに必要なさまざまな技能」のことを言います。この授業では、設営と撤営、野外料理などのキャンプに関わる基本的知識・技能の習得に加え、ウッドクラフトとしての「信号通信」を扱います。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	野外運動実習Ⅰ (スキー)	<p>この科目では、冬のスポーツであるスキーをとりあげ、雪の上という日常生活の運動場面と異なる環境における最適な身体の使い方について学習します。これは、各スポーツ実習の授業では習得できない身体のコントロール方法です。初めてスキー板を履く人、スキーを始めたばかりの人について、重心線が常に2本のスキー板の間にある安定したポジションで、スピードコントロールをしながら安全に、山の頂上から麓まで滑って降りられるようになることを目標とします。</p> <p>一方、野外運動実習Ⅱ(スキー発展)においてパラレルポジションでのターンを習得した人については、プルークポジションで左右のエッジをすばやく切り替えることによる、より短いタイミングでのターンの習得を目標とします。いずれも、しっかりと「谷脚にのる」感覚を身につけてください。</p> <p>また、広島近辺のスキー場ではスノーボーダーの数が増え、事故も増えています。そこで、スキーを行うときの安全対策(スキー場でのマナー・コースの選定など)についての知識を実践的に獲得することも目的とします。</p>	
	野外運動実習Ⅱ (キャンプ発展)	<p>この授業は、山の中で生活することによって、ブラックボックスと化した日常を手作業で行います。これは決して歴史への逆行や単純に「不便さ」を求めものではありません。それは、「便利さ」をもたらす科学技術へのより深い理解を目指した学習なのです。</p> <p>私たちはふだん雑菌の中で生活していることをほとんど気に留めていませんが、山の中では、ちょっと気を許すと、食料は傷み寝床は虫だらけ、ということになってしまいます。ゴミを片付けたり、清潔に整理整頓しておくことは、けっして環境のためだけではありません。環境問題はきっと私たち人間にはね返ってくるということを切実に思い起こさせてくれる科目です。</p> <p>ウッドクラフトとは、「森の中で暮らしていくのに必要なさまざまな技能」のことを言います。この授業では、設営と撤営、野外料理などのキャンプに関わる基本的知識・技能の習得に加え、ウッドクラフトとしての「結索」を扱います。また、見えない相手との通信方法などの学習も予定しています。</p>	
	野外運動実習Ⅱ (スキー発展)	<p>この科目では、冬のスポーツであるスキーをとりあげ、雪の上という日常生活の運動場面と異なる環境における最適な身体の使い方について学習します。これは、各スポーツ実習の授業では習得できない身体のコントロールです。</p> <p>スキー発展では、クロスオーバーのあるターンができるようになることを基本とし、そのターンを基にした大回りのパラレルターン・小回りのパラレルターンの習得を目標とします。また、新雪や不整地など様々な状況に合わせた滑り方の学習も行います。さらに、板をずらさないカービングターンについても学習します。</p> <p>また、広島近辺のスキー場ではスノーボーダーの数が増え、事故も増えています。そこで、スキーを行うときの安全対策(スキー場でのマナー・コースの選定など)についての知識を実践的に獲得することも目的とします。</p>	
キャリアデザイン科目	大学生生活とキャリア	<p>広島修道大学の4年間のキャリア教育の目的及び到達目標について理解を深めます。また、自分らしい豊かな、または幸福なキャリア(人生)を形成するために、自己を理解すると共に、大学生生活の4年間の意義及び重要性を考察します。さらに、キャリアにおける有形資産と無形資産について、考察します。</p>	
	インターンシップ入門	<p>講義では様々な目的をもったインターンシップを選択するにあたって情報入手の方法などを考察します。また、インターンシップの実習先の企業から、実習生を受け入れる目的、役割、期待について解説します。さらに、インターンシップを体験した先輩からインターンシップの参加意義や目的を学びます。これらのことを通じてインターンシップの意義や目的、選択方法について学びます。</p>	
	キャリアビジョンとキャリア形成	<p>履修生は歴史上の人物や著名人のキャリア(人生)について、自伝等を熟読し研究対象の人物のキャリア(人生)を分析します。もしくは、キャリア(人生)をテーマに社会人インタビューを行い、インタビューの内容を分析します。経営者の仕事観及び人生観、さらに先達者の様々な体験や社会の学びなどを通して、今後の大学生生活の過ごし方やキャリア(人生)に問題意識をもち、人生100年時代のキャリアビジョンを考察します。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
データサイエンス科目	広島の実業承継を学ぶ	講義では、広島県の実業承継に関する課題について問題意識を持ち、後継者問題は日本経済を支える高い技術力の承継及び雇用創出など含め地域経済に多大な影響を及ぼすことを学び考察します。また、実業承継に関わっておられる企業人や実際に承継や創業をされた経営者の方をお招きし、広島の地で実績を挙げておられる優れた経営者と直接接する機会を設け、卒業直後のキャリア(人生)だけでなく10~20年先のキャリア(人生)を考察する契機をつくり、ワーク・キャリアの選択肢を広げる機会にします。	
	データサイエンス概論	情報技術の進展により、多様かつ大量のデータの取り扱いが可能になった現代社会において、これらを活用できるデータサイエンスの手法を修得することが必要とされている。本科目では、IoT(モノのインターネット)やAI(人工知能)等のしくみや情報技術、活用事例、データ活用の基礎等を学ぶことで、データサイエンスに関する知識と理解を深め、社会を取り巻く変化に対応できる基礎力を身に付けることを目指す。	
	情報処理入門	コンピュータ・ネットワークリテラシー、Wordの基礎、Excelの基礎の3つの要素を組み込むことを基本とし、他の授業で活用できる知識や技能の習得を目指します。情報処理技能検定試験の資格取得のための土台を固めることをねらいとします。	
	統計学	本講義の内容は、理論上の厳密性より応用面でのわかりやすさを求めて展開されたものである。統計データの処理から、統計解析、統計推計、仮説検定までという認識論のプロセスによって、統計学の基本概念、データの作成と整理の統計的扱い方、不確実の現象を把握するための確率分布のパターン、標本と母集団の関係、分析現象の姿を帰納的に推定しようという方法論の解説が本講義の構成となっている。統計学の基本的な内容と枠組みを理解したうえで、これを社会現象と自然現象の認識の基本道具として、意志決定を行う場合に役立てることが、本講義のねらいである。	
	情報化社会と人間	<p>情報化社会にとって、また情報化社会で生きる人間にとって、コンピュータ・ネットサービス・アプリなどは欠かせない存在となっています。「コンピュータで何ができて何ができないのか」「コンピュータはどうすれば動くのか」などコンピュータの可能性と限界を考えてみようというのがこの授業のコンセプトです。</p> <p>授業では、コンピュータを利用していくにつれ、「人間にとってコンピュータとは何か」「人間にとってコンピュータはどうあるべきか」「人間はコンピュータにどう立ち向かい付き合っていけばよいのか」というようなことを考えて、各自それらの解答を模索してもらいたい。基本的には毎回コンピュータを利用して演習を行うなど、インタラクティブに授業を進める予定です。</p> <p>(前半) : Officeソフトの従来とは少し異なる使い方を学ぶ。マルチメディア演習を行います。</p> <p>(後半) : 情報化社会におけるソフトウェアの役割を考える。簡単なプログラミング演習を行います。</p>	
情報と知能	近年、情報技術の進化に伴い、特に人工知能(AI: Artificial Intelligence)の分野に注目が集まっている。実際にAIが様々な作業を代行し、人間とコミュニケーションを取る様子は、まるで私達と同等かそれ以上の知能を有しているように感じられることもある。しかし現段階において、そのしくみは人間のものとは大きく異なるのが実態である。本科目では、人間とAIがどのように知的情報処理を行うのか、それぞれ科学的な視点に基づいて解説を行う。またそれらを通じて、現在のコンピュータが持つ課題と、社会に向けた可能性について明らかにする。		

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
主 専 攻 科 目	人 文 学 部 総 合 科 目	現代社会学	社会学とは、「現代」を捉えようとする学問です。「現代」とは、過去と未来の間に生起する時間概念で、歴史を振り返り、未来の方向性へと目を向ける視点から、「今」を考察することによって、はじめて認識が可能となります。現代社会学は、現代社会に生起する社会現象を捉えようとする新しい社会学理論・方法の総称です。本講義では、主として「ファッション」「感情労働」「過労自殺」「メンタルヘルス対策」「消費主義」「非物質的労働」などを事例として、現代社会学の基礎的な理論と方法とを習得します。
		差別問題論	「差別は自分と関係がない」と思う人が多いだろう。しかし、差別は私たちの日常の関係性や言葉、常識等の中に見ることができます。差別について考える際、意識や心がけといった個人の内面に焦点を当てがちですが、社会の構造としてとらえる必要があります。本講義では、差別を社会科学的な視点から明らかにすることによって、「私」を含むすべての人にとって取り組むべき課題であることを理解します。
		ヒロシマ文化論Ⅰ	本講義は、現代広島から忘れ去られた地元の生活文化について、「日々の暮らし」や「祈り」という切り口からアプローチしていきます。 平成31年・令和元年は、浅野氏が広島城に入り400年という節目の年にあたり、色々な場所で歴史に関する催しが企画・実行されました。そうした試みはたいへん素晴らしいのですが「人々が何を大切に生活してきたのか」という切り口から、広島を歴史を解き明かしてくれるアプローチは決して多いとはいえませんでした。 そうした意味で、現代の広島という空間は「原子爆弾で破壊された広島」「原子爆弾の悲劇を語り継ぐ」ことには力を注いでいるものの、「原子爆弾で亡くなった人々が大切にしていたもの」を見つめ受け継いでいく作業については、あまり力が注がれていないといえるのではないのでしょうか。 そこで本講義は、原爆投下前における広島市中心部の町々で展開されていた生活を紹介した薄田太郎の著作(エッセイ)を読むことで「日々の暮らし」や「祈り」を追体験していくことに力を注ぎます。そしてさらに原爆投下前の広島の地図を教材として用いることで、広島町の歴史を実感する経験を積んでいきます。かつての広島町を描いた文章と地図を通して、現代広島が置き去りにしてしまった広島生活文化を学び、次の世代に伝えていくことに主眼を置いています。
		ヒロシマ文化論Ⅱ	本講義は石門心学を通して広島文化に触れることを目的とします。 石門心学とは、京都の町人石田梅岩が説き全国に広まった教えのことです。これは日常の行いを正すことを目的に展開された教えで、当時勢力を持っていた神道・儒教・仏教という宗教を、人の心を磨くツールとしてとらえた点が特徴でした。そしてその名を歴史に刻んだのは、その教えを平易なたとえ話で広めた点です。結果、その教えは町人のみならず農民・武士・公家にもまで拡大し全国的に広まりました。 こうした石門心学の一大拠点だったのが、この広島だったわけですが、その実績は今や忘れ去られてしまいました。現在の平和記念公園で行われた講演をきっかけに、多くの人が石門心学に親しんだ歴史を広島文化として語り継ぐ人はほとんど存在していません。 そこで本講義は石門心学に関する基本的な知識を身に着けたうえで、この広島町で展開された教えと活動を確認し、広島文化を論じる知識を修得してもらいます。江戸時代の庶民に愛された道話(石門心学の講話)や当時の史料も紹介していきますが、詳しい歴史知識や古文や漢文の知識がなくても受講できるよう工夫を加えています。現代でいえば共生といった概念にも通じ、日本人の宗教性・道徳観に大きな影響を与えたといわれる石門心学に触れていきます。
		ジェンダー論	本講義では、「家族」と「家族」を取り囲む社会や制度のあり方を考察し、これらを通してジェンダーの概念を学び、家族や社会をとらえなおす視点を養うことをめざします。

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	女の人間学	現代の社会で「女」とされるもの、「女」として表現されるものには、どのようなものがあるのでしょうか。本講義では、「女」をキーワードに社会を読み解く手がかりとし、「女」や「男」、多様な性について考察します。「女」に共感や違和感をもつ人や、今まで「女」にかかわりのなかった学生の受講へも対応しています。	
	比較社会論	私たちの社会が世界とどうつながっているのかについて知り、グローバル化がすすむ世界における諸問題について、その背景にある社会の違いを考慮しつつ、解決方法にアプローチします。	
	共生社会論	私たちの社会が世界とどうつながっているのかについて知り、グローバル化がすすむ世界における諸問題について、多文化共生社会実現のための解決方法にアプローチします。	
	ボランティア論	ボランティアとは社会（私たちの日々の営み）の中の問題や課題に気づき、その解決のために対価等の見返りを期待することなく、自らの意思で行動を起こす人のことを指します。人類の歴史は多くのボランティアが課題解決の重要な担い手として築かれてきたと言っても過言ではありません。ボランティア活動やNPO（非営利活動組織）といった市民活動は社会の中でどのような位置を占め、それはどのような役割をもち、どんな価値を生み出すのか、社会の担い手は市民一人ひとりであるという気づきをもたらし、豊かな生き方にも通じるボランティアについて解説します。 わが国ではボランティア活動や住民自治の重要性といった意識は向上していますが、学校におけるボランティア教育や労働条件等の仕組みの欠如によって、日常的に活動に関わる環境づくりができていません。そのため日常的に市民の社会貢献活動に気軽に参加するという意識が低く、ボランティアという言葉の認知度の高さと参加率に開きがあるという現状があります。そのことを認識した上で、ボランティア活動の取組みを現場で活躍する実践例をゲストや映像や資料から学んでいき、わが国の社会像の特質を理解し、一人ひとりが責任を持ち、社会に貢献する意義を見出せる「つなぎ手としての自分の未来像」が描けるような講義を想定しています。同時に、受講中にボランティア活動に参加する機会を持つよう指導します。	
	社会文化体験演習	社会文化体験演習では、国際理解分野および地域理解分野の企業・団体等に学生を派遣します。国際理解分野では、広島という地域社会における国際交流の在り方を学ぶため、非営利組織・企業等での活動を体験しつつ、学びを深めます。地域理解分野では、広島という地域をよりよく理解するために、伝統的な活動の一端を学ぶとともに実地体験します。	
	海外体験演習	海外体験演習では、国外に拠点を置き活動を展開する非営利組織・団体等に学生を派遣します。事前に本学で一定程度の学習をした上で、国外の組織等に赴き、現地の環境の中で、様々な活動に参加することで、体験的に学びを深めます。同時に、生きた語学の習得も目指します。帰国後は、現地での活動を振り返り、成果をまとめ、発表を行います。	
	Media English I	DVD教材を用いてメディア英語を学びながら、リスニング能力の向上を目指します。特に、メディア英語を理解するのに必要な語彙、表現の強化を図ります。テキストに添ってリスニング、リーディング問題を解きますが、リスニング問題にはディクテーションを加え、内容がわかるように配慮していきます。文法、語彙力を高める為の小テストも行います。	
	Media English II	前期開講の「Media English I」に続く後期開講科目です。前期に引き続きテレビのニュース情報のリスニング能力向上を目指します。また、メディア英語の理解に必要な表現、語彙の強化を図ります。 授業は、教科書に添って進みますが、リスニング問題には、内容がわかるように配慮した課題を用意しています。2回の授業で1課進む予定です。また、単元毎に語彙力を高める為の小テストを行い、表現、語彙を定着させたいと考えています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Business English I	TOEIC対策となりうるリスニング、リーディング教材を用い、ビジネス英語の語彙や表現を学ぶこと、ビジネス英語の運用能力を高めることを目標とします。とりわけ語彙力の強化を図ります。 テキストに添ってリスニング、リーディング問題を解きますが、リスニング問題には、必要に応じてディクテーションを加え、内容がわかるように配慮していきたいと考えています。また、リーディング問題は、どこが問題なのか、どこを読めばポイントがわかるのかなどがはっきり理解できるように解説します。単元ごとに単語、文法テストもします。	
	Business English II	前期開講の「Business English I」に続く後期開講科目です。TOEIC対策のリスニング、リーディング教材を用い、ビジネス英語の語彙や表現を学ぶこと、ビジネス英語の運用能力を高めることを目標とします。とりわけ語彙力の強化を図ります。 基本的には、テキストに添って進みますが、Moodleを利用したディクテーション課題も用意し、学習者本人が自分の弱点に気づき、リスニング能力の向上につながるようにしていきたいと考えています。また、リーディング問題には、文法テスト、単語テストを行います。	
	環境文学論	環境問題は重要な課題であり、近年は環境問題／課題へ学際的なアプローチである「エコクリティシズム」の研究が進んでいます。この授業では、幅広いアプローチによる自然理解について、身近な自然表象を出発点に、文学あるいは文芸批評という観点から、「環境文学」や「ネイチャー・ライティング」などの領域に至る、その方法論を理解します。この科目は、学生が、環境的課題への人文学的なアプローチを学べる科目として想定するものです。	
	物語と歴史	近年のBlack Lives Matter運動に象徴されるとおり、黒人に対する差別は大きな社会問題として、アメリカ国内のみならず世界中で関心を集めています。黒人差別の根源にあるのは奴隷制という歴史だが、直接的に奴隷制を体験したアメリカ黒人はもう存在しません。それにも関わらず、アメリカ黒人文学では、いまだに奴隷制が描かれ続けています。体験したことがない出来事を語り継ぐ媒介として、物語が大きな役割を担っているのです。アメリカ黒人作家が創造する物語は、広島に生きる我々が直面している問題を考えていくための一助となるのではないのでしょうか。原爆を体験した人々が少なくなっていく中で、広島を歴史をいかに語り継いでいくのかを考えていく必要があります。本科目はアメリカ黒人文学を学びつつ、そこで得た知見を基に広島が抱える問題についても考えていきます。	
	教育文化論	「教える」／「学ぶ」という行為のあいだには相互的な関係が想定されます。そのような関係は、一般に「教育」と呼ばれています。教育における教えることと学ぶことという両者の関係は、相補的な共犯関係ともなりうるし、ときには一方的で権力的な関係にも転じてしまいます。しかし、それも含めて、教育はきわめて人間的な営為であると言えるでしょう。 教育を、教えることと学ぶことという絶え間なく関係を迫り合う2つの独立した行為としてまずは切り出し、そこからあらためて両者の関係を問うことで、教育的営為のダイナミズムの内て人間がいかんして形成され、また、いかんして変容するのか、ということについて考察することを目指します。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	芸術文化論	<p>芸術は、古来人間が洗練・発展させてきた精神文化のひとつである。様々な芸術の分野があるが、絵画芸術と音楽芸術は二つの主要な領域であろう。この授業では、人間が音楽や絵画などをどのように作り上げてきたか、そしてそれらの芸術が社会にとってどのような意味をもち、人々の関係においてどのような役割を果たしてきたかを考察する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(66 小長野隆太／7回) 音楽芸術では、音楽の歴史的な変遷、音楽の種類、作品の独創性の観点から音楽文化を多角的にとらえながら、主に音楽鑑賞と履修者間の対話を通して考察を深める。</p> <p>(41 沼本秀昭／7回) 絵画芸術では、絵画の歴史的な変遷とその表現が生み出された背景について理解し、実際の制作を通して考察を深める。</p> <p>(66 小長野隆太・41 沼本秀昭／1回) (共同) 芸術文化を学ぶ意味・意義について、全15回の構成を踏まえて、絵画芸術・音楽芸術双方の観点から考察する。</p>	オムニバス方式 ・ 共同 (一部)
	社会の中の言語	<p>この演習では様々な社会的文脈における言語の振舞いについて考察します。具体的には、言語はどのように機能し、それが社会の見方にどのような影響を与えるのか、言語使用者の年齢、民族、階級、性別によってどのように異なるかについて、主に英語を例に用いて検討します。また、標準語・非標準語の形成やアイデンティティが言語によってどのように構築されるかなどもについても探求し、メディア、日常会話等における言語の創造的可能性を探求します。</p>	
	日本文化史 I	<p>日本の様々な伝統的生活文化の中から、「化粧」に焦点を当て、その歴史的背景を踏まえて解説します。古い時代の「化粧」の中には、社会的な義務として行われなければならないものもありました。例えば、「御歯黒」は、平安時代に貴族の男女共通の嗜みとして定着していましたが、江戸時代に入ると、「既婚女性の印」という社会儀礼的意味を新たに持つようになり、町人など庶民階級も含めた既婚女性の間に広がっていきました。「御歯黒」の他、「置き眉」「眉落とし」「白粉」「口紅」等も採り上げて解説します。</p>	
	日本文化史 II	<p>日本の様々な伝統的生活文化の中から、「結髪」に焦点を当て、その歴史的背景を踏まえて解説します。ここにいう「結髪」とは、髪をアップにする(頭上に載せ固定する)事です。平安時代、男性は成人の印として「結髪」したが、女性は成人後も髪を垂らしてしていました。しかし江戸時代に入ると、男女とも幼時から「結髪」するようになり、未婚女性用・既婚女性用の髪形が分化しました。また、遊女の間では独特の華美な髪形が発達しました。結髪に関連する事項として、洗髪や、髪の手入れについても解説します。</p>	
	日本文化論 (浮世絵)	<p>日本の様々な伝統的文物の中から、「浮世絵」に焦点を当てて解説します。「浮世絵」は、基本的には木版画として製作され、版元・絵師・彫り師・摺り師によって共同製作されました。最初「墨摺り絵」形式から出発し、「見当」の発明により、精密な多色摺りの「錦絵」形式まで到達しました。このような「浮世絵」の版彩の発達過程を踏まえた上で、色数をわざと絞った「紅嫌い」「藍絵」も採り上げます。また、絵の具を用いずに紙面の凹凸で表現する「空摺り」「極め出し」の技法についても解説します。</p>	
	日本文化論 (和紙)	<p>日本の様々な伝統的文物の中から、「和紙」に焦点を当てて解説します。ここにいう「和紙」とは、古代中国で発明された製紙方法に基づき、日本国内の植物を材料として作られた紙です。「和紙」の中には、「楮」「雁皮」などの基本材料に米粉・粘土などの添加物を混ぜ漉きしたものや、漉き上げた後に染色・装飾したものなどがあります。また、「和紙」は衣服や生活用品を作る素材としても用いられました。そうした和紙加工の技法についても解説します。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本文学演習Ⅰ (崩し字解説・平仮名)	平仮名は、平安時代の女性貴族が和歌や恋文を記すために漢字を崩して作り出した文字です。明治維新後、日本語の平仮名表記のしかたについて、一音につき種類の平仮名を用いるという原則が定められましたが、それまでは大変多くの種類の平仮名が用いられていました。本演習では、様々な平仮名について、字母(元になった漢字)がどのように崩されて出来たのか、成立過程を解説します。それを踏まえた上で、和歌集の写本の影印資料を解説します。	
	日本文学演習Ⅱ (崩し字解説・古典文学)	「日本文学演習Ⅰ(崩し字解説・平仮名)」で養った、基本的な崩し字の平仮名の解説能力を、ブラッシュアップするための科目です。解説練習の教材として、和歌だけでなく、随筆・物語など様々な古典文学作品の写本の影印資料を用います。現代の平仮名と違い、崩し字の平仮名の中には、習慣的に他の字より小さく書かれるものや、前の字の右下にぶら下げる形で書かれるものがあります。この演習では、影印資料を多読する作業を通して、様々な平仮名の書写上の習慣性や特性を把握します。	
	日本史演習Ⅰ (崩し字解説・漢字)	この演習では、短文の「古文書」を教材として用いて、崩し字の漢字の解説練習を行います。 現在の大学教育では、平仮名の崩し字解説と、漢字の崩し字解説とが分断されがちであり、一般に、平仮名の崩し字は日本文学科で、漢字の崩し字は日本史学科で扱われます。しかし実際の文献には平仮名・漢字の崩し字が混在するので、両方解説できる事が望ましいです。本学には日本文学科も日本史学科も存在せず、従ってそれらの学科の垣根を越える心理的ハードルも存在しません。その利点を生かして、平仮名と漢字の崩し字解説科目を併設します。	
	日本史演習Ⅱ (崩し字解説・古文書)	「日本史演習Ⅰ(崩し字解説・漢字)」で養った、基本的な崩し字の漢字の解説能力を、ブラッシュアップするための科目です。解説練習の教材として、「Ⅰ」で用いた「古文書」よりも内容の複雑な「古文書」の影印資料を用います。「古文書」は、所々送り仮名が添記される場合もありますが、基本的に全て漢字で記されます。本文の一部が、日本文の語順とは異なる、漢文(白文)の語順で書かれる事が多いので、漢文の返読・訓読の法則についても解説します。	
	日本古典文学論	江戸時代の文学を中心としながら、日本古典文学の特性について論じます。日本古典文学を豊かなものにしていくのは、古語の助動詞の持つ表現力であると考えられます。古語の助動詞は、多くは、一字や二字という非常に短い語形でありながら、複雑な意味を明確に表現する能力を持っています。この講義では、江戸時代の代表的な文学作品を、特に助動詞の意味に注目しながら、丁寧に講読します。その作業を通して、日本の古文が元々持っている論理性を再発見します。	
	西洋文化史	人類史における最大の犯罪ともいわれるナチス・ドイツによるホロコースト(*主にユダヤ人に対する組織的な大量虐殺)はなぜ起こったのか。ドイツ文化史におけるユダヤ人の問題に焦点を当てながら、西洋文化の歴史における暗い(歪み)について学んでいく。適宜、映像資料を用いて、視覚的な理解も促します。	
	西洋文化史演習	この講義では、19世紀半ばから第2次世界大戦後までのドイツに焦点を当てて、当時の人間像の移り変わりについて主にカフカの文学作品を手掛かりにしつつ学んでいきます。はじめに、ダーウィンの進化論の発表が当時の西洋の人間像にどのような影響を与えたのか、カフカの短編小説『あるアカデミーへの報告』から読み解きます。その後、カフカの『変身』を取り上げて、20世紀の人間が置かれた状況について解釈を行います。それらの文学解釈をもとにして、ドイツでホロコーストという出来事が起こった理由について、偏見や差別といった視点から分析します。ニーチェやアドルノとホルクハイマーといったドイツ語圏の思想家についても学びます。	

授 業 科 目 の 概 要				
(人文学部社会学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
社会学 専門科目	専門講義科目 理論・方法に関する科目	社会学基礎講座	この科目は、社会学専攻の学生が、社会学を学ぶための基礎として、さらには将来の社会人の基礎として、必要なスキルを身につけるためのものです。社会学は社会についての学問ですから、社会で当たり前とされる知識とスキル、すなわち社会人にとって必要なレベルの最低限の「聞く、話す、読む、書く」の四技能が身につけていないと、学び始めることが困難です。このレベルの四技能は「社会人基礎力」ともされるもので、大学入学以前までの四技能とはレベルが異なります。では、そのレベルの四技能とはどのようなものか、いかにして身につけるのか、この授業ではまずそれを学びます。さらに、具体的な実践を通じて、そのスキルを身につけるトレーニングを行います。	
		社会学研究入門Ⅰ	学科のポリシーに掲げる能力の基礎、社会学における基礎的な知識やスキルを教授する授業です。すなわち、社会学に関する文献に留まらず、あらゆる情報を収集し、十全に理解する力。収集・理解した情報に基づき、自身の考えを思考する力、実際にどのように評価・行動するかを判断する力。さらに、自身の考えを主張と論拠に基づき、明確に表現する力の涵養。これらに関わる方法の修得を目指します。本科目は、社会学に関する基礎的な知識やスキルを、社会学研究入門Ⅱについては卒業研究・卒業研究に結びつける一連の科目群の最初に位置づけられます。	
		社会学研究入門Ⅱ	これは社会学科初年次生向けの社会学における基礎的な知識やスキルを教授する授業ですが、後期に配置されるものとなっています。すでに社会学研究入門Ⅰでは、社会学に関する基礎的な知識やスキルを一定程度修得しているという前提で、社会学研究入門Ⅱでは、2年次から開始される専門演習科目に向けての準備を行います。社会学の専門分野の知見に即した形で、レジュメの作成方法、プレゼンテーションとディスカッションの方法、基礎的な分析方法などの修得を目指します。この授業は2年次から開始される専門演習科目へのブリッジ科目として位置づけられます。	
		社会学方法論	本講義では、現代社会で語られている社会問題を事例として取り上げ、なぜその問題が一個人の私的問題ではなく、社会全般が考えるべき問題＝社会問題となった・構成されたのかについて、社会学における分析方法の一つである「構築主義的アプローチ」を用いて考察し、実践し、構築主義的アプローチを習得することを目指します。	
		社会学概論	本講義では、社会を捉える多角的な視点に基づき、「今ここにある」現代社会を理解する社会的思考と社会学的想像力を養い、社会に対する理論的な思考方法について講じます。まず第一に、社会学という学問独自の「社会学的なものの方」を社会学の基礎的概念と関連付けて理解していきます。第二に、それらの知識を用いて、現代社会の諸相について理解するために、社会学的に思考する方法を講じます。第三に、現代社会を理解する社会学的思考と、現代社会を生きる個人々が抱える意識・価値観・トラブルなどを関連付けて理解するための社会学的想像力について考察します。	
		社会学理論	この授業では、社会学の領域において培われてきた理論のいくつかを取り上げ、そうした理論がどのような背景から生まれ、どのような社会現象を対象として説明しているか、それが社会にとってどのような意味や効果をもたらしたかを中心に考察していきます。主に取り上げる社会学理論としては、現象学的社会学理論、批判理論、フェミニズム/ジェンダー理論、ポスト構造主義・ポストモダン理論における社会学理論などです。	
		応用社会学	応用社会学は大きく三つの分野にわけられます。第一に、社会政策など実社会に応用されている知識を社会学的に分析する学問です。第二に、社会的な問題への対処や解決策を策定するために、社会学的知識や方法を用いて、それらを社会政策や社会制度へと応用していく学問です。第三に、社会生活を営む人々が日常生活で直面しているトラブルや問題、課題へ対処するために、社会学的知識を応用する学問です。 本講義では、主として労働災害における精神疾患(過労自殺含む)が増加し続けている現代社会を社会学的知識を応用して捉えることにより、労働と医療の関連性と社会制度について理解することを目指します。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会 の 諸 領 域 に 関 する 科 目	コミュニケーション論	社会で必須の能力としてコミュニケーション能力が注目されています。日常生活においてことさら意識することなく行っているコミュニケーションについて、さまざまな視点を通して今日の問題について検討します。特にコミュニケーションの多くの場面で介在するメディアに注目し、メディアを介したコミュニケーションのあり方について学びます。さらにITという言葉に代表される情報化はコミュニケーションのあり方にどのような影響を与えるのかについて考えます。	
	社会意識論	社会意識とは、ある社会集団の成員に共有されている意識（心性）であり、階級・階層・民族・世代・職業などの社会集団ごとに、それぞれの客観的な存在条件によって規定されます。この授業では社会心理と社会意識の違い、意識/無意識、階層意識/階級意識、イデオロギー、世論、集合意識などの社会意識を研究するために必要とされる理論的枠組みや概念について学びます。さらに現代社会における社会現象に応用し分析する力を身につけることを目標としています。	
	感情社会学	現代社会においては状況に応じた適切な感情の表出が求められます。人々の感情は喜怒哀楽にとどまらず、社会的文脈（文化、環境、社会情勢、メンバーなど）によって様々な感情へと変化し、意思疎通がうまくいかずトラブルに発展することさえあります。また、感情の表出とされる表情や動作のなかには、単に刺激に対する無意識の反応とされるものもあり、人々は人の行為に意味を見出し、解釈しようを試みます。 本講義では、感情が心身を通して社会的に作られていくプロセスと感情の交錯によって構築される人間関係のあり方について社会学的視点から考察していきます。	
	比較社会学	この授業では、様々な社会や文化を比較することで、異なる文化を受け止め、自文化をより深く知るための基礎的な分析枠組みを学びます。比較という方法は新しい理解の仕方を生み出します。通常別々のものと判断しがちなものも比較することで共通項が見つかり、比較は私たちに新しい視点をもたらしてくれる道具となります。この授業では、とりわけ人種、民族、国籍など私たちの社会を分類する概念を学びながら、自明化されがちな文化的価値観や歴史認識のあり方について相対的に考えます。	
	社会学研究法	この授業では、社会学科で必須となっている卒業論文作成に向けて、社会的な知をどのように創造していくかに関する方法を修得します。また、卒業研究のテーマが卒業後の進路や生活に活用できることをめざして、「生活」「仕事」「働き方」などを自ら構想するときに、社会的な視角や方法論をいかに活用できるかを考えることがこの授業のもう一つの目的です。すなわち、社会学を学ぶことを通じて、自分自身が身につけた社会の見方を、これから生きていく将来の社会に活かし、さらに、未来を切り開いていくことに役立つような知識と方法を見つけ出ししていくことを深めていくということになります。	
	アニメ社会学	アニメはかつて漫画映画やテレビまんがと呼ばれ、子どもが観るものだと認識されていました。現在では、年齢を問わず幅広く鑑賞され、日本国内に留まらず、世界において人気を博し、「クールジャパン」の代表として位置づけられるようになりました。欧米から輸入された漫画映画がいかにして「アニメ」となったのか。また、アニメがどのようにその表現様式を獲得し、「クール」であると評価されるに至ったのか。アニメや映像表現の文化的あり方について学び、考えます。	隔年
	クールジャパン 現象研究	世界的なアニメブームを起点として、「クールジャパン」という言葉が一般にひろまりました。この「クール」という言葉はどのようにして生まれたのか、そしてアニメやまんがなどから、日本文化一般までどのように拡張されるに至ったのかについて学びます。その際、「クールジャパン」とは本質的な側面に捕らわれることなく、政治や国家施策等によって生成されたことなどを考慮し「クールジャパン現象」と捉え、日本を代表する文化を喧伝する「クールジャパン現象」についてその文化的なあり方について学び・考えます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	犯罪社会学	犯罪社会学は、様々な角度から犯罪を分析することによって、社会の有り様を理解していく学問です。この授業では逸脱、動機の語彙、模倣、階層/階級、イデオロギー、世論、社会的排除と不平等、監視社会、エスニシティ、ジェンダーなど、犯罪を社会的に分析するために必要とされる理論的枠組みや概念について学びます。さらに犯罪報道とメディアの役割、刑事事件のプロセス(捜査、起訴、裁判)、法解釈、刑事政策(刑罰の歴史、刑事施設の現状など)を事例として考察していきます。	
	エリア・スタディーズ	この授業では、エリアを対象に広く現代社会を考えます。近年、グローバル化が進む一方、それと並行する形で、様々な形で世界の「地域化」が進行しています(=「エリア」の浮上、と呼ばれる現象です)。両者がどのような関係にあるのか理解する試みを行ないます。焦点を当てるエリアは「東アジア共同体」で論じられる意味での「東アジア」です。この概念の中では、狭義の東アジアを越えて、広く東南アジアを含むエリアの可能性が議論されます。その現状、歴史的背景、今後を考えてみたいと思います。特に「東アジア」の中の日本、日本と他の「東アジア」地域・人々との関わりが焦点になります。また重点は、歴史を踏まえた上で、現代、そして今後の可能性になるでしょう。	
	ボーダー・スタディーズ	グローバル化の進展と共に、近年、様々な「ボーダー」を持つ意味に注目が集まっています。それを、より焦点化する形で「ボーダー・スタディーズ」という新しい研究分野が登場してきました。この場合、「ボーダー」とは国境のことだけにとどまらず、社会的、地理的、空間的、歴史的、さらには心理的等、多様な様態と、そこから派生する多様な問題を全て含む広い概念です。この授業ではボーダー・スタディーズの視点から、私たちの住む日本、広い意味での「東南アジア」と「東アジア」の関係、さらには、それぞれの内・外部との関係に目を向けてみたいと思います。また、「沖縄」の持つ意味については一定の時間を割く予定です。	
	国際社会学Ⅰ	グローバル化の時代と言われて、すでに久しくなります。グローバル化は、まさに国際社会学の中心的なテーマですが、他方、グローバル化とは何か、という点については専門家の間でも必ずしも合意があるわけではありません。そこで、この授業では、グローバル化の中で、近年急激に変貌を遂げている「高等教育」に焦点を当ててみます。それを詳しく検討することで、逆にグローバル化の具体的な姿に迫ってみようと思います。カギは「英語」です。特に途上国・中進国における英語の広がりや高等教育の広がりに注目します。その動きが、日本などにも大きく影響しつつあるのです。扱うトピックは、教育を中心にしますが、国家から消費まで非常に多岐に渡ります。幅広いトピックに目配りする柔軟な姿勢で授業に臨んでください。	
	国際社会学Ⅱ	グローバル化は国際社会学の中心的なテーマですが、他方、グローバル化とは何か、という点については専門家の間でも必ずしも合意があるわけではありません。この授業では、グローバル化の中での人の移動と、それに付随する様々な現象に焦点を当て、詳しく検討することで、国際社会学の視点からグローバル化について考えてみたいと思います。人の動きは、モノ・情報(カネを含む)の動きと密接に関わります。また、グローバルな人・モノ・情報の動きは、国民国家を基盤としながら、国家を超える側面も見えます。複雑な問題ですが、ぜひ共に考えてください。	
	現代社会論	本講義では、現代社会に生起する問題群を理解するための基本的な社会理論を考察します。とりわけ、「公正/安全/環境保護」というイデオロギーによって方向付けられている現代社会が抱える問題群を「再帰的近代と社会不安」という視角から捉え直し、「グローバル化」によって生じている「生活世界の変容」を「社会構造の変動」と「価値変容」に照らして、現代社会において人間社会が直面している問題を認識するための社会理論を考察していきます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	産業社会学	産業社会学は、近代資本主義社会において工場生産で合理的・効率的な成果をあげるための「経営・企業組織の在り方」「労務管理(労働者の監督)」などを研究する社会学の一分野として登場しました。産業社会学の前身は、強い軍隊組織の形成を目的とした軍事社会学・戦争社会学にありますが、国家間の争いが軍事戦争から経済競争へと転換していくことで、産業社会学という学問が現れました。産業社会学は、物質的生产を主とした工業社会から非物質的生产を主とした脱工業化社会へ、さらに今日においては、「グローバル化」による「産業構造の変容と市場経済の変容」によって、「ポスト産業社会」へと転換しています。本講義では、産業社会学の歴史的な転換期として、現代社会をポスト産業社会と位置づけ、消費主義化・情報化・記号化の進行と産業とを関連付けて考察していきます。	隔年
	労働社会学	本講義では、今日の日本における労働のあり方について社会学的に概観していきます。1980年代以降、雇用の流動化により非正規雇用が増大し、経済的に豊かな人々と貧しい人たちの格差が拡大してきました。現在の日本社会では、経済格差が固定化し、親が経済的に豊かな人たちの子どもはより豊かに、親が貧しい人たちの子どもはより貧しくなる、格差社会であると言われていいます。また、ジェンダーや世代などの属性によって、労働者それぞれがおかれた状況は大きく異なっています。そうしたなかで、コミュニティ・ユニオンといった個人加盟の労働組合などといった職場や地域を超えて、同じ属性をもつ人たちが集まる新しい労働運動がみられるようになっていっています。こうした日本社会における労働をめぐる状況について考察していきます。	
	カルチュラル・スタディーズ	カルチュラル・スタディーズは、日常生活を社会的な諸力による支配・抵抗・交渉の場ととらえ、そうした諸関係から結節される表象として「文化」のさまざまな形態を研究しようとする学問です。本講義では、文化が単に支配階級によって大衆へ強制的に強いられるものではなく、支配への対抗的契機を備えた交渉関係の産物であるという視点から、アイデンティティや主体性をめぐる問題を考えていきます。	
	文化社会学	文化社会学とは、社会的現実の意味構成や社会的現実の秩序を取り扱う社会学です。文化社会学では、音楽・絵画・映画・演劇など具体的文化現象にとどまらず、人間の社会生活や人間活動の全般を「文化」として位置づけ、人間の生活や活動全般における意味構成や秩序に関わる広く社会現象全般を研究対象とします。本講義では、1980年代後半以降から盛んに実施された文化社会学的研究を体系的に整理し、社会学的研究にとって有効な「社会の」文化理論を構築する方法を探っていきます。	
	消費社会学	消費社会学は、生産・労働を中心とした近代的社會観に対して、消費という観点から人類史・人間社会を捉え返す社会学理論です。本講義では、近代社会以降の社会を消費という側面から認識しようと試みます。とりわけ、大衆消費社会、高度消費社会を経て、「ディズニー化」や「ハイブリッド消費」に象徴される現代消費主義社会について、「流行(モード/ファッション/トレンド/ブーム)」現象に焦点をあて、「ハビトゥス/身体化/ディスタンクシオン」という社会学的概念を用いて理解し、消費主義社会が直面している社会的課題に関して考えていきます。	隔年
	感情労働論	現代の労働は工場労働から対人サービス業へと変容したことによって、労働者の労働場面に応じた喜怒哀楽の表出が労働力としてみなされるようになっていきました。それに伴い、企業ならびに労働者の多くは感情を伴うトラブルや問題を経験し、どのように感情を管理するかが重要な課題となり、解決策を模索している状況にあります。 本講義では、感情労働に伴う問題を社会学の課題と位置づけ、感情労働論という視点から労働の変容と感情労働の問題点を考察していきます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	親密性の社会学	この授業では、これまで「家族」社会学の領域で取り上げられてきた家族をはじめとする諸問題を「親密性」あるいは「親密圏」という視角のなかで取り上げます。現代社会においては、家族のありようは流動的に変化しており、大きな問題としては、少子化や高齢化が取り沙汰されていますが、その他にも家族という社会単位に影響を与える問題は多数存在しています。したがって、従来の「家族」という枠組みではとらえきれなかった、あるいは周縁化されてきた「親密な関係性」が出現してきており、そうした関係性が成立する社会的背景、社会的意味、その変容に焦点をあて、より大きな社会構造との関連性についても考察していきます。	隔年
	性現象論	この授業では、セクシュアリティの問題について学ぶにあたり、必要とされる基本的な概念やその枠組みを概説します。そこには、セックス/ジェンダー/セクシュアリティのとらえ方、異性愛と同性愛、トランスジェンダーや性同一性障害というカテゴリー、ホモフォビアやヘテロセクシズムという構造やイデオロギー、カミングアウトの実践やクローゼット、ホモソーシャルリティという概念などが含まれます。概念を説明する際の事例として、できる限り日本で生じたケースを取り上げ、これまで学問として考える機会があまりなかった性をめぐる諸問題について、社会学的に考えることを目標とします。	隔年
	クィア・スタディーズ	「クィア」という考え方は、主に1980年代終わりから90年代初頭のアメリカで登場し、その後、学問研究/運動・実践の双方の領域で展開されるようになりました。91年にテレサ・デ・ラウレティスが「クィア理論」という用語を提唱したことは、クィア・スタディーズという学問分野が形成される画期とも言えます。 授業では、レズビアン/ゲイ・スタディーズ、その後のクィア・スタディーズにおいて醸成された理論がいかに現実の諸問題のなかから生まれ、またその問題自体に介入しようとしてきたかについて体系的に説明します。ここでは、クィア前史、クィア理論とフェミニズムとの関連/分離、フーコーによる影響、エイズ問題におけるクィア理論の活用などを取り上げます。さらに、ネオリベラリズム体制の浸透によって生起する、おもにセクシュアリティをめぐる諸問題に焦点をあて、クィア理論によって現実が生起する諸問題を分析する方法を、消費社会、表象、家族の諸問題、グローバル化などの問題と関連させて考察します。	
	都市社会学	現在、国境を越える人の移動が加速しています。日本においても社会や都市の構成員が大きく変化しています。この授業では、日本の都市とそこに暮らす外国にルーツを持つ人々の関係について、都市社会学の視点から考えます。具体的には、広島と神戸という2つの都市を取り上げて、都市の性質をとらえながら、都市とエスニック・コミュニティの関係を理解します。これにより、社会学の視点から私たちが暮らす街をとらえ直すとともに、異なる文化背景を持つ人々との共生社会の実現にむけた課題について考えます。	
	地域社会学	本講義では具体性を重んじるため、広島デルタ地域（広島市中心部）という身近な地域に焦点を絞り民俗宗教の事例を1～12月まで順番に学んでいきます。近世から現代までの様々な事例に触れることで「宗教の存在」を感じ取れるようにすることを第一の目的とし、「宗教が地域社会に及ぼす影響」「時代による推移」「現代広島地域における特殊性」「宗教を分析する理論」などのトピックについて意見を持てるようにすることを第二の目的とします。 講義で扱う内容は神社・寺院といった既存の宗教施設を舞台とするものもありますが、いわゆるお正月や雛祭りといった私たちに馴染みのある行事、さらにはきつね・たぬきをはじめとする妖怪の話まで幅広く取り扱います。その中には江戸時代に、魔王山本と戦った武士の話や、川通り餅の秘密など、思わず人に話したくなるようなものや「えっ？それも宗教!？」といったものも含まれます。「宗教」や「広島」に関心のある学生の受講を歓迎しています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	サブカルチャーの社会学	この講義では、おたくを中心として、サブカルチャー研究が取り扱ってきた現象や分野を「サブ」とは何かの視点から考えていきます。サブカルチャーという言葉から想起されるもの一つとして、アニメや漫画、ゲーム等のおたくと呼ばれる分野がある。では、おたくに関連する分野がなぜ「サブカルチャー」と位置付けられ、その位置づけにはどのような〈意味〉があるのでしょうか。おたくは、サブカルチャーと関連づけられると同時に、「おたく」というイメージでも解釈されています。「おたく」はなぜ「おたく」なのか、マニアとは違うのか、腐女子はなぜ「腐」っているのか、など、「おたく」を「イメージ」として捉え直すことを通じて、サブカルチャーのもつ現代的な特性を考えていきます。	
	ポップカルチャーの社会学	この講義では、おたくを中心として、ポップカルチャー研究が取り扱ってきた現象を「ポップ」とは何かの視点から考えていきます。ポップカルチャーという言葉から想起されるものには、ポップアートやポップミュージックなどがあります。講義の中では、おたくファッションと関連する「ロリータ」や「ゴスロリ」、「フィギュア」や「アニソン」などを中心として取り上げて論じることによって、ポップカルチャーについて社会的に考察していきます。	
	宗教社会学論	この授業では、大学生の身近にある「宗教っぽい」もの（たとえば、地域の祭り・行事、疫病退散祈願、占い、パワースポット巡礼など）や、映画・アニメなどのサブカルチャーのなかの宗教を事例として、現代日本の「宗教っぽい」現象を説明するうえでの社会的な「ものの見方」を学びます。とくにこの授業で取り上げる問題は、「宗教っぽい」現象をキリスト教由来の「宗教」概念から捉えることが適切なのか（「宗教」の定義をめぐる学説）、近代化が進むなかで、「宗教っぽい」現象は衰退するのか、それとも活発になるのか（世俗化論と修正世俗化論）、「宗教っぽい」現象は、どのような社会的意味を有しているのか（たとえば、社会統合機能など）の3点です。	
	伝統文化論	この授業では、いわゆる「伝統文化」への理解を深めることで、このことに詳しくない他者にたいしてその意味や背景などを説明できるようになることと、「伝統文化にたいする〈現代人の視点〉」への理解を深めることで、現代の人びとが伝統文化にどのような価値を見出しているのかについて説明するうえでの社会的な「ものの見方」を身につけることを目指します。この授業では、「伝統文化」のなかでも、過去の日本列島における衣食住生活を中心的な題材として取り上げます。そして、それをとおして、近代化、文化遺産、ジェンダー、「ふるさと」イメージと観光などにかんする社会的な視角を紹介します。	
	マイグレーション・スタディーズ	この授業では、近年、日本でも頻繁に聞かれるようになった「移民」や「難民」をめぐる基礎的な理論と分析枠組みを概説し、移民と日本社会をめぐる諸問題について考えます。現在の日本社会では、少子高齢化や労働力不足、外国籍住民の増加など社会情勢の変化に伴い、主に移民をどのように受け入れるかという視点で議論されています。一方で、かつての日本社会は移民の送り出し側でもあり、少なくとも明治時代以降、多くの日本人が海外に移住していたことはあまり知られていません。この授業では、日本社会と移民をめぐる送出国と受容の歴史を振り返りながら、これまで日本社会は移民問題とどのように向き合ってきたのか（もしくは向き合ってきたのか）を考察します。	
	社会問題の社会学	社会問題の社会学とは、「これが問題である」とクレームや異議を申し立てる社会成員やグループ、メディアなどによる主観的な活動がせめぎ合って構築されていく「社会問題の構成過程」を明らかにしていく学問です。本講義では、「個人化社会における生きにくさ」を社会問題としてとらえていく社会的思考と方法について考えていきます。個人化社会とは、家族・雇用・地域コミュニティなどが脆弱化していく現代社会において、価値観の多様化や自由が志向されるなかで、個々人が社会で直面する問題やトラブルが自己決定による自己責任に帰され、社会問題が不可視化していく社会的傾向のことを言います。自己責任に帰され不可視化されていく「個人化社会における生きにくさ」を、社会問題として構成していくための課題と可能性について、履修者のみなさんと一緒に考えていきます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	表象文化論	表象文化論とは、表象としてあらわれる文化を考察の対象とします。いうなれば、表現されたものの文化という意味です。そのなかには、言語で表象される文学作品や視覚により表象される映画、テレビ番組、写真など、さらに聴覚文化としては音楽芸術があります。この授業では表象文化のなかでも音楽を対象として、その音楽と社会の関係を考察していきます。対象となるのは、主に西洋のクラシック音楽ですが、さらに現代における多様な音楽ジャンルなども取りあげます。また音楽をめぐる社会の諸問題等も取りあげ、現代日本における音楽文化の意味について探究していきます。	
	音楽社会学	西洋世界で中世から近代にかけて「音楽」と「社会」の関りがどのように変化し、相互に影響を与えてきたか、西洋音楽の変遷を歴史的背景・社会的背景と結びつけて考察する。またこれまででどのような主義・思想が生まれたのかを音楽鑑賞を通して見識を深める。学期半ばではプロフェッショナルの演奏家を招いて「演奏会」の実態を探る。最終回は履修学生とその友人達によるプレゼンテーション（演奏、ダンス等）で統括する。講義全体で「音楽を通して移り行く世相を考察し、作品鑑賞によって先代を生きた人々の感情に触れること」「異なる文化、主義・思想、社会を理解して多様性を受け入れることができる柔軟な感性を育むこと」を目指します。	
	現代社会学特殊講義	現代社会学は、社会運動（市民運動や市民活動）など社会の現場に触れながら社会的に思考していく学問領域です。研究者が研究＝認識対象と共振する自分自身を観測装置として活用するなかで新しい知見をもつことを「臨床知」と言いますが、現代社会学はまさに「臨床知」たることを目指す社会学の専門領域です。本講義では、生きた現実に触れつつ社会的に思考する方法や現実と関わることによって変化していく研究者自身の価値観や立ち位置を再帰的に考察していきます。ある特定の価値や研究目的を持って現実に関わることによって、自身の価値観だけでなく、研究目的さえも変化していくのは、現実・現場ではさまざまな価値がせめぎあっているからです。そうした価値のせめぎあいに対処してための社会学的方法と理論について、講義では考えていきます。	
	社会学特殊講義	社会学は、現実を手掛かりとして論理を構成し、構成した論理を現実当てはめて検証することを絶えず繰り返していく学問です。社会学という学問は、一般にほとんどの人々が当たり前のことと思いついて、あえて問返すことがない事柄を問い返し、当該社会における「自明性」を解体していきます。本講義では、一般常識として問い直される機会が少ない社会的事柄を取り上げ、社会的パースペクティブから全く別様なものとして理解する可能性を示していきます。	
社会 構想に 関する 科目	マスメディア論 I	ニュースや情報を、皆さんはどんな媒体から得ているのでしょうか？ 新聞やテレビ、ラジオ、出版といった「マス4媒体」が主流だったメディアの世界がインターネットの出現で大きく揺らいでいます。一方、米大統領選挙時に顕在化した「フェイクニュース」問題でネットニュースの信頼性も問われています。こうした「ポスト真実」の時代に正しい情報を得るには、情報の本質をとらえるリテラシーが欠かせません。そのために、新旧のメディアの特性について理解し、情報を読み解くノウハウを身につけましょう。 地元の中国新聞社で37年間余、編集記者を中心にインターネットメディア開発やCATV局、FMラジオ局、広告企画など幅広く担当しました。その経験を生かし大きく変化しているメディアについて多角的な視点から考察を深めたいと考えています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	マスメディア論Ⅱ	<p>インターネットが登場し約30年。新聞やテレビ、ラジオ、出版といった「マスメディア4媒体」のあり方やビジネスモデルを揺るがすだけでなく、政治や経済、暮らしなどあらゆる局面に影響を及ぼしています。</p> <p>メディア論Ⅰでは、メディアの源流を太古までさかのぼり、文字の発明、人間の知覚の拡張、産業革命と資本主義社会、戦争との関係など歴史を振り返りながら新聞、テレビ、ラジオを中心に「メディアとは何か」を考えました。</p> <p>メディア論Ⅱでは、インターネットが社会のインフラとなったデジタル時代を前提に、巨大プラットフォームやSNSの功罪、データ駆動社会、AIの進化などとのメディアの関係を探りながら「情報の本質」を捉えるリテラシーを養います。</p> <p>地元の中国新聞社で37年余、編集記者を中心にインターネットメディア開発やCATV局、FMラジオ局、広告企画など幅広く担当しました。その経験を生かし大きく変化しているメディアについて多角的な視点から考察を深めたいと考えています。</p>	
	ジャーナリズム論Ⅰ	<p>対面授業を実施します。新型コロナの感染状況次第では非対面で行います。</p> <p>地元の中国新聞社で40年近く記者や論説委員を続けている経験を生かし、新聞各紙の社説を通じて日々のニュースの意味を伝えます。ニュースの背景にある社会のありようについて考えるのが、この授業の目的です。</p> <p>とかく堅苦しくなりがちな新聞紙面のうち、最もとっつきにくいのが社説だと感じていることでしょう。とはいえ、手に取って読んでみてください。社説は「公平・公正な社会の実現に貢献する報道・言論活動」であるジャーナリズムを代表するコーナーです。森羅万象の出来事の意味をどう判断すればいいのかを考える上での物差し、ヒントになってくれます。さらに各紙の社説を読み比べることで、物事の捉え方、考え方が決して一通りではないことにも気づくはずです。</p> <p>授業はその都度、直近の各紙社説を取り上げ、ニュースの背景を掘り下げて解説を加えます。その上で皆さんに、毎回の出席カードで「自分ならこう考える」と主張してもらいます。そうした文章を書くことにより、自分の考えを他者に的確に伝えることにも慣れていただきます。</p> <p>普段から、さまざまな分野の時事ニュースに触れ、その意味を考える習慣を身に付けてください。</p>	
	ジャーナリズム論Ⅱ	<p>中国新聞で40年近く記者や論説委員を続けている実務経験を活かし、新聞各紙の1面コラムを通じてニュースの背景にある社会のありようを考えます。文章術についての解説も加えていきます。</p> <p>日々の新聞を「フルコースの料理」とすれば、新聞1面のコラムは「前菜」と例えた人がいます。その味付け次第で、次のページをめくってもらえるかが決まるというのです。確かに各紙とも、名だたる書き手(朝日新聞「天声人語」なら深代惇郎氏、読売新聞「編集手帳」なら竹内政明氏等)を起用してきました。中国新聞「天風録」を担当してきた経験で言えば、味わい深いコラムを仕上げるのは至難の業です。物事の見方、考え方が問われます。どんな言葉を選び、どういった構成で文章を運ぶか。最後は、読者に共感してもらえるかどうかで出来栄は決まるのです。</p> <p>そうした意味で、1面コラムを読み解けば、そのコラムが取り上げたニュースの意味や背景、さらにジャーナリズムの「立ち位置」がおのずと理解できるはず。名文に触れることで、自分の思いを相手に誤解なく伝えるための文章術を学ぶことにもつながります。</p> <p>毎回、出席カードに、授業で読んだコラムの感想を書いていただき、各紙のコラムに引けを取らない文章への挑戦を促します。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会安全政策論	<p>「社会安全政策」は、学問的には必ずしも定着しているものではないが、ここでは、我が国の「治安」を中心に、私たちが社会生活をしていく上で、様々な危険から逃れ、安全で安心できる生活を送るのはどうしたらよいか、ということを考えます。社会の安全を脅かす原因は多種多様ですが「世界一安全な国、日本」と言われてきた我が国において、その治安の良さを支えてきた要素がなぜ大きく崩れたのかの要因についてつぶさに分析し、その対応について検討を加えていこうとするものです。</p> <p>本講義の特徴は以下の通りです。 ○時事的なテーマを適宜取り上げる ○実社会に出てからも役立つ情報を提供する ○法律改正の論点等についても適宜紹介する</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(オリエンテーション／5 田中慶子、6 中根光敏、92 荒木博道、111 佐藤賢／1回) (広島県警察の概要／111 佐藤賢／1回) (安全安心なまちづくり～「減らそう犯罪」広島県総ぐるみ運動～／112 浜下剛／1回) (子供・女性を犯罪から守るための取組について／138 門田麻美／1回) (地域警察活動について地域課／121 土屋良平／1回) (少年非行防止総合対策～非行少年を生まない社会づくり～／103 河崎湯里／1回) (犯罪被害者等への支援警察安全相談課／94 伊藤可奈子／1回) (国際テロリズムと日本外事課／115 関本淳一／1回) (交通事故抑止総合対策交通企画課／95 今重雅幸／1回) (捜査をめぐる諸問題刑事総務課／91 相原正裕／1回) (サイバー犯罪の現状と対策／110 佐々木実／1回) (繁華街・歓楽街総合対策～犯罪に巻き込まれないために～／134 村上桂／1回) (暴力団情勢と暴力団排除活動の現状組織犯罪対策課／96 上田賢治／1回) (大規模災害時における警察の役割／133 三宅太樹／1回) (特殊詐欺抑止対策について&まとめ／5 田中慶子、6 中根光敏、99 岡村正孝／1回)</p>	オムニバス方式 ・ 共同
	社会構想と公共政策	<p>現代社会における複雑な諸相の中で、公共性はさまざまな形態や意味を帯びて現れています。国家の見地から主張される(国家的)「公共性」と、市民の普通の利益として要求される(市民的)「公共性」とが対立する場面、さらに前者、後者のそれぞれの中で異なった「公共性」が成り立つ場面などもあります。</p> <p>この講義では公共性の一般的な内容の提示と問題状況の認識に立って、環境問題と公共性、情報関係と公共性及び文化と公共性など公共性が論議される諸局面を取り上げ、実践の場に立って具体的に講義を行います。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (117 高崎義幸／4回)</p> <p>①公共政策とは何か、②市民生活と公共政策(政府の失敗、市場の失敗、新しい公共)、③新型コロナウイルスと公共政策(新型コロナウイルスに対する日本政府の対応について整理、議論する)、④新型コロナウイルスと公共政策(新型コロナウイルスに対する各省庁の対応について整理、議論する)等を学びます。</p> <p>(129 福田康浩／4回) ①公共と放送・映像メディアの役割・功罪、②公共と放送・ビジネスとしての放送・現状と課題、③公共と放送・映像ジャーナリズムの現状と課題、④放送メディアの公共性(災害報道を巡る放送メディアの機能)等を学びます。</p> <p>(139 八木秀章／4回) ①都市といわゆる公共交通―戦前戦後・モータリゼーションの進展、②路面電車と街づくり～軌道系公共交通機関を中心とした広島の交通計画の推移、③路面電車と街づくり～路面電車からLRTシステムへ：熊本県、富山県等の路面電車を活かしたまちづくりの事例、④路面電車と街づくり～路面電車からLRTシステムへ：フランス、ドイツ、アメリカ等の路面電車を活かした市街地の姿等を学びます。</p> <p>(101 小田政治／3回) ①農の価値：多面的機能、グリーンツーリズム、②食料・農業・農村基本法：世界の食糧事情、日本の食糧事情、③地産地消と食料基本法：地産地消条</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		例、JAと直売所等を学びます。	
社会調査 関連科目	社会調査概論	社会調査に関する基本的事項に関する科目である。これまで行われてきた多様な社会調査から具体的なイメージをつかむとともに、社会調査の目的や方法について、データの収集から分析に至る一連のプロセスも含めて学びます。また、調査倫理や社会調査が直面する現代的課題についても考えます。社会調査士カリキュラムのA科目に該当します。	
	社会調査方法論	社会調査の設計と実施方法に関する科目である。量的調査に関しては、調査の企画と仮説の構成、対象者や調査方法の選定、サンプリング方法、調査票や設問の作成、実査において考えるべきこと、調査データの整理などについて、質的調査に関しては、調査の企画と事前準備、アポイントやインタビューの方法、調査後の対応、文字起こしやフィールドノートの作成方法などについて、具体的に学びます。社会調査士カリキュラムのB科目に該当します。	
	社会調査論Ⅰ (資料・データ分析)	基本的な資料の収集やデータの分析に関する科目です。まず、先行研究の探索方法や公的統計の利用方法を学び、その上で、資料収集や社会調査によって得られたデータを要約・提示する方法について学びます。この科目では、度数分布、代表値、散布度、クロス集計といった、統計学において記述統計に相当する領域を対象とします。また、因果関係と相関関係の区別などについてもこの科目で扱います。社会調査士カリキュラムのC科目に該当します。	
	社会調査論Ⅱ (統計学)	サンプリング調査で得られた知見を母集団に一般化するために必要な推測統計に関する科目です。具体的には、確率論の基礎、確率分布、母集団と標本、点推定と区間推定、統計的検定の理論、平均や比率の差の検定、クロス集計とカイ二乗検定、回帰分析や分散分析の基礎などについて学びます。社会調査士カリキュラムのD科目に該当します。	
	量的社会調査法 (多変量解析)	社会調査データの分析で用いる基礎的な多変量解析法について、その基本的な考え方と主要な計量モデルを扱う科目です。統計ソフトの基本的な使用方法を習得した上で、三重クロス表、偏相関係数、重回帰分析、パス解析、多元配置の分散分析、主成分分析などについて、実際にデータ分析を行いながら学びます。社会調査士カリキュラムのE科目に該当します。	
	質的社会調査法	これまでの社会調査において、質的社会調査法の実施方法や分析方法に関しては、調査者の職人芸的な側面だけが強調されることも多く、科学的な方法として十分な展開がされてきたとは言い難い状況です。本講義では、「インタビュー調査」や「生活史調査」、「参与観察調査」を中心に、質的調査の実例にふれながら、質的なデータの収集・分析することの科学的な意義や方法について紹介していきます。なお、この講義は社会調査士資格認定カリキュラムF科目に対応しています。	
演習科目	専門演習科目 コミュニケーション論演習 (メディアと文化)	社会で必須の能力としてコミュニケーション能力が注目されています。日常生活においてことさら意識することなく行っているコミュニケーションについて、さまざまな視点を通して今日の問題について検討します。特にコミュニケーションの多くの場面で介在するメディアに注目し、メディアを介したコミュニケーションのあり方について学びます。さらにITという言葉に代表される情報化はコミュニケーションのあり方にどのような影響を与えるのかについて考えます。 現代社会のメディアのあり方と社会や文化の変容について考え、議論します。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が文献の担当箇所について研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	コミュニケーション論演習 (メディアと表現)	<p>社会で必須の能力としてコミュニケーション能力が注目されています。日常生活においてことさら意識することなく行っているコミュニケーションについて、さまざまな視点を通して今日の問題について検討します。特にコミュニケーションの多くの場面で介在するメディアに注目し、メディアを介したコミュニケーションのあり方について学びます。さらにITという言葉に代表される情報化はコミュニケーションのあり方にどのような影響を与えるのかについて考えます。</p> <p>現代社会のメディアのあり方と文化や表現の変容について考え、議論します。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が各自の興味・テーマに関わる「具体的なメディア(表象)」を提示した上で研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。</p>	隔年
	コミュニケーション論演習 (ネットメディアと文化)	<p>社会で必須の能力としてコミュニケーション能力が注目されています。日常生活においてことさら意識することなく行っているコミュニケーションについて、さまざまな視点を通して今日の問題について検討します。特にコミュニケーションの多くの場面で介在するメディアに注目し、メディアを介したコミュニケーションのあり方について学びます。さらにITという言葉に代表される情報化はコミュニケーションのあり方にどのような影響を与えるのかについて考えます。</p> <p>現代社会のネットメディアのあり方と社会や文化の変容について考え、議論します。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が文献の担当箇所について研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。</p>	隔年
	コミュニケーション論演習 (ネットメディアと表現)	<p>社会で必須の能力としてコミュニケーション能力が注目されています。日常生活においてことさら意識することなく行っているコミュニケーションについて、さまざまな視点を通して今日の問題について検討します。特にコミュニケーションの多くの場面で介在するメディアに注目し、メディアを介したコミュニケーションのあり方について学びます。さらにITという言葉に代表される情報化はコミュニケーションのあり方にどのような影響を与えるのかについて考えます。</p> <p>現代社会のネットメディアのあり方と文化や表現の変容について考え、議論します。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が各自の興味・テーマに関わる「具体的なネットメディア(表象)」を提示した上で研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。</p>	隔年
	アニメ社会学演習 (コンテンツと文化)	<p>アニメはかつて漫画映画やテレビまんがと呼ばれ、子どもが観るものだと認識されていました。現在では、年齢を問わず幅広く鑑賞され、日本国内に留まらず、世界において人気を博し、「クールジャパン」の代表として位置づけられるようになりました。欧米から輸入された漫画映画がいかにして「アニメ」となったのか。また、アニメがどのようにその表現様式を獲得し、「クール」であると評価されるに至ったのか。アニメや映像表現の文化的あり方について学び、考えます。</p> <p>アニメに代表されるコンテンツの現状と社会や文化のあり方について考え、議論します。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が文献の担当箇所について研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。</p>	隔年
	アニメ社会学演習 (ネットコンテンツと文化)	<p>アニメはかつて漫画映画やテレビまんがと呼ばれ、子どもが観るものだと認識されていました。現在では、年齢を問わず幅広く鑑賞され、日本国内に留まらず、世界において人気を博し、「クールジャパン」の代表として位置づけられるようになりました。欧米から輸入された漫画映画がいかにして「アニメ」となったのか。また、アニメがどのようにその表現様式を獲得し、「クール」であると評価されるに至ったのか。アニメや映像表現の文化的あり方について学び、考えます。</p> <p>アニメに代表されるコンテンツの現状と社会や文化のあり方について考え、議論します。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が各自の興味・テーマに関わる「具体的なコンテンツ(表象)」を提示した上で研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。</p>	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	クールジャパン現象研究演習 (コンテンツと表現)	世界的なアニメブームを起点として、「クールジャパン」という言葉が一般にひろまった。この「クール」という言葉はどのようにして生まれたのか、そしてアニメやまんがなどから、日本文化一般までどのように拡張されるにいたったのかについて学びます。その際、「クールジャパン」とは本質的な側面に捕らわれることなく、政治や国家施策等によって生成されたことなどを考慮し「クールジャパン現象」と捉え、日本を代表する文化を喧伝する「クールジャパン現象」についてその文化的なあり方について学び・考えます。「クール・ジャパン現象」の現状と文化やコンテンツのあり方について考えます。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が文献の担当箇所について研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。	隔年
	クールジャパン現象研究演習 (ネットコンテンツと表現)	世界的なアニメブームを起点として、「クールジャパン」という言葉が一般にひろまった。この「クール」という言葉はどのようにして生まれたのか、そしてアニメやまんがなどから、日本文化一般までどのように拡張されるにいたったのかについて学びます。その際、「クールジャパン」とは本質的な側面に捕らわれることなく、政治や国家施策等によって生成されたことなどを考慮し「クールジャパン現象」と捉え、日本を代表する文化を喧伝する「クールジャパン現象」についてその文化的なあり方について学び・考えます。「クール・ジャパン現象」の現状と文化やネットコンテンツのあり方について考えます。さらに、履修者それぞれの研究テーマに引きつけて活かすことを目指します。履修者が各自の興味・テーマに関わる「具体的なコンテンツ(表象)」を提示した上で研究報告を行い、各テーマについて履修者全員で議論する形式で進行します。	隔年
	社会意識論演習 (表象文化とジェンダー)	社会意識とは、ある社会集団の成員に共有されている意識(心性)であり、階級・階層・民族・世代・職業などの社会集団ごとに、それぞれの客観的な存在条件によって規定されます。ジェンダー(Gender)とは、社会的文化的性差と訳されますが、近年では男女の生物学的性差を特徴づける視点自体に文化や社会規範が影響していることが指摘されています。この演習では、ジェンダー研究の視点から文化、特にメディアを中心とした表象文化について考察していきます。	隔年
	社会意識論演習 (文化とアイデンティティ)	社会意識とは、ある社会集団の成員に共有されている意識(心性)であり、階級・階層・民族・世代・職業などの社会集団ごとに、それぞれの客観的な存在条件によって規定されます。アイデンティティ(Identity)とは、自我同一性、自分であること、帰属意識などと訳されます。アイデンティティの危機は、若者特有の問題として考えられてきましたが、近年では、雇用形態や家族形態の多様化などにより、現代人特有の社会的パーソナリティとなりつつあります。この演習では、文化に関する事例を取り上げ、現代社会における文化とアイデンティティの関係について考察していきます。	隔年
	社会意識論演習 (法制度とジェンダー)	社会意識とは、ある社会集団の成員に共有されている意識(心性)であり、階級・階層・民族・世代・職業などの社会集団ごとに、それぞれの客観的な存在条件によって規定されます。ジェンダー(Gender)とは、社会的文化的性差と訳されますが、近年では男女の生物学的性差を特徴づける視点自体に文化や社会規範が影響していることが指摘されています。この演習で事例とする結婚制度や性別役割分業なども性差をめぐる思い込みから自由ではありません。この演習では、法制度とジェンダーの関係について考察していきます。	隔年
	社会意識論演習 (仕事と生活の調和)	社会意識とは、ある社会集団の成員に共有されている意識(心性)であり、階級・階層・民族・世代・職業などの社会集団ごとに、それぞれの客観的な存在条件によって規定されます。現代社会は、雇用形態や家族形態の多様化などにより、より個人の責任が問われるようになってきました。この演習では、仕事と生活の調和について考察します。ここで言うところの「生活」とは家事・育児・介護など家族に関することだけでなく、消費行動や趣味も含まれます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	犯罪社会学演習 (社会的排除と不平等)	犯罪社会学は、様々な角度から犯罪を分析することによって、社会の有り様を理解していく学問です。この演習では、社会階層やエスニシティ、ジェンダーなど、社会的排除や不平等に関する理論的枠組みや概念について学び、差別や偏見といった社会意識がどのように犯罪報道や刑事事件のプロセス、刑事政策に影響してきたのかを事例を用いながら考察していきます。	隔年
	犯罪社会学演習 (管理される性と生)	犯罪社会学は、様々な角度から犯罪を分析することによって、社会の有り様を理解していく学問です。ジェンダー (Gender) とは、社会的文化的性差と訳されますが、近年では男女の生物学的性差を特徴づける視点自体に文化や社会規範が影響していることが指摘されています。この演習で事例とする犯罪も、性差をめぐる思い込みから自由ではありません。この演習では、法制度や、文化、社会規範によってどのように「性と生」が管理されてきたのかを考察します。	隔年
	犯罪社会学演習 (逸脱の医療化)	犯罪社会学は、様々な角度から犯罪を分析することによって、社会の有り様を理解していく学問です。近年では、犯罪からの離脱 (desistance) や再犯予防という観点から、これまでのように「犯罪者」を刑事施設に隔離し、社会的排除を促すのではなく、治療やカウンセリングの対象と見なす傾向が生まれつつあります。この演習では、逸脱 (行為) の医療化が社会に及ぼす影響について、事例を用いながら考察していきます。	隔年
	犯罪社会学演習 (防犯対策とコミュニティ)	犯罪社会学は、様々な角度から犯罪を分析することによって、社会の有り様を理解していく学問です。近年では、防犯意識の高まりから、監視カメラの普及や地域での防犯パトロールといった防犯対策がより求められるようになっていきます。この演習では、これらの防犯対策を事例としながら、コミュニティ (地域や家族など) のあり方と安全・安心に関する社会意識とがどのように関連しているのかを考察していきます。	隔年
	国際社会学演習 (グローバリゼーションと 社会変動)	グローバル化の中で世界はスピードアップしていると言われます。人々には「スピードアップ」することが求められています。他方で、果たしてそれだけで良いのだろうか、との疑問も湧きます。スピードアップには限りはありません。しかし人間は約20万年前の(新人の)出現以来、生物としてはほとんど変わっていない、とも言います。変わっていない人間が、どんどん生き方だけをスピードアップしてゆく。そこに無理はないのでしょうか? この点を問題視する研究、または、スピードとは別の生き方を提唱する議論は、実は様々な分野から提起されています。ここでは、それらの研究や議論を学んでみましょう。	隔年
	国際社会学演習 (西欧とアジア)	かつて「アジア」とはほとんど「オリエンツ」と類似の意味でした。西欧から見た東の方、程度の意味です。これは今でも「小アジア半島」の名称でトルコに残ります。その後、アジアは拡大を続け、今では西アジア (=中東) から南アジア、東南アジア、東アジアまで広大な地域を指示するようになっていきます。日本もこのアジアの一部ですが、なかなかその実感を持っていないようです。この授業では、西欧から見たアジア、アジアの中から見たアジア、日本が考えるアジア、等の視点からアジアとは何か、を考えてみたいと思います。	隔年
	国際社会学演習 (非西欧と脱西欧化)	かつて福沢諭吉は「脱亜入欧」を主張しました。遅れたアジアと手を切り、欧米先進国と仲良くして、日本もその一員となるべきだ、と。しかし、時代は変わりました。西欧の没落が言われたのはしばらく前になりますが、今ではアジアの時代とされるほどです。さらに21世紀後半はアフリカが急激に台頭する、とも言われています。私たちにあって西欧 (広くは欧米) とは何か、相対的に西欧が後退する世界の中で日本はどのような方向を目指すのか、さらには私たち一人一人がどう生きていけば良いのか。この授業でじっくり考えてみましょう。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際社会学演習 (国際システムと国民国家)	現代の世界は国民国家を単位とする巨大な国民国家体制の中にあります。現在のグローバル化も、この国民国家体制の確立と非常に密接な関係にあります。他方で、国連を始めとして世界には国家を超えた様々なシステムが存在します。世銀・IMFのような公的なものから、赤十字等の国際NGO(INGO)、「国境を超える医師団」、等々、数え上げればきりがありません。また、「市場」や「インターネット」等、実態が不明ながら、私たちの日常生活に深くかかわるものもあります。国家とこれらの国際システムとの関係はどうなっているのでしょうか。この授業では、具体的な事例を検討する中で、両者の関係について考えて行きたいと思えます。	隔年
	エリア・スタディーズ演習 (グローバル化と東アジア 共同体)	かつて小泉元首相が提唱した「東アジア共同体」、その後、鳩山元首相も(若干の違いはあれ)「東アジア共同体」の考え方を踏襲しました。ただ、その後の政治的变化の中で、この議論は消えたかのように思われています。しかし、その考え方(の主要部分)がRCEPとして名称を変え、着々と具体化しつつあることは、あまり知られていません。この授業で聞きたいのは、そもそもなぜ「東アジア共同体」の議論は登場したのか、それが形を変えつつも展開してきているのは、いかなる理由によるものか、その背景であり、その底流に流れる世界の大きな動きです。表面的な部分にとらわれることなく、様々な側面に目を配りながら、より根本的な部分に迫りたいと思えます。	隔年
	エリア・スタディーズ演習 (移住/貿易/観光)	グローバル化と共に人の動きが激しくなっています。国連の人口統計によれば、現在では毎年数千万の人が移民として国境を越え、世界を動き回っている、とされます。人の動きにつれ、それを上回る規模とペースで貿易も膨れ上がっています。今では「グローバル・サプライチェーン」を抜きに世界の経済は(私たちの生活も)語れないほどです。また、ビジネスだけでなく、観光でも人の動きは活発化しています。その一つの証はLCCと呼ばれる低価格の航空会社が世界中で登場していることです。これらの動きはコロナ禍で一時的に停滞していますが、その終息と共に、再び大きな動きとなることはほぼ確実です。この授業では、現在の世界を特徴づけるこれらの人の動きを、様々なテキストを使いながら、多面的に検討していきます。	隔年
	ボーダー・スタディーズ演習 (日本の中のボーダー)	社会学で考える「ボーダー・スタディーズ」は、国際政治等で考える場合と異なり、ボーダーを国境に限定することなく、社会の中にある様々なボーダーに目を向けます。そのような見方で社会を見てみると、私たちの暮らす日本の中にも、多様なボーダーがあることが目に見えてきます。大きなものとしては「本土」と「沖縄」の間のボーダーがありますが、それに限らず、私たちの身近な場にも、さらには日常生活の中にも、多様なボーダーが存在するのです。この授業では、できるだけ身近な具体例を取り上げることから、そのようなボーダーの存在と、その来歴、その意味、等について考えてみたいと思えます。	隔年
	ボーダー・スタディーズ演習 (アジアの内部/アジアの外 部)	日本で「アジア」と言うとき、そこには独特の響きがあります。位置的にも歴史的にも、日本がアジアの中にあり、その一部であることは間違いないのですが、にもかかわらず、心のどこかで「アジア」は日本の外に、日本とは別の場所にあるかのような感覚があることを否定できないでしょう。これは、一方で日本の歴史、日本における「アジア」認識の形成過程による部分があります。同時に、そもそも「アジア」が規定され、名指されてきた過程、つまりは、アジアの外における「アジア」の把握と理解にも関わります。この授業では、具体的な事例を基にしつつ、アジアの内外からアジアを考え、理解することを目指したいと思えます。	隔年
	現代社会論演習 (イデオロギーとしての公 正・安全・環境保護)	イデオロギーとは、確たる根拠がない集団的思い込みです。現代社会では、国家・企業だけでなく大学から個人に至るまで「公正」「安全(健康)」「環境保護」が当たり前の如く要請されています。けれども、「領土をめぐる国家間の戦争」「自然災害や感染症への対策」「自然環境の保護と豊かな/貧しい生活」に象徴されるように、これら公正・安全・環境保護というイデオロギーに明確な「正解」はなく、それぞれが主観的に信仰する多様な「正解」が聞き合うことで、現代社会における多くの課題が生起しています。本講義では、現代社会に特有な「イデオロギーとしての公正・安全・環境保護」が果たしている抑圧的な側面を批判的に考察することを通じて、現代社会が抱える問題について議論していきます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	現代社会論演習 (再帰的近代と社会不安)	A.ギデンスやU.ベックは、現代社会＝後期モダニティにおいて「個々人が社会構造から切り離され、自らの生活やアイデンティティに関して、常に自省的reflexiveであることを強いられている」と論じ、そうした社会形態を「再帰的近代化Reflexive Modernization」と呼びました。再帰性を特徴とする社会で、個々人は多くの情報を獲得することで、従来の意識・価値観・行為を反省的に変更する可能性を有する一方、予測できない将来・未来のリスクに対して「社会不安」が常態化した生活世界を生きたこととなります。本演習では、「再帰的近代と社会不安」という視角から、現代社会における生活世界の多様化がもたらす問題について、議論していきます。	隔年
	現代社会論演習 (社会構造の変動と価値変容)	「社会構造」と「価値」は、構造／主観的行為、マクロ／ミクロ、社会／個人など、社会学という学問における概念上の二分法です。人間個々人の外側にある「事物のように」存在するのが「社会構造」概念のイメージで、価値は人間個々人が抱く社会意識（心理）というイメージで、一般的に理解されています。本演習では、現代社会における「社会構造の変動」と「人間個々人の価値変容」とが相互反映性reflexivityとして展開していくという視角から、「家族」「親密性」「消費」「労働」などをめぐる社会制度と社会意識の現代的变化について議論していきます。	隔年
	現代社会論演習 (グローバル化と生活世界の変容)	現代社会で進行しつつあるグローバル化という社会変容は、かつてないほどの広範な規模（地理的空間）と急速度（時間）で人間社会を巻き込み、多くの人々の生活世界を変容させつつあります。その影響は「先進国から低開発国まで」「都市から地方まで」に及んでいます。一方で国境に象徴される地理的境界が消滅していくこと（ボーダーレス）を特徴とするグローバル化現象は、他方で従来とは異なる形で「新しい境界（ボーダー）」や「新しい格差」を生じさせています。本演習は、こうしたグローバル化による生活世界の変容を現代社会が直面している課題として提示することを目指して、議論していきます。	隔年
	カルチュラル・スタディーズ 演習 (日常生活における意味と行動)	カルチュラル・スタディーズは、日常生活を社会的な諸力による支配・抵抗・交渉の場ととらえ、そうした諸関係から結節される表象として「文化」のさまざまな形態を研究しようとする学問です。本演習では、食・音楽・スポーツなどを具体的な事例として、日常生活における意味と行動に関して、カルチュラル・スタディーズの視角から議論していきます。	隔年
	カルチュラル・スタディーズ 演習 (イデオロギーと人種)	カルチュラル・スタディーズは、日常生活を社会的な諸力による支配・抵抗・交渉の場ととらえ、そうした諸関係から結節される表象として「文化」のさまざまな形態を研究しようとする学問です。本演習では、人種問題を事例として、ブラック・ポリティクスをめぐるイデオロギーに関して、カルチュラル・スタディーズの視角から議論していきます。	隔年
	カルチュラル・スタディーズ 演習 (階級とジェンダー)	カルチュラル・スタディーズは、日常生活を社会的な諸力による支配・抵抗・交渉の場ととらえ、そうした諸関係から結節される表象として「文化」のさまざまな形態を研究しようとする学問です。本演習では、カルチュラル・スタディーズの視角から、階級問題としてのジェンダー差別を事例として、ブラック・フェミニズムによってカルチュラル・スタディーズ内部に向けられた批判について、議論していきます。	隔年
	カルチュラル・スタディーズ 演習 (サブカルチャーと権力)	カルチュラル・スタディーズは、日常生活を社会的な諸力による支配・抵抗・交渉の場ととらえ、そうした諸関係から結節される表象として「文化」のさまざまな形態を研究しようとする学問です。本演習では、大量生産によるマス・カルチャーの権力をめぐって、抵抗・対抗文化として現れたサブ・カルチャーが果たしてきた社会的意義と可能性について、議論していきます。	隔年
	文化社会学演習 (自由と差別)	文化社会学とは、社会的現実の意味構成や社会的現実の秩序を取り扱う社会学です。本演習においては、差別現象の具体的事例として「イジメ」問題を取り上げ、イジメ問題に特徴的な構造を差別の構造と関連付けて文化社会学的な視角から捉えることを通じて、「差別の不自由」と「差別からの自由」について、議論していきます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文化社会学演習 (人種差別に抵抗する音楽)	文化社会学とは、社会的現実の意味構成や社会的現実の秩序を取り扱う社会学です。本演習においては、人種差別を被ってきたマイノリティたちが抵抗の思いを音楽へと託してきた歴史を辿り、ヒップホップからラップにいたるまでの「人種差別に抵抗する音楽」が立ち上がることによって、人種差別意識に対して与えた社会的変化と影響について、議論していきます。	隔年
	文化社会学演習 (ブラック・ミュージックと抵抗文化)	文化社会学とは、社会的現実の意味構成や社会的現実の秩序を取り扱う社会学です。ゴスペル、スビル、R&B、ジャズ、ブルース、ヒップホップ、ラップなどと言うまでもなく、ポップスやロックなどを含めて、それらのルーツを辿っていけば、「ブラック・ミュージック」へと行き着くポピュラー音楽は多く存在します。本演習に於いては、ブラック・ミュージックを抵抗文化の視点から文化社会的に捉え、ブラック・ミュージックが果たした人種差別への抵抗の意義を議論していきます。	隔年
	文化社会学演習 (無意識の植民地主義)	文化社会学とは、社会的現実の意味構成や社会的現実の秩序を取り扱う社会学です。「本来自分のものであるものを求めようとする時、いつもそれを持つ権利をあなた方から奪いとりようとする者は犯罪者である」とマルコムXは言いましたが、植民者が自らの「植民地主義」やその犯罪性に無自覚であることはよくあることです。本演習では、「沖縄の在日米軍基地」問題を事例に、日本人による沖縄に対する米軍基地押しつけが「無意識の植民地主義」として「民主主義的に実践され続けている」問題について、文化社会的視角から議論していきます。	隔年
	応用社会学演習 (仕事におけるメンタルヘルス)	現代の日本社会では、心の病・精神疾患の罹患率(自殺含む)が増加するとともに、様々な精神疾患が誕生しています。なかでも、労働者の精神疾患発症率は高まっており、精神疾患による労働災害申請・認定数も増加傾向にあることから、厚生労働省の指導の下、各企業で労働者のメンタルヘルス対策が実施されています。 本演習では、労働者における心の病・精神疾患とメンタルヘルス対策の構成過程を社会的視角から分析し、現代社会における精神医療問題(過労死、自殺全般含む)について理解することを目指します。	隔年
	応用社会学演習 (心理学化/医療化する社会)	人々が現代社会で生きていく際、性別年齢問わず様々な人と関わり合います。そのなかで、人々は人間関係におけるトラブルに巻き込まれ、また自身の想像通りに物事が進まず苦悩するなどの場面に直面することがあります。現代社会においては、その精神的苦痛や社会的場面の解決策を心理学・精神医学という学問・医療分野に求め、人々が直面する問題を各々がカウンセリングや薬物療法で対処すべきとされる風潮にあります。 本演習では、人々が社会生活を営むなかで直面する問題が社会問題化されず、心理学化/医療化されていく過程ならびにその解決策を考察するとともに、社会問題の不可視化について議論していきます。	隔年
	応用社会学演習 (医療化と脱医療化)	人々は自身や家族、友人など周囲の人々の日常生活に異変を感じた場合、病院を受診し、異変の原因とその対処・治療を実践し、社会生活に順応しようと試みます。現代社会の医療化は、個人が抱える医療領域外の状態・問題を医療の領域に組み込み、治療によって解決しようとするものです。即ち、個人が社会に適応できない・異変を生じさせた社会的要因を不可視化させ、個人の背景にある問題を社会問題として捉え難くする傾向があります。 本演習では、医療化の対象となった状態・病(主に精神疾患領域)を事例に、人々の生活状況や社会状況との関連性を医療社会学の視点から捉えていきます。具体的には、医療対象外であった状態が医療対象として組み込まれていく過程とその現状と、医療化に対する批判的アプローチとなる脱医療化の視点から現代社会の問題性を捉えていくことを目標に議論していきます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	応用社会学演習 (病気と健康の構築)	<p>現代社会では様々な病気が発見され、早期発見・早期治療が唱えられています。病気は医師が医学的知見にもとづき、人々の何らかの症状に対して病名をつけることで誕生します。その病を治療し不調がなくなることで、何らかの病に罹患していない状態が健康として捉えられています。しかし、現代社会では多くの病気が作られ細分化することで従来の病名が変更されるとともに治療法も変化するために患者の負担が増えることや、これまで病気ではなく健康とされてきた人が新しい病カテゴリーが登場することで治療対象となり、病人とされていきます。現代医療の進歩により病気と健康は社会的に構築されると考えられます。</p> <p>本演習では、病気と健康がいかにか社会的に構築されるかについて、近年増加傾向にある心の病（①うつ病、②不安障害GAD、SAD、OCD、PDなど）や新しく登場した気質HSPなどを事例に考察し、その症例・状態が社会的に周知される際の社会背景及び問題性について議論していきます。</p>	隔年
	労働社会学演習 (雇用の流動化と格差社会)	<p>1980年代以降、雇用の流動化により非正規雇用が増大し、経済的に豊かな人々と貧しい人たちの格差が拡大してきました。そして現在の日本社会は、経済格差の固定化により、親が経済的に豊かな人たちの子どもはより豊かに、親が貧しい人たちの子どもはより貧しくなる、格差社会であると言われていいます。</p> <p>本講義では、こうした雇用の流動化や格差社会がどのようにして起こったのか、それにより、日本社会がどのように変化したのかについて考えてみたいと思います。</p>	隔年
	労働社会学演習 (仕事とジェンダー)	<p>世界経済フォーラムによれば、各国における男女格差を測るジェンダーギャップ指数で、2021年の日本は156か国中121位で、先進国中最下位であることが発表されました。特に「経済」「政治」分野における女性の参画の点で後れを取っていることが指摘されています。1986年に男女雇用機会均等法が施行されて以降、働く女性の数は増加してきたものの、相対的にみると、男性と比較して非正規雇用者の割合が圧倒的に高く、管理職に就く割合も圧倒的に少ない状況です。女性活躍推進法により、女性の管理職を増加させるための取り組みが行われてはいるものの、仕事におけるジェンダーギャップを十分に緩和するに至っているとは言えません。</p> <p>このように、今日の日本の労働市場においては、ジェンダーによって仕事をしていくなかで抱える課題が大きく異なっており、それが実際に働く人たちにとってどのような影響を及ぼしているのかについて、履修者の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。</p>	隔年
	労働社会学演習 (仕事をめぐるジェネレーションギャップ)	<p>1980年代以降、雇用の流動化により非正規雇用が増大してきました。相対的にみると、非正規雇用者たちは、正規雇用者たちよりも賃金が低だけでなく、雇用がより不安定であり、社会保障の面でも半ば排除されていることから、雇用の流動化は、格差の拡大につながったと言えます。こうした雇用の流動化の影響を受けているのは、バブル経済が崩壊して以降に成人した世代であり、そのなかでも特に影響を受けたと言われているのが、1990年代半ばから2000年代前半に学校を卒業して労働市場に参入していった就職氷河期の世代です。</p> <p>このように、仕事をめぐる状況は世代によって大きく異なっており、そうした違いにより、仕事に対する考え方も世代間によって違いがみられるものと考えられます。こうした仕事をめぐる世代間ギャップについて考察していきたいと思っています。</p>	隔年
	労働社会学演習 (新しい労働運動)	<p>1980年代以降、雇用の流動化により非正規雇用が増大し、経済的に豊かな人々と貧しい人たちの格差が拡大してきました。現在の日本社会では、経済格差が固定化し、親が経済的に豊かな人たちの子どもはより豊かに、親が貧しい人たちの子どもはより貧しくなる、格差社会であると言われていいます。また、ジェンダーや世代などの属性によって、労働者それぞれがおかれた状況は大きく異なっています。</p> <p>このように、労働者それぞれがその個人のおかれた属性などによって、抱える課題が大きく異なっているなかで、コミュニティ・ユニオンと呼ばれる個人加盟の労働組合が、職場や地域社会を超えて同じ属性をもつ人たちが集まる新しい労働運動がみられるようになってきました。本講義では、こうした今日の日本における新しい労働運動とはどのようなものなのかについて、社会学的に考察していきます。</p>	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	感情社会学演習 (ジェンダーとアイデンティティ)	かつて「女は愛嬌、男は度胸」と言われていたが、現代においては「女は愛嬌、男も愛嬌」と言われるようになり、社会動向によって求められる女らしさ・男らしさは変化する一方、普遍的な女らしさ・男らしさもあります。この変化する部分と普遍的なものの狭間にある女らしさ・男らしさから、家庭や労働場面などで生きづらさを抱える人々がいる反面、普遍的な女らしさ・男らしさを維持することによってアイデンティティを担保しようとする人々があり、その両者の確執によって自身の感情の表し方や生き方・働き方が分からなくなることがあります。 本演習では、女らしさ・男らしさに着目し、それぞれの感情表出・自己呈示ならびにそれに付随する精神的葛藤について考察することで、現代社会における人々の生きづらさについて浮かび上がらせることと、既存のジェンダーやアイデンティティについて問い直すことを目的として議論していきます。	隔年
	感情社会学演習 (模倣と変身)	現代社会では就職活動や労働の場面など様々な状況に応じて適切な自己表出が必要とされ、「模倣」を通じて「変身する／させられる」ことがあります。一要因として、他者から付与されるイメージ・評価から逃れることから困難であることが挙げられます。 本演習では、模倣と変身というテーマを通じて、社会的状況に伴って行く人々の模倣と変身の場面を分析し、当事者ならびに他者の相互行為によって生じる感情(望ましい／望ましくない、羨望／嫉妬など)と人間関係へ及ぼす影響について考察していきます。	隔年
	感情労働論演習 (外見・装飾の演出)	「人を見た目で判断してはいけない」、「人は見た目が全て」、「第一印象は大事」といった言葉に象徴されるように、人々は社会生活を営む際「見た目」から逃れることは困難です。例えば、同一人物であったとしても、校規から外れた服装をしている場合の印象と校則に従った服装をしている場合の印象は異なります。 本演習では、感情労働の視角から、主として労働場面における外見・装飾の演出方法について考察し、その演出によって人々にどのような感情を生起させるのか、どのような演出が適切／不適切であるか、場面に応じた有効的な演出とは何かについて議論していきます。	隔年
	感情労働論演習 (対人労働のスキル)	現代の労働の多くは対人サービス業となっており、労働の場面においては状況にふさわしい感情表出することがスキルとしてみなされ、労働者はそのスキルを身につけ発揮するように要請されています。対人労働のスキルは公的場面にとどまらず私的場面にも拡大し、人間関係に影響を及ぼします。 本演習では、対人労働のスキルについて、主として接客販売の場面を通じて考察するとともに、公的／私的場面の曖昧さと人間関係における感情について社会学的視角から分析していきます。	隔年
	親密性の社会学演習 (ホームの社会学)	「家族」を研究対象とする社会学の一領域としては、「家族社会学」がありますが、現在の家族をめぐる状況の変化・変容に対して、従来の「家族」という概念で分析することは難しくなっています。そうした問題に対するオルタナティブとして、「親密性」「親密圏」という概念が提案されるようになってきました。この用語・概念をめぐるのは、様々な定義が与えられてきましたが、この演習ではそうした諸定義と諸理論を整理しつつ、「親密性」「親密圏」の概念をとおして、公的領域以外における様々な関係性を扱います。そのなかには家族関係、友人関係、恋愛関係などが含まれます。 この演習では、近年、海外の地理学的研究領域を中心に展開され、他の学問領域にも広まってきている「ホーム(家庭)」を中心に取り上げ、このホームが親密性を取り扱う社会学の領域でどのような意味を持ち、さらにはいかなる理論的視角を構築することができるかを考察します。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	親密性の社会学演習 (家族と表象をめぐるジェンダー)	「家族」を研究対象とする社会学の一領域としては、「家族社会学」がありますが、現在の家族をめぐる状況の変化・変容に対して、従来の「家族」という概念で分析することは難しくなっています。そうした問題に対するオルタナティブとして、「親密性」「親密圏」という概念が提案されるようになってきました。この用語・概念をめぐるは、様々な定義が与えられてきましたが、この演習ではそうした諸定義と諸理論を整理しつつ、「親密性」「親密圏」の概念をとおして、公的領域以外における様々な関係性を扱います。そのなかには家族関係、友人関係、恋愛関係などが含まれます。 とくにこの演習においては、これまでの典型的な異性愛核家族には含まれない「家族」のあり方を、「親密性」という枠組みにセクシュアリティという概念を重ね合わせて考察していきます。	隔年
	親密性の社会学演習 (親密性とジェンダー)	「家族」を研究対象とする社会学の一領域としては、「家族社会学」がありますが、現在の家族をめぐる状況の変化・変容に対して、従来の「家族」という概念で分析することは難しくなっています。そうした問題に対するオルタナティブとして、「親密性」「親密圏」という概念が提案されるようになってきました。この用語・概念をめぐるは、様々な定義が与えられてきましたが、この演習ではそうした諸定義と諸理論を整理しつつ、「親密性」「親密圏」の概念をとおして、公的領域以外における様々な関係性を扱います。そのなかには家族関係、友人関係、恋愛関係などが含まれます。 とくにこの演習においては、「親密性」という枠組みにジェンダーという概念や枠組みを重ね合わせて、いかに親密圏が生み出されて行き、変容していくのかを考察していきます。	隔年
	親密性の社会学演習 (親密性とセクシュアリティ)	「家族」を研究対象とする社会学の一領域としては、「家族社会学」がありますが、現在の家族をめぐる状況の変化・変容に対して、従来の「家族」という概念で分析することは難しくなっています。そうした問題に対するオルタナティブとして、「親密性」「親密圏」という概念が提案されるようになってきました。この用語・概念をめぐるは、様々な定義が与えられてきましたが、この演習ではそうした諸定義と諸理論を整理しつつ、「親密性」「親密圏」の概念をとおして、公的領域以外における様々な関係性を扱います。そのなかには家族関係、友人関係、恋愛関係などが含まれます。 とくにこの演習においては、これまでの典型的な異性愛核家族には含まれない「家族」のあり方を、「親密性」という枠組みにセクシュアリティという概念を重ね合わせて考察していきます。	隔年
	性現象論演習 (ジェンダーと文化)	「セクシュアリティの社会学」は、社会学の領域のなかでジェンダー/セクシュアリティを考察する学問分野です。歴史的には、セクソロジー研究や「病理」としての同性愛研究にさかのぼることもできますが、一般的にはフェミニズムやジェンダー論の影響を受けつつ、レズビアン/ゲイ・スタディーズの研究蓄積や枠組みを取り入れながら、既存の社会学の方法論を批判的に問い直す指向性も有しています。 この演習では、セクシュアリティという研究対象や領域と強い関連性を持ちながら、異なる分野を形成するジェンダーという視角を中心に取り上げ、とりわけ文化的な事例を中心に考察していきます。	隔年
	性現象論演習 (セクシュアリティと文化)	「セクシュアリティの社会学」は、社会学の領域のなかでジェンダー/セクシュアリティを考察する学問分野です。歴史的には、セクソロジー研究や「病理」としての同性愛研究にさかのぼることもできますが、一般的にはフェミニズムやジェンダー論の影響を受けつつ、レズビアン/ゲイ・スタディーズの研究蓄積や枠組みを取り入れながら、既存の社会学の方法論を批判的に問い直す指向性も有しています。 この演習では、セクシュアリティという分析視角をとおして、社会のなかで生み出される文化的実践を取り上げながら、セクシュアリティがいかに可視化され、社会に流通し、また消費されていくかを考察します。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会科学)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	クィア・スタディーズ演習 (クィア理論という方法)	「クィア」という考え方は、主に1980年代終わりから90年代初頭のアメリカで登場し、その後、学問研究／運動・実践の双方の領域で展開されるようになりました。91年にテレサ・デ・ラウレティスが「クィア理論」という用語を提唱したことは、クィア・スタディーズという学問分野が形成される画期とも言えます。 この演習では、レズビアン／ゲイ・スタディーズ、その後のクィア・スタディーズにおいて醸成された理論がいかに現実の諸問題のなかから生まれ、またその問題自体に介入しようとしてきたかについて体系的に考察します。	隔年
	クィア・スタディーズ演習 (クィアをめぐる視覚文化)	「クィア」という考え方は、主に1980年代終わりから90年代初頭のアメリカで登場し、その後、学問研究／運動・実践の双方の領域で展開されるようになりました。91年にテレサ・デ・ラウレティスが「クィア理論」という用語を提唱したことは、クィア・スタディーズという学問分野が形成される画期とも言えます。 クィア理論は、セクシュアリティを研究対象として措定していますが、さらに社会における他の領域における諸問題との交差性を扱う理論的視角をもっています。この演習では、そうした視角をとおして、視覚文化においてセクシュアリティやクィアネスがいかに表象されてきたか、そしてその表象はどのような社会的文脈から可能となり、構築されてきたかを考察します。	隔年
	産業社会学演習 (産業構造の転換と市場経済の変容)	本演習においては、現代的な産業構造の転換を歴史的な産業構造の転換に照らして、現代的な特徴を探ると共に、現在起こっている産業領域におけるドラスティックな転換を市場経済の変容と関連付けて捉えようと試みます。近代における産業化とは、経済成長イデオロギーに呪縛された社会の拡張運動であったけれども、現代産業社会においては「人間の生命vs 経済成長」というイデオロギーへの呪縛によって、現実に生起している「生命の市場化による格差拡大」は、グローバルな次元で不可視化されるとともに、急速に進行しています。現代社会における産業構造の転換は、化学的(医学的)に予測可能な(希望／絶望の)イデオロギーに呪縛され、現実には非化学的に計画・決定される蓋然性の低い出来事(リスク)であると想定すれば、どのように市場経済の変容と関連付けて理解できるのか、という課題を本演習では考えていきます。	隔年
	産業社会学演習 (グローバル化とポスト産業社会)	地球規模の社会を形成していく様々なプロセスをグローバル化と定義するのであれば、産業社会は人間と自然との関係を科学技術・機械が媒介している社会と定義することができます。情報技術の急速な発達、先進国における主要な産業製品を工場生産による物質的財貨から情報・サービスなどへと転換しましたが、その段階をポスト産業社会と呼びます。本演習では、グローバル化と情報化が急速に進行していくポスト産業社会において、自然環境・資源・生命(医療・薬品を含む)・バイオテクノロジー・労働力(雇用)・消費(者)などをめぐって生起している新しい産業化(商品化)・市場化がもたらす社会的課題について、議論していきます。	隔年
	消費社会論演習 (モード／ファッション／トレンド／ブーム)	本演習では、流行現象を社会学的な視角から捉え、現代社会における流行現象を考察していきます。「モード／ファッション／トレンド／ブーム」という四つの言葉は、いずれも「流行」を意味する日本語として定着している一般的なカテゴリーであるにも関わらず、四つの言葉は微妙なニュアンスで使い分けられています。例えば、モードは方法・様式・形式を、ファッションは装い・見せかけを、トレンドは趨勢・傾向を、ブームは爆発・構造を、意味して、それぞれ使い分けられることがあります。 本演習では、これらの4つの一般的なカテゴリーを手掛かりとして、現実の流行現象を「集合行動」「相互行為」「共同的主観性」「ディスタンクシオン(卓越化)」「ハビトゥス」など社会学の分析概念より理解する方法について、議論していきます。また、「流行には関心が無い」「流行とは無関係」と言う「無知な人々」を含めて、市場経済が支配する消費主義化が浸透した現代社会において「流行と無関係で生活することは不可能」であり、流行現象を理解しようとする社会学的視角からは、新型コロナウイルスに感染しても「重篤化する／無症状」者がいるのと同様に、「知識／無知」「自覚／無自覚」などの人々が存在するだけで、誰も「流行の力から逃れられない」という現実の社会について考えていきます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	消費社会論演習 (ハビトゥス/身体化/ ディスタンス)	多くの人々が中流幻想を抱き人並みになることを志向した「大衆消費社会」から個性的な自己になることを志向した「高度消費社会」を経て、今日、消費社会は、ハビトゥス(個々人が日常経験で蓄積してきた知覚・思考・行為を生み出す無自覚な性向)の違いによって、それぞれの場=界においてディスタンス(卓越化・差別化)を志向する消費主義社会へと変容しつつあります。現代の消費主義が究極的にゆきつくのは、情報機器などによる「身体(感覚)の拡張」、エステ・整形・化粧などによる「身体改造」、サプリ・スポーツジム・ランニングなどを通じた「身体(体力)形成」、さらにスマートウォッチによる「身体(健康・生命)のデータ化」です。本演習では、消費主義社会における自己の身体に対する関心を、ハビトゥスとディスタンスというパースペクティブから捉え、消費と身体化の行方に関して議論していきます。	隔年
	宗教社会論演習 (日本の祭り・行事)	宗教社会学とは、「宗教」を主要な研究対象として取り上げる社会学の一領域です。近年の宗教社会学では、「宗教」概念がキリスト教をモデルとした概念であることが批判されており、「宗教」概念を再考するための題材として、明確な教義や信仰にもとづかない、「宗教っぽい」実践が題材として取り上げられつつあります。 こういった背景をふまえ、この演習では、地域組織によって維持されてきた日本の祭り・行事を主要な対象として取り上げます。誰もが知っている大規模祭礼から、広島県内の特徴的な小規模行事まで、それらの民俗学的な意味を説明することをとおして、祭り・行事による社会統合機能や、地域社会における世俗化のありよう、そして、「宗教」と現代社会の秩序とのせめぎ合いにかんする理論について、または、基礎的なフィールドワークの手法について学習します。	隔年
	宗教社会論演習 (パワースポットとツーリズム)	宗教社会学とは、「宗教」を主要な研究対象として取り上げる社会学の一領域です。近年の宗教社会学では、「宗教」概念がキリスト教をモデルとした概念であることが批判されており、「宗教」概念を再考するための題材として、明確な教義や信仰にもとづかない、「宗教っぽい」実践が題材として取り上げられつつあります。 こういった背景をふまえ、この演習では、現代日本において活発に行われている「宗教っぽいもの」(とくに、パワースポット)を訪れることを目的とした観光を主要な対象として取り上げます。パワースポットのありようや、それらへの観光を促す出版メディアの表象を分析することをとおして、現代日本における世俗化のありようにかんする理論について、または、基礎的なフィールドワークの手法や出版・放送メディアの分析手法について学習します。	隔年
	宗教社会論演習 (神話・伝説・物語の世界)	宗教社会学とは、「宗教」を主要な研究対象として取り上げる社会学の一領域です。宗教社会学が扱ってきた「宗教」的な世界観が現れているものとして、神話や伝説などといった物語があげられます。そして、このような物語にたいする研究を行ってきた学問の一つに、民俗学という学問があります。 この演習では、聖書などの聖典、小説・漫画・映画などのシナリオ、神話・伝説・民話・昔話集などに掲載された物語そのものを主要な分析対象として取り上げます。そして、これらを分析するうえでの民俗学的な「ものの見方」を学びながら、民俗学の手法や、文化人類学の蓄積、物語の構造分析、批評理論などについて学びます。	隔年
	宗教社会論演習 (キリスト教と文化)	宗教社会学とは、「宗教」を主要な研究対象として取り上げる社会学の一領域です。近年の宗教社会学では、「宗教」概念がキリスト教をモデルとした概念であることが批判されており、「宗教」概念を再考するための題材として、明確な教義や信仰にもとづかない、「宗教っぽい」実践が題材として取り上げられつつあります。 とはいえ、宗教社会学を牽引してきた西洋の学者による知見への理解を深めるためには、多くの大学生にとっては異文化にあたる、キリスト教にたいする基礎的な知識を身につける必要があるでしょう。本授業では、ヘブライ語聖書・ギリシャ語聖書(いわゆる旧約聖書・新約聖書のこと)の内容や、小説・映画のなかに描かれたキリスト教的世界観、アメリカ民俗学におけるキリスト教文化の分析を取り上げながら、異文化を理解するための文化人類学・民俗学の理論について、そして、出版・視聴覚メディアの分析手法について学習します。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	伝統文化論演習 (歴史・民俗とまちづくり)	「伝統文化」を分析するにあたって、多くの知見を生み出してきた学問の一つに、民俗学があります。民俗学が対象とする民俗とは、人びとが〈より良く生きる〉ために生み出してきた創造性のことです。 この演習では、特定の地域の歴史や、その地域で過去から伝承されてきた民俗が、現代社会において、どのようにまちづくりに活用されているのか、そして、より「良い」まちづくりへの活用には何が必要なのかということを学びます。これらの問いに履修者が自分なりの回答を出すために、経営学などにおけるまちづくりにたいする実践的な蓄積と、民俗学・社会学などのまちづくりにたいする批判的な蓄積との両方を取り上げます。	隔年
	伝統文化論演習 (民俗学の視点と方法)	「伝統文化」を分析するにあたって、多くの知見を生み出してきた学問の一つに、民俗学があります。民俗学が対象とする民俗とは、人びとが〈より良く生きる〉ために生み出してきた創造性のことです。 この演習では、民俗学という学問が有する、「伝統文化」を研究する学問という一般的なイメージと、現代の民俗学者が発信している「日常」の創造性を研究する学問という自己規定とのあいだに差異が生じている理由を説明できるようにするために、民俗学の視点と方法にかんする学説史を学びます。とくに、これをとおして、「伝統文化」というものをどのように理解する必要があるのかにかんする、民俗学や周辺領域における理論的蓄積を身につけます。	隔年
	伝統文化論演習 (都市の民俗学)	「伝統文化」を分析するにあたって、多くの知見を生み出してきた学問の一つに、民俗学があります。民俗学が対象とする民俗とは、人びとが〈より良く生きる〉ために生み出してきた創造性のことです。 この演習では、現代の民俗学の対象として活発に研究されている、都市地域における創造性(たとえば、都市の祭礼、マチの産業や文化、現代人の生活、都市伝説など)を主要な対象とします。このような都市部の民俗についてのフィールドワークをとおして、現代日本における都市文化と、それを創造してきた都市という場所にかんする理論について、そして、フィールドワークの基礎的な手法について学習します。	隔年
	伝統文化論演習 (地域文化とレジリエンス)	「伝統文化」を分析するにあたって、多くの知見を生み出してきた学問の一つに、民俗学があります。民俗学が対象とする民俗とは、人びとが〈より良く生きる〉ために生み出してきた創造性のことです。 この演習では、民俗学が主要な研究対象としてきた地域文化(たとえば、祭り・年中行事、衣食住生活、信仰、地場産業、街並みなど)を主要な対象として取り上げます。これらの地域文化にかんするフィールドワークをとおして、現代日本における地域文化と、それを伝承してきた地域社会が有する災害や人口減少・高齢化といった困難にたいする抵抗力(これを、「レジリエンス」といいます)のありようについて、そして、フィールドワークの基礎的な手法について学習します。	隔年
	マイグレーション・スタディーズ 演習 (移民をめぐる政治と経済)	この演習では、「難民」「移民」「移住」といった人の移動にまつわる基本的概念を確認した上で、人の移動をめぐる経済的、政治的、政策的、歴史的、文化的、地域的要因について、国内外の具体的な事例を参照しながら考えます。 移民について考えることは、異なった文化的・歴史的背景を持つ人々が共存する多文化社会はいかにして可能なかを考えることでもあります。移民に対する排外主義や外国人労働者の受け入れをめぐる議論など、世界各地で共存の危機が叫ばれています。このような困難な状況だからこそ、さまざまな背景を持つ人々が共存する社会のあり方を追求する社会理論、政策、社会実践について学ぶことが大切です。 授業では、なぜ人々は移動するのかという問いを考えるために、貧困、教育、亡命、戦争など人々の移動を促す経済的、政治的要因に注目し、移民問題をマクロ的視点から捉えることを目指します。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	マイグレーション・スタディーズ 演習 (移民政策と社会統合)	この演習では、「難民」「移民」「移住」といった人の移動にまつわる基本的概念を確認した上で、人の移動をめぐる経済的、政治的、政策的、歴史的、文化的、地域的背景について、国内外の具体的な事例を参照しながら考えます。 移民について考えることは、異なった文化的・歴史的背景を持つ人々が共存する多文化社会はいかにして可能なかを考えることでもあります。移民に対する排外主義や外国人労働者の受け入れをめぐる議論など、世界各地で共存の危機が叫ばれています。このような困難な状況だからこそ、さまざまな背景を持つ人々が共存する社会のあり方を追求する社会理論、政策、社会実践について学ぶことが大切です。 授業では、主に日本の移民政策の変遷を概観し、国際結婚や留学生制度、外国人労働者の雇用形態などを取り上げながら、受け入れ社会の多文化化をめぐる政策的枠組みがどのように形成されてきたかを考えます。	隔年
	マイグレーション・スタディーズ 演習 (広島と移民の歴史)	この演習では、「難民」「移民」「移住」といった人の移動にまつわる基本的概念を確認した上で、人の移動をめぐる経済的、政治的、政策的、歴史的、文化的、地域的背景について、国内外の具体的な事例を参照しながら考えます。 移民について考えることは、異なった文化的・歴史的背景を持つ人々が共存する多文化社会はいかにして可能なかを考えることでもあります。移民に対する排外主義や外国人労働者の受け入れをめぐる議論など、世界各地で共存の危機が叫ばれています。このような困難な状況だからこそ、さまざまな背景を持つ人々が共存する社会のあり方を追求する社会理論、政策、社会実践について学ぶことが大切です。 授業では、広島と移民をめぐる歴史について考えます。かつて広島県は日本有数の移民輩出県であり、ハワイや朝鮮、満洲など様々な地域に移住して行きました。なぜ広島から多くの人々が移住したのか、その社会的・地理的要因を探りながら、地域社会と移民のつながりについて考えます。	隔年
	マイグレーション・スタディーズ 演習 (国内移住とライフコース)	この演習では、「難民」「移民」「移住」といった人の移動にまつわる基本的概念を確認した上で、人の移動をめぐる経済的、政治的、政策的、歴史的、文化的、地域的背景について、国内外の具体的な事例を参照しながら考えます。 移民について考えることは、異なった文化的・歴史的背景を持つ人々が共存する多文化社会はいかにして可能なかを考えることでもあります。移民に対する排外主義や外国人労働者の受け入れをめぐる議論など、世界各地で共存の危機が叫ばれています。このような困難な状況だからこそ、さまざまな背景を持つ人々が共存する社会のあり方を追求する社会理論、政策、社会実践について学ぶことが大切です。 授業では、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響もあり、新たなライフスタイルを求める国内移住が広がっている現状に注目し、移住者と地域社会をめぐる文化的交流など、人の移動に関する21世紀の新現象や新傾向について考察します。	隔年
	社会問題の社会学演習 (個人化社会と自己責任論)	社会問題の社会学とは、「これが問題である」とクレームや異議を申し立てる社会成員やグループ、メディアなどによる主観的な活動がせめぎ合って構築されていく「社会問題の構成過程」を明らかにしていく学問です。 家族・雇用・地域コミュニティなどが脆弱化していく現代社会において、価値観の多様化や自由が志向されます。そうしたなかで、個々人が社会で直面する問題やトラブルは、自己決定による自己責任に帰されます。問題に直面した個人は、そうした問題が、社会が対処すべき問題ではなく、自己責任でどうにかしなければならない個人的な問題であると思いきまされていくことで、社会問題が不可視化されていっていきます。こうした社会的傾向のことを個人化社会と呼びます。 本講義では、今日の日本社会において、個人化社会と自己責任論とがどのように結びついているのかに注目して考察していきます。	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会問題の社会学演習 (社会的排除/包摂)	<p>社会問題の社会学とは、「これが問題である」とクレームや異議を申し立てる社会成員やグループ、メディアなどによる主観的な活動がせめぎ合って構築されていく「社会問題の構成過程」を明らかにしていく学問です。</p> <p>社会的排除とは、個人または集団が何らかの原因で社会（就業・福祉・教育・地域社会・人間関係など）から排除されている状態のことを指します。自分で自身の直面する問題を解決することができない人びとは、社会的排除の状態に陥っていると言えます。この対義語として登場したのが社会的包摂であり、社会的排除の状態に陥った人たちが再び社会とのつながりをみいだしていくことを指します。</p> <p>本講義では、今日の日本社会において、社会的排除や社会的包摂が実際にどのようなかたちで生じているのかについて、実例をあげてできるだけ具体的に考察していきます。</p>	隔年
	社会問題の社会学演習 (疎外と自己アイデンティティ)	<p>社会問題の社会学とは、「これが問題である」とクレームや異議を申し立てる社会成員やグループ、メディアなどによる主観的な活動がせめぎ合って構築されていく「社会問題の構成過程」を明らかにしていく学問です。</p> <p>本講義では、①就業・福祉・教育・地域社会・人間関係などの社会的なつながりから排除され、自らが直面する問題を解決することができない状態に陥っている、即ち社会的排除の状態に陥った個人や集団が、今日の日本社会において、実際にどのようにして疎外されているのか、②そうしたなかで、いかにして自己アイデンティティをみいだすことが可能であるのかについて、履修者のみなさんと一緒に考えていきます。</p>	隔年
	社会問題の社会学演習 (デジタル化によって構成されていく現実)	<p>社会問題の社会学とは、「これが問題である」とクレームや異議を申し立てる社会成員やグループ、メディアなどによる主観的な活動がせめぎ合って構築されていく「社会問題の構成過程」を明らかにしていく学問です。</p> <p>本講義では、具体的なメディア報道を例として取り上げ、現実がメディア報道をつくりだすというよりも、デジタル化によって現実がつくりだされていることを、履修者の皆さんと一緒に検証していきます。</p>	隔年
	比較社会学演習 (多文化社会の理論)	<p>現代世界では、グローバルな人の移動やマイノリティの権利意識の高揚などによって、異なる文化的背景を持った人々が共存する多文化社会のあり方が問われています。こうした中、一つの国という単位で社会の諸事象を考えたり、国籍の一致を自明視したりするような社会観は大きな転換を迫られつつあります。その一方で、近年、世界の様々な地域で排外主義やレイシズムが台頭し、政治にも大きな影響を与え、社会の分断が深まっています。</p> <p>この演習では、複数の文化が共存する多文化社会とはいかなる社会であるのか、多文化社会における文化とアイデンティティはどのように変化するのか、といった課題について、多文化社会をめぐる理論と事例の両方から議論します。</p>	隔年
	比較社会学演習 (人種と民族)	<p>現代世界では、グローバルな人の移動やマイノリティの権利意識の高揚などによって、異なる文化的背景を持った人々が共存する多文化社会のあり方が問われています。こうした中、一つの国という単位で社会の諸事象を考えたり、国籍の一致を自明視したりするような社会観は大きな転換を迫られつつあります。その一方で、近年、世界の様々な地域で排外主義やレイシズムが台頭し、政治にも大きな影響を与え、社会の分断が深まっています。</p> <p>この演習では、人類社会をカテゴライズする「人種」や「民族」といった概念に注目し、それぞれの社会的意味や歴史的背景を学びながら、多文化社会のあり方を追求する理論や基本概念を習得します。</p>	隔年

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	比較社会学演習 (歴史と記憶)	現代世界では、グローバルな人の移動やマイノリティの権利意識の高揚などによって、異なる文化的背景を持った人々が共存する多文化社会のあり方が問われています。こうした中、一つの国という単位で社会の諸事象を考えたり、国籍の一致を自明視したりするような社会観は大きな転換を迫られつつあります。その一方で、近年、世界の様々な地域で排外主義やレイシズムが台頭し、政治にも大きな影響を与え、社会の分断が深まっています。 この演習では、「歴史」と「記憶」に着目し、社会が異なれば人びとが経験する世界や時間の様相も変わってくることから、それぞれの国家や地域で歴史はどのように語られているのか、その背景にはどのような社会的要因があるのかについて議論します。	隔年
	比較社会学演習 (多文化社会としての日本)	現代世界では、グローバルな人の移動やマイノリティの権利意識の高揚などによって、異なる文化的背景を持った人々が共存する多文化社会のあり方が問われています。こうした中、一つの国という単位で社会の諸事象を考えたり、国籍の一致を自明視したりするような社会観は大きな転換を迫られつつあります。その一方で、近年、世界の様々な地域で排外主義やレイシズムが台頭し、政治にも大きな影響を与え、社会の分断が深まっています。 この演習では、「単一民族」的に捉えられやすい日本社会の多民族性に注目し、民族的差別や排外主義といった問題にいかに対峙するか、そして多文化社会はいかに可能であるのか、という課題について議論します。	隔年
	量的社会調査演習	調査の企画から報告書の作成に至る社会調査の全ての過程について、実際に体験することを通じて学習する科目です。前半では、先行研究の検討と調査全体の企画、インタビュー調査とその結果を踏まえた調査票の作成を行います。後半では、前半で作成した調査票を用いて量的調査を実施した上で、データの整理および分析を行い、報告書の執筆を行います。社会調査士カリキュラムのG科目に該当します。	
	質的社会調査演習	この授業では、実際にフィールドワークに出かけて質的社会調査を行います。1年間を通して、調査テーマを決め、仮説を立て、調査準備を行い、調査を実施し、得られたデータを解析して、報告書をまとめるまでを実施します。 フィールドワークのもっとも重要な目的は、一見するとよくわからない、不合理に見える行為の背後にある「他者の合理性」を、誰にもわかるかたちで記述し、説明し、解釈することにあります。とはいえ、人や社会を対象とするフィールドワークは、必ずしも仮説通りに進むとは限らず、その都度現場で考えながら対処していくことがほとんどです。しかし、フィールドワークを通して自身の常識をくつがえし、ものの捉え方をバージョンアップしてくれるような他者の合理性に迫ることができたとき、この上ない「社会的な面白さ」を経験することができるでしょう。この授業ではそのような面白さを得ることを目指します。	
	社会学 文献講読演習 I	この演習は、文献を読むことを通して学生間の議論に焦点を当てたセミナーです。ミシェル・ド・セルトーのテキスト「日常実践のポイエティック」を購読することにより、学生は日常生活への理論的アプローチとして「戦術」の彼の概念的枠組みに従事します。社会学文献講読演習は二部に構成されて、前半となる理論と方法論(Theory and Methodology)と後半となる実践(Practice)に分けています。この授業では、前半を取り上げ、ド・セルトーの理論と方法論を学ぶことを中心に序章、第一部と二部を取り上げます。学生は日常生活への理論的アプローチとして主に「戦術と戦術」(Strategy and Tactics)と権力の関係性を吟味することと戦術となるルペルー(le perruque)や発語行為(Speech Acts)等の概念的枠組みに従事します。その他にMichel Foucault(Bordeaux, Austin (Speech Act)、Henri Lefevre (Production of Space)等のディスコースにも触れながら「戦術」の意味や理解を深めていきます。履修生は、ド・セルトーの『日常実践のポイエティック』を講読することを通じて、ド・セルトーの重要な概念「戦術」について議論することにより、民衆の日常実践の技法と「知」を新たな技法として社会学的研究の理解を深めていきます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会学 文献講読演習Ⅱ	この演習は、文献を読むことを通して学生間の議論に焦点を当てたセミナーです。ミシェル・ド・セルトールのテキスト「日常実践のポイエティック」を購読することにより、学生は日常生活への理論的アプローチとして「戦術」の彼の概念的枠組みに従事します。社会学文献講読演習は二部に構成されて、前半となる理論と方法論 (Theory and Methodology) と後半となる実践 (Practice) に分けています。この授業では、後半に当たる実践に頂点を当て、本の第三部「空間の実践」と四部「言語の使用」を取り上げます。主にウォーキングのポエティックや記号論的分析を工夫して、場所の空間を詩的や比喩的に探検、そして実際に体験します。言葉 (使う、読む等) の工夫や戦術に重点を当てて、Poaching (密猟) の概念を理解し、議論していきます。後半は詩的、幻想的、比喩的、寓話、狡猾の詩学等が主に使用されている為、哲学や理論と実践のバランスを取る為、授業の一部は学外で行われます。各生徒は地元の都市、地図、無意識の行動や日常生活についての考えを意識的に考えるという日常の練習を試みます。ド・セルトールの文献を読むことにより、学生は社会学の基本的な知識と方法を学び、研究プロジェクトの開発における特定の社会問題を調査および分析する方法を学びます。	
	社会学 文献講読演習Ⅲ	この演習は、文学を読むことを通して学生間の議論に焦点を当てたセミナーです。ミシェル・ド・セルトールのテキスト「日常実践のポイエティック」を購読することにより、学生は日常生活への理論的アプローチとして「戦術」の彼の概念的枠組みに従事します。社会学文献講読演習は二部に構成されて、前半となる理論と方法論 (Theory and Methodology) と後半となる実践 (Practice) に分けています。この授業では、前半を取り上げ、ド・セルトールの理論と方法論を学ぶことを中心に序章、第一部と二部を購読します。本の主題は反規律であり、その中で、戦略と戦術の間の概念を区別しています。前者は支配の力に適用され、後者は支配を覆す日常の慣行によって推進されます。消費者として歩いたり、さまよったり、買い物をしたりする日常の習慣は、一般の人が包括的な都市政治を弱体化させる力を持っています。学生は日常生活への理論的アプローチとして主に「戦術と戦術」 (Strategy and Tactics) と権力の関係性を吟味することと戦術となるルペルー (le perruque) や発話行為 (Speech Acts) 等の概念的枠組みに従事します。その他に Michel Foucault (、Bordeaux、Austin (Speech Act)、Henri Lefevre (Production of Space) 等のディスコースにも触れながら「戦術」の意味や理解を深めていきます。履修生は、ド・セルトールの『日常実践のポイエティック』を講読することを通じて、ド・セルトールの重要な概念「戦術」について議論することにより、民衆の日常実践の技法と「知」を新たな技法として社会学的研究の理解を深めていきます。	
	社会学 文献講読演習Ⅳ	この演習は、文学を読むことを通して学生間の議論に焦点を当てたセミナーです。ミシェル・ド・セルトールのテキスト「日常実践のポイエティック」を購読することにより、学生は日常生活への理論的アプローチとして「戦術」の彼の概念的枠組みに従事します。社会学文献講読演習は二部に構成されて、前半となる理論と方法論 (Theory and Methodology) と後半となる実践 (Practice) に分けています。この授業では、前半を取り上げ、ド・セルトールの理論と方法論を学ぶことを中心に序章、第一部と二部を取り上げます。学生は日常生活への理論的アプローチとして主に「戦術と戦術」 (Strategy and Tactics) と権力の関係性を吟味することと戦術となるルペルー (le perruque) や発話行為 (Speech Acts) 等の概念的枠組みに従事します。その他に Michel Foucault (、Bordeaux、Austin (Speech Act)、Henri Lefevre (Production of Space) 等のディスコースにも触れながら「戦術」の意味や理解を深める。履修生は、ド・セルトールの『日常実践のポイエティック』を講読することを通じて、ド・セルトールの重要な概念「戦術」について議論することにより、民衆の日常実践の技法と「知」を新たな技法として社会学的研究の理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会学 英書講読演習Ⅰ	この演習は、英書講読を通じて、受講生同士で交わす議論を中心に行うゼミナールです。授業は主に社会学の創設者として知られるW.E.B.デュボアの『黒人のたましい』を購読します。テキストは一年間の間に四つのセクションに分けて購読します。第一のセクションとなる演習Ⅰは第1章～4章まで取り上げ、ドゥボイスの重要な概念に基づく用語、「カラーライン」、「二重意識」、「パール」、アフリカ系アメリカ人のスピリチュアルを吟味していくと同時に黒人の経験の歴史的背景とアフリカ系アメリカ人に反論するデュボイスの教育哲学について学びます。この講読では、英書を講読するだけでなく、人種、人種差別、人間社会が抱える問題を理論化するために、デュボアによって書かれた名作、「黒人の魂」、の中心的な理論や思考を紹介するとともに、それらの重要な意味や影響について議論していきます。これらの章は主にSlavery and Freedomのテーマに焦点を当てています。	
	社会学 英書講読演習Ⅱ	この演習は、英書講読を通じて、受講生同士で交わす議論を中心に行うゼミナールです。授業は社会学英書講読演習Ⅰで紹介されたW.E.B.デュボアの『黒人のたましい』第一のセクションを前提に、この授業は第二のセクションに当たる第5章～8章を購読します。社会学英書講読演習Ⅰでは、ドゥボイスの理論、思考や本の全体的な定義を一定程度習得しているという前提で、社会学英書講読演習Ⅱでは、歴史や具体的な例を通してその当時の社会背景となる「Reconstruction Period」における経済、教育、生活、農業や社会現象を吟味して把握します。「Reconstruction Period」とは最も重要な時代で1775年から北部の州で禁止されていた動産奴隷制で、1865年にリンカーン大統領の奴隷解放宣言によって南部でようやく廃止された後の瞬間を指しています。パート2は奴隷制から現代経済への移行を描かれた各章を取り上げます。これらの章は主にEducation、Materials and Psychological Racismのテーマを焦点に当てています。	
	社会学 英書講読演習Ⅲ	この演習は、英書講読を通じて、受講生同士で交わす議論を中心に行うゼミナールです。授業はW.E.B.ドゥボイスの名作、「黒人の魂」、を主に取り上げる社会学英書講読演習ⅠとⅡを受講した後に受けるゼミです。すでに社会学英書講読演習Ⅰでは、ドゥボイスの理論、思考や本の全体的な定義を習得（先見の明～章4）、社会学英書講読演習Ⅱでは、奴隷制から現代経済への移行の瞬間である「Reconstruction Period」における社会現象（章5～8）を習得した前提に、この授業では主に「Exclusion and Belonging」のテーマを焦点に当てて章9から12章まで購読します。当時の時代を表す解放後のアメリカ合衆国における黒人アメリカ人と白人アメリカ人との相互作用や黒人スピリチュアルの救いなどを吟味してドゥボイスの「二重意識」や「パール」の定義を寄り深く理解します。	
	社会学 英書講読演習Ⅳ	この演習は、英書講読を通じて、受講生同士で交わす議論を中心に行うゼミナールです。授業はW.E.B.ドゥボイスの名作、「黒人の魂」、を主に取り上げる社会学英書講読演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを受講した後に受ける最後のゼミです。すでに社会学英書講読演習Ⅰでは、ドゥボイスの理論、主に「Double consciousness」と「Veil」の定義、思考や本の全体的な定義を習得（先見の明～章4）、社会学英書講読演習Ⅱでは、奴隷制から現代経済への移行の瞬間である「Reconstruction Period」における社会現象（章5～8）を習得、社会学英書講読演習Ⅲは主に「Exclusion and Belonging」のテーマを取り上げて習得したことを前提に、この授業は意識的、無意識的、構造的な人種差別の関連性（第13章）を吟味することと、主に第14章の「哀しみの歌」を通してアメリカ独特の芸術形態としてのNegro Spiritual奴隷霊歌の歴史と重要性を学びます。奴隷霊歌について詳しく説明された章は本の最後の章となりますが、各章の前に「悲しみの歌の小節」という黒人の霊歌、いわゆる「魂」がエムのように描かれています。最後の章は、本の一貫性と統一性を確保するために、最初の章と一緒にブックエンドになります。本の統一性と一貫性は、残りの章を理解し、Du Boisian Framework、デュボアの複雑な方法論と社会学的概念を学ぶための鍵となります。この本の形式と構造は、Du Boisian アプローチとして戦略的に考案されています。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会学特論演習 (外国人と日本社会)	1980年代半ばに増加が顕著になった日本の在留外国人数は、バブル経済の崩壊以降も増加を続け、深刻な人手不足を背景として近年では300万人近くに達しています。この科目では、日本社会の「国際化」の現状と課題について、日本の外国人受け入れ政策、外国人が直面する労働問題、エスニックコミュニティの形成、国際結婚と外国人女性の置かれた状況、地域社会における外国人との共生、外国にルーツを持つ子どもたちの教育といった様々な点から考察を行っていきます。	隔年
	社会学特論演習 (現代日本社会における エスニシティ)	「民族」は、近代化や国民国家の形成によって消失すると思われていました。しかし、現在でも「民族」に基づく境界は重要な意味を持ち続けており、「民族」の権利を求める運動はむしろ活発になっています。こうした現象をとらえるために、近年になって「エスニシティ」（日本語では「民族性」と訳されることもある）という概念が使われるようになりました。この科目では、「エスニシティ」に関する様々な理論や現象について考察を行いたいと思います。	隔年
	社会学特論演習 (ネットワーク分析の理論 と方法)	ネットワーク研究は、様々な主体どうしの「つながり」に注目する学問領域であり、社会学にとどまらず多くの分野で取り組まれてきました。社会学で言えば、これまで行為者の意識や行動は行為者自身の属性から説明されることが多かったのですが、行為者を取り囲む「つながり」から説明しようとする点にその面白さがあります。この科目では、ネットワーク論の基本的な諸概念について学習した後、パーソナルネットワークに関する主要な研究を踏まえ、ネットワークという視角から現代社会について考察を行いたいと思います。	隔年
	社会学特論演習 (社会的格差と貧困)	社会的格差の深刻化は、21世紀に入ってから先進諸国において共通した問題となり、日本もその例外ではありませんでした。その一方で、格差・階層化といった問題は、社会学において古くから重要であり続けたテーマでもあります。この科目では、社会階層論の主要な理論や分析手法を学び、社会的格差や不平等の状況を把握するとともに、貧困をめぐる問題に焦点を当て、実態を把握するとともに「貧困」とそれがもたらすものについて考察を行いたいと思います。	隔年
	卒業研究	学生自らがテーマを発見し、課題を設定し、調査・資料収集を実施し、作成計画をもとに執筆する卒業論文は、社会学という学問を修得する際に、取り分けても重要な位置を占めます。社会学の学修を通して身につけた能力を活用して取り組む卒業論文は、個人的な関心を一般化・普遍化して自ら課題を設定し、根拠にもとづいて説明する力、他者を説得するために論理を組み立てる力を養うということから、社会学を学んだ集大成と言うべきものです。履修者は、指導教員からの個別指導と、履修者間の議論を通じて、卒業論文を作成します。	
特殊 演習 科目	応用社会学 特殊演習	現代社会において、人間は多面的現実を生きています。例えば、人間関係は、単にリアルな対面的状況だけでなく、情報ネットワークと切り離せなくなっており、学校関係、友人関係、家族関係、職場関係など様々な場面で自己提示することを求められます。さらに、日々の営為は、様々な社会関係ごとに、評価に晒されることで、人々は常に「空気を読む」ことを強いられています。加えて、労働関係や家族関係は社会関係として脆弱化し、格差は経済的なだけでなく文化的なものを含めて日常生活の様々な場面で大きくなっています。本演習では、人々が主観的に抱く「生きにくさ」を社会的な問題として、「バリアフリー」「COVID-19Pandemic」「災害」「社会関係の脆弱性」などを場面として、個々人が抱く「生きにくさ」に社会的に対処していくための課題について議論していきます。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	マスメディア論 特殊演習	デジタル時代のメディアと、私たちはどう関わっていけばいいのでしょうか。インターネットの出現で「マスメディア4媒体」のあり方やビジネスモデルを揺るがすだけでなく、政治や経済、暮らしなどあらゆる局面に影響を及ぼしています。 メディア論特殊演習では、インターネットが社会のインフラとなったデジタル時代を前提に、巨大プラットフォーム「GAF A」やSNSの功罪、データ駆動社会、AIの進化などをテーマにした動画を視聴し考察を深めます。 地元の中国新聞社で編集記者を中心にデジタルメディア開発やCATV局、FMラジオ局、広告企画など幅広く担当しました。その経験を生かし、デジタル時代に大きく変化しているメディアについて多角的な視点から考察を深める力を養いたいと考えています。	
	ジャーナリズム論 特殊演習	デジタル時代のジャーナリズムと、私たちはどう関わっていけばいいのでしょうか。インターネットの出現で「マスメディア4媒体」のあり方を揺るがすだけでなく、世界の政治や経済、戦争、暮らしにいたるまであらゆる局面に影響を及ぼしています。 ジャーナリズム論特殊演習では、インターネットが社会のインフラとなったデジタル時代を前提に、フェイクニュースや言論の自由、国家権力の監視などをテーマにした動画を視聴し、「デジタル時代のジャーナリズム」について考察を深めます。 地元の中国新聞社で編集記者を中心にデジタルメディア開発やCATV局、FMラジオ局、広告企画など幅広く担当しました。その経験を生かし、デジタル時代に大きく変化しているジャーナリズムについて多角的な視点からリテラシーを養いたいと考えています。	
	社会安全政策論 特殊演習	現代社会は、実に多くの場面で治安とセキュリティの問題に直面しています。本演習に於いては、社会安全政策の視点から、地域、学校、企業、国際、交通、情報など様々な生活場面における治安とセキュリティの問題に関して議論を深め、考えていくことによって、21世紀の社会安全政策の在り方を模索していきます。 また、履修生が、社会安全政策の場面で活動経験が出来るような知識・技能の習得を目指すとともに、本演習を媒介として、具体的な社会安全政策と関わりが持てるような機会も提供していきます。 現時点では、地域、学校、企業、国際、交通、情報などの場面で、具体的な問題提起を行い、それぞれの場面における社会安全政策の課題とその対応策を履修生とともに議論する形で、演習形式の講義を進めていく計画です。 (共同(一部)/全15回) (5 田中慶子・6 中根光敏・111 佐藤賢/2回) オリエンテーション、まとめ・総括発表 (111 佐藤賢/13回) 「地域で子どもを守る」(2回・グループ討論/発表・討議)、「警察活動:通信司令」、「不当要求行為への対応」(2回・グループ討論/発表・討議)、「不当要求行為への対応」(発表・討議)、「警察活動:管制センター」、「マンションの防犯対策」(2回・グループ討論/発表・討議)、「暴走族・非行少年対策」(グループ討論・発表・討議)、「警察学校」、「高齢者の安全と安心」(グループ討論・発表・討議)等について講義、討議、発表を行う。	共同 (一部)
社会学 情報 処理 科目	情報リテラシー	情報リテラシーとは、自らの目的を達するために適切に情報を活用することができる基礎的な知識や技能を意味しています。つまり、情報の探索や取得、評価や分析、整理や編集、作成や発信などを行う能力の総体が情報リテラシーです。本講義では、目的に応じて必要な情報を収集または作成し、表現でき、その情報を他の人に伝達できる情報能力を身につけることを目標に学習し、ITの基礎的な知識を習得し、コンピュータを利用して収集、表現、情報のモラル、セキュリティの必要性など情報の操作技術を身につけていきます。	
	社会学 情報処理 I	この授業では、社会学を学んでいくために必要とされる基本的な文書作成についての知識やライティング技術を学んでいきます。具体的には、パーソナルコンピュータの文書作成ソフトを使用して、レジュメや課題レポートなどの作成を行います。同時に、作成に必要なとされる文書作成ソフトの機能についても学習します。	共同

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会学 情報処理Ⅱ	この授業では、社会学を学んでいくために必要とされる「基本的なデータの活用方法」を学びます。具体的には、パーソナルコンピュータの表計算ソフトを用いて、社会学を学ぶのに必要とされる「基本的な表計算」「グラフの作成」「データの活用」などを行います。また、社会学や社会科学だけでなく、Businessでも必要とされる表計算ソフトの操作方法も学びます。	共同
	社会学 情報処理Ⅲ	情報社会の急速な発展に伴い、ITの環境やスキルも変化しており、社会学を学ぶ上で要求される操作能力や表計算、図表、帳票、データベースなどに関する実践的なスキルも変化しています。本講義では、社会学を学ぶ上で要求されている操作能力や表計算、図表、帳票、データベースなどに関する実践的機能を駆使して、表計算処理の操作ができると同時に、表計算システムを効率的に活用できる人材育成を目標に学習します。	
	社会学 情報処理Ⅳ	社会学という学問で必要とされる年齢、性別、学歴、住居、収入、職業、資産など……膨大な量の情報の中から、必要とされている情報を整理し選び出すデータベース機能を学習します。データベースに関する基本的な知識や、通常のデータベースの処理操作、管理、情報を整理し、社会学を学ぶ上で、効果的に利用したり分析ができることを目標に学習します。	
	社会学 情報処理Ⅴ	社会学という学問で必要とされる年齢、性別、学歴、住居、収入、職業、資産など……膨大な量の情報の中から、必要としている情報を整理し選び出すデータベース機能を使用して、通常よりもやや高度なデータベースの処理操作を身につけます。とりわけ、データベース機能を使用して、情報・データを科学的に整理・分析できるようになることを目標に学習します。	
	社会学 情報処理特殊講義Ⅰ	この授業では、社会学を学んでいくために必要とされる文書作成についての高度な知識やライティング技術を学んでいきます。文書作成のスキルや知識を高いレベルで身につけることによって、社会学を研究する上で重要な文書によるプレゼンテーション能力を身につけます。	
	社会学 情報処理特殊講義Ⅱ	情報化する社会において、端末の発達とともに人々の行動ログ、組織・企業等の収支やコストなどさまざまな種類のデータが蓄積されていくが、これら膨大なデータを正しく整理し分析することができれば、これまで目に見えなかった全体像や傾向、関連性を発見することができます。さらに予測も可能となり、よりベターな意思決定を下すことができるようになります。講義では、社会学を学ぶ上で、表計算ソフトと統計的知識とをあわせて学ぶことを通して情報処理及び活用能力を養います。	
	社会学 情報処理特殊講義Ⅲ	社会学を学ぶ上で必要とされている文書作成能力、表計算、プレゼンテーションなどの複数のソフトに関する操作方法や機能を駆使し、より高度な学術的な資料を作成し文書による高度なプレゼンテーション知識と能力を身につけることを目標にします。	共同
	社会学 情報処理特殊講義Ⅳ	本講義では、社会学を学ぶ上で習得した情報処理技能を、より効果的に活用するための実践力を身につけ、表計算ソフトによって分析し、図表などを作成する操作能力を身につけることを目標にします。	共同
	社会学 情報処理特殊講義Ⅴ	この講義を通して、在学中はもとより卒業後も修得した社会学的知識と応用力を活用するにあたり、ITの利点を理解し「文書作成とそれらを総合的に管理する能力」を高いレベルで身につけ、社会学的知識を実社会へと活かし、貢献できる人材を育成することを目標としています。	
	Web調査論	講義の目的は、ウェブサイトを通じて情報収集（調査）をするために必要となる技術を身につけることです。講義では、ウェブページを作成するための技術として、HTML5とCSS3を取り扱います。ウェブページ作成技術は、個人を含むどの立場の人にとっても、情報収集（調査）の手段を広げるものです。講義では、ウェブページ作成の基本となるHTML5/CSS3を記述する力および自分自身で独自のWebサイトを構築運営する力を身につけます。	

授 業 科 目 の 概 要				
(人文学部社会学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	社会学 情報処理特殊演習Ⅰ	現代社会では、様々な分野において、パソコンを利用した合理化、効率化が進化しています。こうした傾向においては、データをもとに計算や記録、整理する知識をもった人材が必要とされています。 本講義では、社会学を学ぶ上で、情報の仕組みを理解することにより、情報処理に必要な知識だけではなく、実践的な情報処理知識とスキルを身につけることを目標に学習します。		
	社会学 情報処理特殊演習Ⅱ	現代社会では、組織の大小規模を問わず、事務や管理に役立つ記録、計算、分析力などに関する基本的知識や情報処理能力が必要とされています。本演習では、組織の事務だけではなく、社会状況を把握し、実践的な情報処理能力を活用することを目標に学習します。		
資格課程に関する科目	教職に関する科目	教育原理	教育を人間に固有の社会的営みとして捉え、「教育とはなにか」「人間(子ども)にとってなぜ教育が必要なのか」といったテーマについて、教育の基本的な理念・歴史・思想を知ること、教育についての理解を深めていく。各回のテーマに関わる参考資料(文献やデータ、映像などのメディア作品を含む)を検討しながら、ワークシートを用いた省察を課すことで、受講生が主体的に学びを深めるための機会を提供する。その過程で、あらためて教育の魅力と不思議を再発見することが目指される。	
		教職入門	本講義では、教職の意義や教師の役割、職務内容等に関する学習を通して、自分が本当に教師という仕事に情熱をもって取り組むことができるかどうかを考える機会を提供します。自分の描いてきた教師像、子ども像、学校という場を現実のそれらと比較して、これからの教育に関する研究の視点を再構築してもらいたいです。	
		教育心理学	心理学の知見や理論をもとに、「教育」にかかわる様々な疑問について考えていきます。教育心理学の基本的な知識や概念・理論を理解した上で、「教育」という複雑な営みを様々な視点からとらえ、自らのことばで説明できるようになることを目指します。	
		教育制度・教育課程論	現代の公教育を支える法的構造に基づいて教育制度を理解した上で今日の制度改革を検証します。また、これからの学校にとって大きな課題である学校と地域の連携及び学校安全の対応についても取り扱います。さらに、学校での教育課程編成のあり方を、学習指導要領に示された国の基準や教育委員会の示す地方の基準を踏まえながら明らかにし、その今日的な課題(ICT教育を含む)を現行の幼稚園教育要領や学習指導要領の研究を通して把握します。	
		特別なニーズ教育の基礎と方法	通常の学級にも在籍している発達障がいや軽度知的障がいはじめとする様々な障がい等により特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解します。	
		道徳教育論	幼児期から思春期までの道徳性の発達過程を概観するとともに、道徳に関する国内外の主要な理論を紹介し、道徳性についての基本的な理解を図ります。この理解に基づいて、小学校・中学校における道徳教育の意義やねらい、内容、指導方法等について、具体的な実践事例を活用しながら、道徳の授業に必要な基礎的知識や能力の育成を目的とします。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	<p>本講義では、総合的な学習の時間における横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動の展開に必要な基礎的知識を学習し、総合的な学習の時間の展開に必要な基本的な知識や技能、資質の獲得を目指します。</p> <p>さらに、小・中学校における望ましい集団活動を通して、児童・生徒の自主的・実践的な態度を育成し、自己を生かす能力を養うことを目標とする特別活動の意義や課題などについて理解を深め、学校現場における実践事例から特別活動を進めるにあたっての小・中学校の体制や教師の指導方法について検討します。</p>	
	教育方法論 (情報通信技術の活用を含む)	<p>この授業は、みなさんが実践場面(授業場面/保育場面)を「引いた視点/近づいた視点」の両方で見える力を身につけることを目標としています。この力は、教育実習での授業観察や自分自身の授業を振り返る時の視点につながります。</p> <p>そこでまず、教師が授業をデザインする場合の構成要素について学習します。</p> <p>次に、授業場を支える時間構造(長期的時間/短期的時間)と授業目標との関連性を理解していきます。これらの基本的理解をもとに、教材・教具およびメディアの教育的利用の可能性と留意点を、体験学習を通して考えていきます。</p> <p>最後に、目標と展開との関連性、教材・教具の利用をふまえて、それらをつなぐ教師のコミュニケーション(指導技術)の理解を深め、授業観察を通して授業を分析的に見ること、学習指導案を組み立てることを練習していきます。</p>	
	生徒・進路指導論	<p>この講義では生徒指導や進路指導の意味や意義を理解するとともに、指導の理論や方法についての知識を身につけ、実際に児童生徒を指導できるようになることを目標としています。人格形成の途上にある児童生徒の心身の発達に着目し、心理学的視点から生徒指導・進路指導の諸問題について具体的な教育実践の事例や映像資料等をまじえながら考えていく予定です。</p>	
	教育相談	<p>教員を目指すうえで必要な教育相談全般についての知識の習得と児童生徒又は保護者への教育相談的手法について学びます。</p> <p>主な内容：①教育相談の意義、②カウンセリングの理論と技法の習得、③教育相談における諸問題、④他者理解・自己理解を深める</p>	
	中等教育実習 事前事後指導	<p>中等教育実習Ⅰ・Ⅱへの参加に際し、まずその実習の意義を前もって理解するため、事前指導を行います。実習後は、その体験によって得られたものを再確認し、教員免許状取得に向けた教員として求められる教育実践力の再確認を事後指導で行います。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(37 永田成文/6回) 事前指導：教育実習に際しての心構え、教材研究の方法、学習指導案の作成法、事後指導：授業に関する体験の共有、教員の仕事に関する体験の共有等</p> <p>(39 西森章子/2回) 事前指導：教育実習の意義、教職員の職務等</p>	オムニバス方式
	中等教育実習Ⅰ	<p>現在の中学校、高等学校教員には、まず担当教科の授業を実施する能力が求められる。また、生徒指導や学校の管理・運営など、多方面にわたる職務を担当する能力が必要とされます。</p> <p>教育実習は、教員免許状取得のための最終段階として、学校の教育活動を教員の立場から実体験することにより、教育実践力の獲得を目指します。具体的には、実習校において、生徒の学校生活、指導教員による授業実践や生活指導その他の諸活動、学校管理・運営等についての観察を行い、教員としての立場からのそれらの理解を深めます。また、指導教諭の指導のもとで、教材準備、学級運営、生徒指導等の補助にあたり、教育実践を体験します。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会科学)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中等教育実習Ⅱ	現在の中学校・高等学校教員には、まず教科の授業を担当する能力が求められる。また、生徒指導や学校の管理・運営など、多方面にわたる職務を担当する能力が必要とされる。 教育実習は、教員免許状取得のための最終段階として、学校の教育活動を教員の立場から実体験することにより、教育実践力の獲得を目指す。 具体的には、実習校において、指導教諭による授業実践や生活指導その他の諸活動、学校管理・運営等について観察を行い、学校教育のあり方についての理解を深める。指導教諭の指導のもと、教材準備を行い、実際の授業実践を行う。また、学級運営、生徒指導等の補助にあたる。	
	教職実践演習(中・高)	この授業は、教員免許法で定められた教員免許取得の必修科目です。 第1ステージでは、これまでの学びや体験を振り返って教員に求められる資質・能力を概観し、各自の課題の発見を目指す。課題の明確化を図ります。 第2ステージでは、広島県および広島市教育委員会の指導主事を招いて、広島県と広島市の教育の現状について講演を聴いて認識を深めます。 第3ステージでは、現在の教育課題からいくつかのテーマを選定して、指導教員による講義、KJ法をつかってグループ学習を行います。また、その後、グループ討論を中心とした学習によって理解を深め、グループ間のパネルディスカッション形式によるグループ発表により、教育に関わるいくつかの課題に関する認識を深め、教員としての自覚と資質の定着を図ります。	
	人権教育論	「人権が重要である」ということは誰もがわかっていることです。しかし、「自分のこと」としては実感できず、「他人事」のように感じている人も多いことでしょう。本講義では、現代社会で生じているさまざまな人権問題をとりあげ、「自分」と重ねながら具体的に学んでいきます。人権の概念やその歴史の変遷をふまえ、部落問題やジェンダー、障害者問題などを通して私たちの生活や社会のあり方をとらえ直し、改めて理解することを目指します。	
	社会福祉論	なぜ人類は「社会福祉」制度を国家の機能として持つことにしたのか、「社会福祉」はどのような方法や内容で実践されることが望ましいのか、普段はあまり考えたり、議論することがないと思います。一方で、失業などによる生活困窮者対策、障害のある人の日常生活支援や自立支援、就労対策、高齢者の介護サービス、虐待などによる要保護児童対策、子育て家庭の支援対策など、現代社会にとって「社会福祉」の必要性は質・量ともに増しているだけでなく多様化、包括化し、社会保障費の増加、消費税や社会保険料の負担率の上昇となって、皆さんの生活に少なからず影響を与えています。それだけでなく、福祉サービスや対人支援を必要とする「人」や「問題」の存在は、この社会の構成員である皆さんにとって無視できないテーマになっているはずです。 本授業では、現在の社会福祉の成り立ちや培われてきた理念の概要を学び、日本の法律や制度について、その特徴や課題を把握していきます。また、どのように支援することがクライアントの問題解決力の生成に役立つのか、実践的な相談支援(ソーシャルワーク)の理論と技法について学びます。	
	特別支援教育概論	「特別支援教育」に関わる、学校教育の場と体制、在籍する代表的障害種や、医療的ケアについて、さらには特別支援教育コーディネーターを中心とした校内・地域支援体制などについて概説します。その後、参加者による議論を行います。	
	中等社会科教育法 (地理歴史分野)	授業づくりを学びます。実際に学校で授業を行う際に必要となる教材研究、学習指導案作成、発問・指示・板書の方法、ICT活用指導力などの教育技術を身に付けます。そして、自分で作成した学習指導案をもとに、実際に交代で模擬授業を行い、相互評価と振り返りを行うことにより、よりよい学習指導案に修正していきます。	
	社会科・地理歴史科教育法	日本の地理・歴史教育の歴史を、高等学校地理歴史科学習指導要領の変遷などにより理解したうえで、それらをもとに現行学習指導要領における地理歴史科の目標、育てたい学力について考察します。次に、こうした基本的な理解をもとに、高等学校地理歴史科の学習指導要領について科目ごとに、その目標、内容、指導上の留意点と情報技術の活用法を理解する。さらに、各自、生徒の認識や実態を踏まえて授業の教材を開発し、学習指導案を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部社会学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中等社会科教育法 (公民分野)	中学校社会科公民的分野は、我々の日々の生活に最も身近な内容を扱うものであり、社会科の公民としての資質・能力の育成という究極目標に直接かかわる分野であることを捉えます。 公民的分野の目的・内容・方法と問題点について考え、授業をつくりあげていくための教材研究のあり方について考察します。	
	社会科・公民科教育法	まず、高等学校社会科から公民科の学習指導要領への変遷について理解し、これらをもとに公民科の目標、育てたい学力、特に生徒の社会認識について考え、その評価の工夫についても考えます。 次に、こうした基本的な理解をもとに、高等学校公民科学習指導要領について、科目ごとに目標や内容、実際の指導上の留意点を理解します。 さらに、生徒の社会認識レベル等をふまえた教材研究と(単元の計画を含む)学習指導案作成をして、模擬授業と協議を行い、他学生や教師から出された改善点や改善策を手がかりにして自分の学習指導案の改善を行います。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。